

山口陽

サークル 青豆腐
ねろましん

原作・illustration

人気原作！ 最もハードなエルフ蹂躞劇

美少女
文庫

豊穣の隷属エルフ

コロシアムの贄騎士





敗北したらララノアを
待つ運命は？

家畜小屋こそが
エルフの王国



豊穰の隸属エルフ　　くコロシアムの贄騎士く

山口陽

原作・イラスト／ねろましん

- プロローグ 人間の国に潜入したエルフ騎士の憎悪
- 第Ⅰ章 闘技場——敗北処女喪失で晒す失禁アクメ
- 第Ⅱ章 尻穴を犯され達し、守ったエルフの誇り？
- 第Ⅲ章 堕ちた同胞たちと見世物キヤットファイト
- 第Ⅳ章 生き延びるため土下座フェラと公開種付け
- 第Ⅴ章 憧れの騎士は今や×××中毒の肉穴に……
- エピローグ 母子、感動の再会と幸運な奴隷の王国

バリステン王国
貿易都市バルローニ

人間の国で
最大の奴隷売買の街。
エルフは奴隷身分しかいない
この街に潜入していた。
我が姫、アルフィリア姫が
いるという情報を
手に入れたからだ。

しかし
人間の街というのは
想像より酷いな

普段であれば厳しい検問があるが
出入りが多い祭りの時期を狙い
楽に潜り込めた。

乱雑に建てられた家
澱んだ空気
腐ったような水の臭い

サ

そして街のあちこちで
裸同然の姿で
立っている同胞達

彼等は奴隷身分で
男も女も関係なく
人間たちにその
美しい体を安値で買われ…



路地裏で人目もはばからず
まぐわっていた。





私の祖国『東の森の国』は
170年前、人間共の卑劣な
策略によって滅ぼされた。

同胞の憐れな姿に胸が痛む
これも全て人間共のせいだ！



和平のために人間の王に嫁いだ
アルフィリア姫様…



しかし人間共は
その姫様を人質にして
東の森の国に攻めてきたのだ。



姫様救出のため
全軍を出す
それを待ち受けていた
人間の軍に大敗し
我らエルフの王も討たれた。


騎士見習いで
幼かった私は
戦闘には参加出来ず
敗残兵と民達と共に
同胞の『北の森の国』に
亡命した。



捕まってしまった王族は
アルフィリア姫様だけでなく、

母后ベアトリス様と
弟君ビヨルン様も…

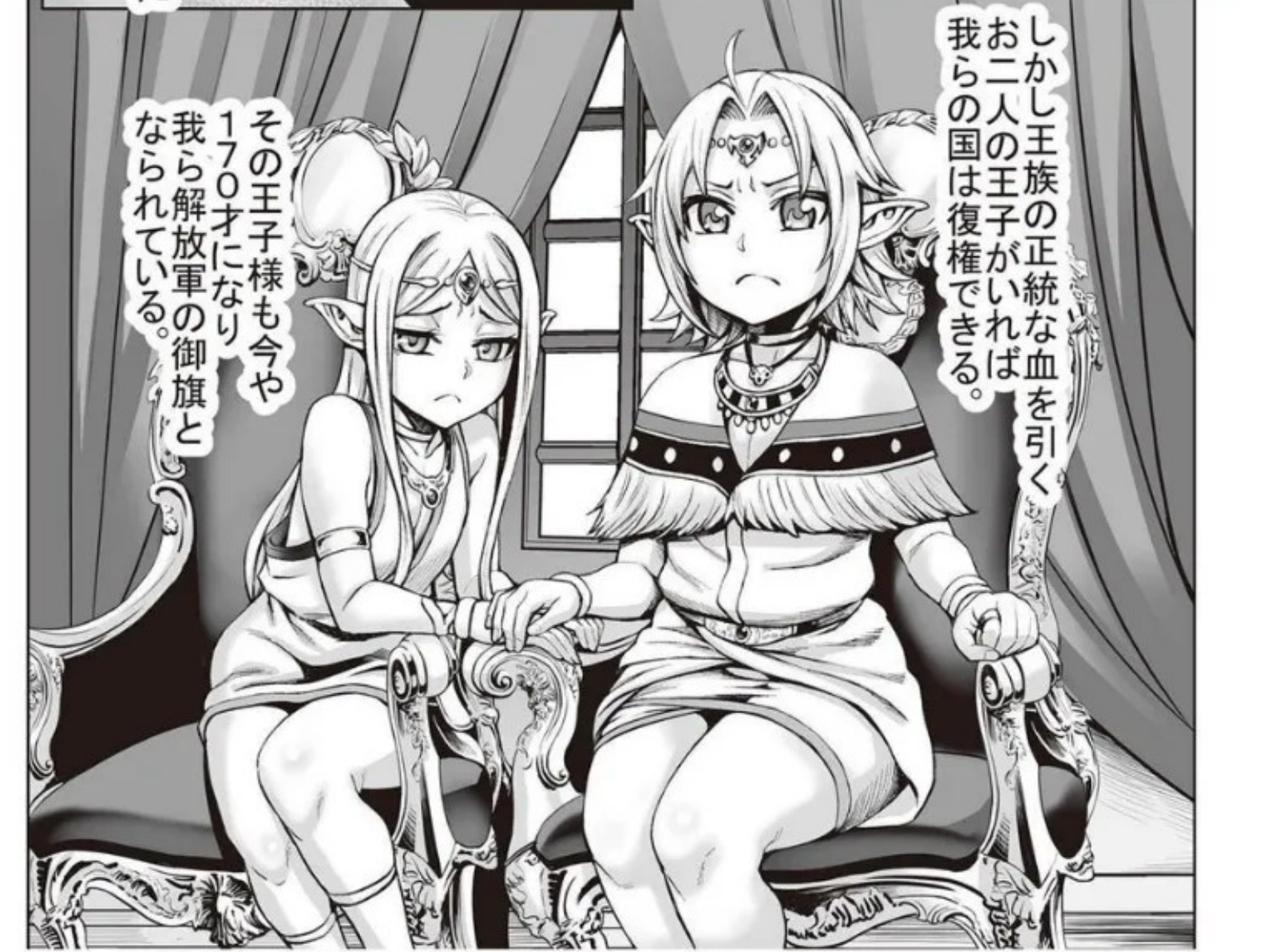
そして私の師でもある
騎士ヴィルヘルミナ様も
行方不明に…



北の森の国の支援で私達は
東の森の国解放軍を結成し
幾度も王族救出を試みた。

しかし
人間共の守りは堅く
救出出来たのは
二人の赤子……
アルフィリア様と
ベアトリス様の御子

その父親はなんと弟君ビヨルン様だった……
人間の戯れに、そしてエルフ王族を穢すために
近親相姦を強要され産まれた呪われた子。



しかし王族の正統な血を引く
お二人の王子がいれば
我らの国は復権できる。

その王子様も今や
170才になり
我ら解放軍の御旗と
なられている。

そして解放軍は
行方知れずとなっていた
アルフィリア様の所在をつかみ

私は密偵として
単独で潜入したのだ。

アルフィリア様…

私が最後に拝見したのは
姫様が嫁ぐ日、
壮行パレードの花嫁姿の時…

今でも鮮明に憶えている
森の宝石と称えられるほど
美しく、王気に満ちた御姿に
目を奪われた

いくら人間共に
御体を穢されようと
あの気品とカリスマは
不滅のものだ





今度こそ必ず
お救い致します!!

すまない…
アルフィリアという名の
エルフを知らないか?

あ?
お前他所から来た
エルフ
奴隷か?



本物かは
知らねえけどよ
アルフィリアって
ヤツはこの先の
広場にいるぜ

なんせ祭りの
主役だからな

!?



これでやっと姫様を…!!
我が祖国を取り戻せる!!



やっと
見つけたっ!!

アルフィリア様!!

おら売国姫！
チ×ポが欲しいんだろ！
もつと媚びろや！！

おははは

おははは

おははは

おははは

おははは

ははは！
何本マ×コに
入るんだよ
この売女の穴は！

がははっ！
一番巨根の
馬を持ってこい！

おははは

あ……
アルフィリア……様……？

人間共め……！！

おははは



プロローグ 人間の国に潜入したエルフ騎士の憎悪

鮮血が舞い、漂う鉄の臭いに鼻を刺激される。

それはわずかに身を震わせた矢先に糸が切れたように転がった。

月明かりに照らされた地面が赤黒く染まっていく。夜間とはいえ、悲鳴の一つでもあげれば誰かが駆けつけてくることもあったかもしれないが、男は目の前の惨劇に竦んでそれどころではなかった。

こんな路地裏の区画に、気紛れでも足を運ぼうとする酔狂な者などいるはずがなく、男は地に倒れ伏している仲間に自分の姿を幻視した。

後退ろうとするも、恐怖のあまり動けない。辛うじて正面に立つ女を睨むが、震えを止められず虚勢を誤魔化せていなかった。

「汚らわしい人間が……」

女はまるで汚物を見るような瞳を向けながら無機質な声で呟くと、血が滴るナイフを振った。付着していた血が飛び散って男の顔まで飛び、冷酷な輝きを取り戻した凶刃に息を呑ん

だ。

「え、エルフのくせに……こんなことをしてただで済むと思ってるのか！」
辛うじて声を絞り出す。

少なくとも男には、このような事態に陥る心当たりがなかった。

まして女はエルフ。この国ではエルフの大半は奴隷で、市民権を得ているごく一部の例外を除いて地位が低い。そんな者が犯罪に手を染めれば、待ち受けている未来は悲惨なものでしかない。

それほど恨まれているのであればそれまでだが、男は特別にエルフを虐しいたげた意識はなく、せいぜい路上で娼婦として買って楽しんでくくらいだ。

この街では特別珍しくもない。そもそもこの女エルフには見覚えすらなかった。

「こんなこと、だと？ 私はお前たちに家畜小屋の場所を尋ね、用がなくなつたから処分しただけだが？」

エルフが淡々と返すと、男は絶句した。

「ふ、ふぎけるなよ！」

「ふぎけてなどいない。姫様の居場所を突き止めることが、私に課せられた最優先事項なの

だから」

「だから答えただろうが！」

彼女は地位の低いエルフ。情報もタダではない。報酬として、娼婦が自分を買った男と路地の奥へ消えることだつてある。彼女はそのつもりで自分たちをこの場に誘つたものだと思つていたので。

殺されるなど、微塵も想像していなかった。

「どこかで私のことを漏らすとも限らないからな」

「お、俺は余計なことを言つたりしねえよ！」

男が必死に懇願すると、エルフは呆れたように大きくため息を吐いた。

「お前は一つ勘違いをしている。私は人間が大嫌いだ……エルフの尊厳を踏みにじる人間など、生きていくだけで反吐へどが出る」

話の通じない存在を前にして、男は自分の未来を確信する。

「お前、狂ってるぞ……奴隷がこの街で生きていられるのは誰のおかげだ!？」

「狂っているのはお前たち人間だ！」

初めて女の顔に感情が露わになる。

これまでの無感情で淡々としたものではなく、瞳に憎悪が灯つて声を荒げた。

牙を剥き出しにした獣のような激情に晒された男は、震える足に鞭を打つと背を向けて駆けだした。

「――逃がさない」

冷たい声と同時に、首に熱を伴った激痛が走った。

それは刹那せつなの出来事だったが、自分が刺されたと認識できてしまった。

無駄だと理解しつつも必死に意識を保とうとするが、力任せにナイフを振り抜かれて頸椎を切断されると男の意識は永遠に戻ることはなかった。

「こんな人間どもに我らの東の森の国は……っ」

女はこみ上げてくる激情を抑えきれず、物言わぬむくろ軀と化した男を蹴り続けた。

百七十年前、エルフたちが暮らす東の森の国は、当時加速度的に勢力を拡大させていた人間の国であるバリステン王国と戦争を繰り広げていた。

豊かな森の恵みを享受して、穏やかに暮らしていたエルフは本来争いを好まないため、組織的な戦闘の技術も知識も乏しかった。

エルフの森は土足で踏み荒らされ、村や町が次々と襲われた。

そして日増しに人間の魔の手が迫った東の森の国は、ある決断した。

その美しさは人間の世界にも名が知れ渡るほどの東の森の国の姫君——アルフィリアが、バリステン王国ベルグ王に嫁ぎ、和平を結ぶということ。

やがて世継ぎが産まれれば、両国のかすがいとなり、いつそうの繁栄をもたらす——はずだった。

東の森の国は長命な種族であるがゆえに、短い生涯を謳歌する人間の強欲さを理解できていなかったのだ。

最初から和平など考えていなかったベルグ王は、アルフィリアを無残に凌辱し、快樂漬けにしてエルフの尊厳を徹底的に踏みにじった挙句、戦争に利用し、争いを激化させた。結局、敗戦した東の森の国はバリステン王国の植民地となり、エルフは奴隷にされた。

そして現在、豊かだった森林は伐採され、山は削られて炭鉱や金脈の穴だらけ。そこに住んでいた動物も乱獲され、毛皮や角が高額で取引されている。

エルフは奴隷としてバリステン王国に愛玩用に出荷される。辛うじて戦火を逃れて隠れ住んでいた者たちも、エルフ狩りによってほとんど狩り尽くされてしまい、元東の森の国では純血のエルフは希少価値が高くなり、奴隷市場では高値で扱われていた。

だがすべてのエルフがそうだったわけではなかった。

逃げ延びた者の中には、新米であることを理由に見逃がされた若い騎士たちもおり、彼らは同じエルフの国である北の森の国へ亡命を果たし、後に解放軍を組織して再起を誓ったのだ。

そして一度だけ、敗戦後間もない頃に奴隷に落とされた王家の救出を試みたことがあったのだが、奴隷に堕ちたエルフは何度も売買され、その都度所有者を転々とする。それは王家の姫君たちも例外ではなく、解放軍はアルフィリアや母后ベアトリスら王族の所在を掴むことができなかつた。

それでも決死の搜索の末、辛うじて救出に成功したのはアルフィリアとベアトリスの実子である二人の赤ん坊だけだった。

奴隷のエルフが身ごもることは、その扱いから想像に難くない。しかも赤子たちの父親は、アルフィリアの実弟でありベアトリスの実息ビョルン。人間の戯れによって近親相姦で生まれた禁忌の子なのだ。

他にも彼女たちの血を継ぐ子は存在したが、人間と交わった子は必ずハーフエルフとなり、耳など外見こそエルフに似ているが寿命は人間並みとなってしまう。

助けた赤ん坊は本来なら近親により忌み子とされる。しかし正当な王家の血筋を受け継いでいるのは救出に成功した二人だけ。幸いにも共に男子であるため、二人は人間から祖国を

取り戻すために東の森の国の解放軍の御旗となった。

北の森の国もかつてはバリステン王国と争っていたが、今では不可侵条約を結んでいる。ところが、エルフ狩りによって東の森の国からエルフがいなくなったことで、人間の奴隷商は国境沿いにある村を襲うようになった。

しかしバリステン王国はそのような事実はないと否定しており、大国との争いは避けたい北の森の国にとっては頭の痛い問題だった。

そこで、野蛮な人間を追い出すために、亡命してきた東の森の国の解放軍を受け入れ、援助していた。

とはいえバリステン王国は将来的なエルフの反乱にも備えており、エルフ同士による純血の出生を認めていないため、二人の王子の存在を公言することができなかった。

そのため、かの戦火を逃げ延びて各地に散った同胞を探して解放軍を大きくするだけでも相当の時間がかかってしまった。

どうにか時を経て組織としての体制は整えたものの、未だに情報が足りない。以前はアルフィリアら王家の所在を掴むことすらできなかった。

同じ轍を踏むわけにはいかないと、ひとまずバリステン王国貿易都市バルロー二へ解放軍の密偵としてララノアが単独で潜入することになった。

ララノアは東の森の国の騎士だった。

もつとも当時はまだ幼く騎士見習いでしかなく、戦場に出ることも認められない未熟者ではあったが、エルフとしての誇りと王家への忠誠心は誰にも負けないと自負していた。

アルフィリアが人間の王に嫁ぐために、国を出立する式典では見習いも含めて騎士団全員で見送ることとなり、それがララノアが最後に見たアルフィリアの姿となった。

今でも、祖国を守る覚悟を秘めた凜とした佇まいが目に残っている。

以降はよりいっそう尽くし、姫が愛した国を守るために改めて立派な騎士になることを誓ったのだが、祖国がバリステン王国の侵攻を受けていると知ったのは、ララノアたち見習いが国を離れて演習を行っていた折だった。

しかし時すでに遅く、救援に駆けつける前に王が人間の手で討たれたという報が届き、敗残兵となったララノアたちは国交のあった北の森の国へ助けを求めることしかできなかつた。

忠誠を誓った祖国の危機に駆けつけることもできず、蹂躪じゅうりんされる同胞たちの無事を遠くの地から祈ることしかできなかつた絶望感は、百七十年経った今もララノアの心に棘として刺さり続けている。そしてこの都市に向かう途中で、変わり果てた森の惨状を目の当たりにし

たことで、今になるまで助けに来られなかった己の弱さを呪うと同時に、人間に対する憎悪が膨れ上がった。

今のララノアは、かつての弱く未熟な頃とは違う。必ずアルフィリアら王家に連なる者を探し出し、東の森の国から人間を一人残らず駆逐してやる——と。

もつとも、今回の目的は情報を集めて姫や母后、王子らを見つけ、その情報を北の森の国にいる解放軍に知らせて救出作戦を練ることだった。

ところがララノアは目の当たりにしてしまった。

アルフィリア祭——かつて肉欲に溺れて国と民をバリステン王国に差し出したと伝えられている売国姫アルフィリア。そんな姫の淫乱な肉体を慰めるため、衆目環視の中で姫役のエルフを犯すという狂気の祭りを。

そして慰み者にされながら悦び喘いでいるエルフの姿を。

集まっている人間たちは、犯されているのは姫役を務めている頭のおかしいエルフだと思いきや、いこんでいる様子だったが、ララノアにはわかってしまった。

彼女が本物のアルフィリア姫であると。

風に靡けば長い髪が煌めき、彫像のように端正な顔立ちで幻想的な美貌の持ち主だが、その微笑みは爛漫と咲き誇る花の可憐さを思わせ、美しくも素朴さを感じさせて誰からも慕わ

れていた。

王族として気高い品性と優雅なる振る舞いもさることながら、その美貌から森の宝石とさえ称えられていたほどで、豊かなバストやくびれたウエストは異性のみならず同性のララノアでさえ見惚れるほどだった。

ところがようやく発見した姫君は、透き通るように白かった肌は見る影もなく、いくつものタトウを彫りこまれ、滑稽なほど肥大化した乳房は垂れ下がり、子宮にいたっては飛び出していた。

それだけでなく、代わる代わる男たちに犯されては獣のようなよがり声をあげ、かつての面影など見る影もない。しかしどれだけ変わり果てていようとも、己が忠誠を捧げた主を間違ふことはない。彼女がどんなに過酷な環境に置かれていたのか、否応なく理解させられると同時に、なぜもつと早く助けられなかったのかと、自身の不甲斐なさをこれほど悔やんだことはなかった。

そんなララノアの心中を逆撫さかなでするように、周囲の人間たちは無様によがり狂うアルフィアを嘲笑い、売国姫だの淫乱姫だのと罵り続けていた。

何も知らずに為政者に踊らされている民衆に殺意すら覚えた。

当時戦時下だった国を憂いて和平のためにバリステン王国へ嫁いだというのに、凌辱された挙句に売国姫の汚名を着せられて利用されたのだ。

そして目の前の惨状が、彼女の百七十年間を物語っていた。

人間の国はエルフの国と比べると人口密度の高さは圧倒的だった。

道端で声を張り上げ、果物や肉などを売る商人たちや、老若男女にかかわらず通りを所狭しと行き交っている。長命のエルフに対して、短命な人間は頻繁に繁殖を繰り返しているため、自然と数が多くなる。自然の中で穏やかに暮らしていたエルフにとっては騒々しいとか思えないが、よく言えば活気のある光景だった。

しかしそれらがすべてエルフの犠牲の上で成り立っていると思うと、ララノアには彼らが悪魔や魔物と同じ存在としか見られなかった。

人間たちは笑顔の裏でエルフを奴隷と蔑み、売買をしていると考えるだけで反吐が出る。

ララノアの任務は王族の所在を突き止めることであって、憎い人間を感情に任せて断罪することではない。しかし、実際に平然と同胞を弄ぶ光景を目の当たりにすると、憎悪が膨れ上がってしまう。悠長に事を構えている間も、アルフィリアには想像を絶する仕打ちが繰り返されているのだ。

まだ他の王族の所在は掴めていないが、もはやララノアの頭はアルフィリアを救うことし

か考えられなくなっていた。

「——ここに、姫様が」

居住区から離れた区画にそれはあつた。

荒家としか形容できない木造の小屋——いわゆる家畜小屋だつた。

事前に情報を得ていたとはいえ、実際に姫が繋がれているという小屋を前にしてララノアは絶句した。

「人間はどこまで、姫様をお……っ！」

馬や豚と同列の扱いに、叫びたくなる衝動を砕けんばかりに歯を食いしばり、血が滲むほど拳を握りしめることで抑えこむ。己の中で優先順位を言い聞かせながら、張り詰めた風船のように膨れ上がった憤怒に呼吸を荒げて小屋へ近づいた。

「見張りすら置いていないのか……」

物陰から周囲に視線を巡らせるが、見回りの姿どころか気配すら感じられない。あまりにも警備が手薄すぎた。

容易く侵入できるのは僥倖だが、まったく警戒されていないというのは、本当に家畜程度

の価値しかないと揶揄されているようでもあった。

窓から中を覗けば、裸にされたエルフたちが首に縄をかけられて柵に繋がれてるのが見え
た。

咄嗟に彼女たちも解放したい衝動に駆られるが、ララノアだけでは連れ出せる人数はせい
ぜい一人か二人が限度だ。

今はアルフィリアの救出が最優先だと言いつつ聞かせ、救えない同胞に己の無力さを謝罪しな
がら順番に小屋を覗いていくと、ほどなくして獣じみた呻き声が聞こえてくる。

「……まさかつ」

ララノアは息を呑んだ。

艶を含んだ声に、昼間に見たアルフィリア姫の姿が脳裏を過る。よぎ

騒ぎを起こせば警備が厚くなって救出が困難になるため、無残な同胞の姿を目撃しても堪
えてきたが、もはや我慢の限界だった。

百七十年もの間弄んできたというのにまだ足りないのかと、中に何人いようと皆殺しにす
るつもりでナイフを握りしめ、小屋に飛びこんだ。

小屋の中にいた人間は男が一人だけだったが、いきり勃たつたペニスでアルフィリアを背後

から貫きながら、肥大して垂れ下がった乳房を握りしめて、まるで手綱のように引っ張って笑っている姿がそこにあつた。

当のアルフィリアは無様な姿を晒しながらも苦悶に呻くどころか「チ×ポ、チ×ポお♡♡」と、顔を淫らに蕩かせているのだが、ララノアには主君の穢した下賤な人間の姿しか映っていないかつた。

「きいさまあああああつ!!」

他に人影はない。目の前の男さえ葬れば解放軍の念願が叶うのだ。

激情に駆られたララノアは、姿を認めた瞬間にアルフィリアを嘲る男に襲いかかっていた。

しかし、ララノアは己の役割をまっとうするべきだった。

怒りに支配されてしまったがために思慮が足らなかつたのだ。

この男が何者であるかを。

この都市で、最も敵対するべきでない相手が誰であるかを――

第I章 闘技場——敗北処女喪失で晒す失禁アクメ

「ようこそ。領主様に代わってこの街を取り仕切っているシャウアよ」

「なん……だと……？」

ララノアは己の耳がおかしくなったのかと、疑わずにはいられなかった。

昨夜、家畜小屋で凄惨な仕打ちを受けていたアルフィリアを救うために飛び出したものの、感情に任せたララノアとは対照的に男は狡猾だった。

その喉元を斬り裂こうとナイフを振るった瞬間、男は慌てるでもなく冷静にアルフィリアの首を掴んで己の盾としたのだ。

解放軍の一員として潜伏していた以上、本来であれば騒ぎを起こすなどご法度である。まして絶対に捕まるわけにはいかない。あつさりと出鼻を挫かれた時点で男と距離を取るなり、任務失敗として撤退するべきだったのだ。

しかしララノアは、その判断を下すことができなかつた。

それどころではなかつたのだ。

目の前に突き出されたアルフィリアは、王家として、エルフとして、そして女としての尊厳さえ弄ばれ、涙と鼻水と涎で顔中をグシヤグシヤに汚しながらも、はつきりと笑みを浮かべていた。

祭りで一度目の当たりにはしていたが、見間違いであつてほしいと内心で願っていた。しかしそこには、かつて森の宝石と称されて敬愛していた美しい姫君の面影はどこにも見受けられなかった。

東の森の国の生き残りとして彼女を必ず助け出すと誓っていたはずが、あまりの姿に頭が真つ白になってしまった。

時間に見ればほんの数秒だったが、それが致命的な隙となつた。

アラノアが気がついた時には、男の拳が腹部にめりこんでおり、殴り飛ばされて壁に頭を打ちつけた衝撃で意識が闇に沈んでいった。

「ど、どうして人間の街をエルフが支配している!？」

アラノアが意識を取り戻した頃にはすでに手足を縛られて拘束されていたが、殺されることもなくなぜかマダムと呼ばれる都市の上役の屋敷に連行された。

そして通された部屋の天井には宝石がちりばめられた煌びやかなシャンデリアが吊るされており、床はわずかに足が沈むほど柔らかく滑らかな真紅の絨毯が敷かれていた。

調度品は言うに及ばず、扉や柱などには細やかな一流の匠の彫刻たくみが施されている。恐らく壁や窓枠の木材に至るまで、すべてが一級品なのであろうが、ララノアにはそこまでの知識はない。とりあえず理解できたのは、この屋敷の主人はこの都市においてかなりの地位に就いているのは間違いないということだった。

もつとも、それだけで充分だった。

これらの財はすべて、踏みにじられた同胞たちの尊厳によつて築かれたものであることは想像に難くなかった。

これからララノアを待っているのは尋問だろう。さすがに野蛮な人間でも不審者だからといって浅慮に処分することはなく、それが苦々しかった。

自分から解放軍の情報が露呈すれば、王家の救出が再び遠のいてしまう。それどころか今回の件で北の国を糾弾し、戦争の口実にされる可能性すら考えられる。

失態を犯した時点で自死することも考えたが、ララノアにとってこの状況は好機でもあった。拘束されてはいるが、幸い口を塞がれることはなかった。

死ぬことはいつでもできる。背後にララノアを捕らえた男が控えているが、せめてマダムと呼ばれる者の喉元を噛み切つて道連れにしてやりたいと考えた。

欲に塗れてエルフを虐げる人間の上位者である。どれほど醜悪な存在なのかと想像を巡ら

せていた。ところがララノアの前に現れたのは下卑た人間ではなく、まだ幼さを残したエルフだった。

悪趣味と思えるほど金をあしらった装飾を身に着けている彼女はララノアより若く見えるが、特に乳房は豊満で、布地の少ない淫靡いんぴな服と相まって男を惑わす妖艶さを漂わせている。横に立つ人間の執事に煙管キセルに火を点けさせ、啞える仕草も様になっていた。

「あら、支配なんて人間きが悪いわね。私は領主様に代わってこの街を取り仕切っているだけ」

わけがわからなかった。

バリステン王国でのエルフは奴隷身分である。奴隷産業の盛んなこの都市をまとめているのが同じエルフなどと、悪い冗談にもほどがあるだろう。

「エルフは……奴隷の、はずでは……」

「あら、エルフでも特定の条件を満たせば市民権を得られるのよ？ まあ全体からすればごくごく一部だけれど……私の後見人は領主のオスマン男爵。そして司祭様からも許しを得て市民権を頂いたの」

ララノアにとって人間の街、それもエルフを奴隷として売りさばく貿易都市をエルフが支配しているなど想像もしていなかったが、混乱しつつも誇らしげに語るシャウアに対して湧

き上がってくる感情は憤りだった。

「なぜだ……」

「ん？」

「お前もエルフだろう!! お前の立場ならアルフィリア姫を、王族の方々を解放することもできたはずだ!」

「解放、ねえ。飽きられて捨てられて肥溜めのような場所にいたところを拾って差し上げたのだから、むしろ感謝されるべきではないかしら？」

あっけらかんと言つてのけるシャウア。

「感謝だと? ふざけるな! なぜ同族のエルフであるお前が王族を貶める!」

畜生以下の扱いを受けていたアルフィリアの姿が脳裏を過り、ララノアは当初の目的を忘れて怒気に任せて吠えた。しかしシャウアはそれに動じるどころか、不思議そうに首を傾げる。

「それを姫様自身が望んでおられるのに?」

「んなつ!! そ、そんなはずがないだろう……っ!」

あまりにも平然と言い放つシャウアに、たじろぐララノア。

「では聞くけれど、犯されていたアルフィリア様の様子はどうだったかしら? その顔は苦

痛に歪んでいた？ 絶望に泣き叫んでいたかしら？」

「そ、それは……」

ララノアは即座に否定することができなかつた。

見るに堪えない惨い仕打ちであったのは間違いないはずなのに、脳裏にこびりついているアルフィリアは恍惚とした笑みを浮かべていたのだ。

何人もの人間に代わる代わる犯されながらも、一度だって悲鳴をあげなかつた。

背筋に冷たい汗が伝うが、頭を振って己の想像を振り払う。奴隷に墮とされたとはいえ、彼女は王家の高貴なエルフである。今でこそその威光は陰っているが、まだ失われたと決まったわけではない。そう信じて、ララノアたち解放軍は北の森の国の支援を受けながら潜伏し、機会を窺っていたのだ。

北の森の国にとっても、バリステン王国は無視できる相手ではない。だからアルフィリアを救出し、奴隷としての長年の呪縛から解き放つことさえできれば、東の森の国を占領している人間を追い出して、現在匿っている二人の王子を旗印に王家を復興させるという密約を交わしていた。

「私が拾って差し上げる以前は、路上でチ×ポ乞いをして相手にも相手にされないほど落ちぶれて、オナニー中毒になっていたのよ？ そんなアルフィリア様のために、あの祭りは存在し

ているの。人間は百七十年前のエルフの姫君なんて覚えていないのだから、物好きな連中がいくらでもチ×ポを恵んでくれるわ」

「どこまで……どこまで姫様を辱めれば気が済むんだっ！」

ろくに反論さえままならないが、当時はまだ見習いだったとはいえ王家に忠誠を誓っていた騎士として、シャウアの言動は目に余る。もはや同族の皮をかぶった別のナニかと思えなくなっていた。

「はあく、頭が固いのねあなた……もしかして解放軍にはそんな連中しかいないのかしら？」

頑なに認めない姿勢に呆れたシャウアはため息をこぼすが、ララノアは今の一言で冷水を浴びせられたかのような汗を吹き出した。

「な、なぜ私が解放軍だと……っ」

すでに素性を知られていたことに愕然とするララノア。対してシャウアは、気づかれないと思っていたことに目を丸くする。

「解放軍はよほど人員不足なのかしら？ 百七十年前の一件で解放軍の存在は知られていたし、人間ならともかくエルフにとって百数十年なんて大した時間じゃない。もう一度事を起こすくらい想像に難くないもの……それに、この都市に住んでいるエルフが今さらアルフィ

リア様が犯されていたくらいで家畜小屋に忍びこむとでも？ 今時東の森の王族に固執しているのは、解放軍のエルフくらいしかいないわ」

「少し考えればわかるでしょうに……」と、想像力の足りないララノアへ憐れむような視線を向けるシャウア。

「くっ……」

「で、適当に拷問して解放軍の情報を吐かせてもいいのだけど……素直に話してくれればそれなりの待遇で奴隷にしてあげるわよ？」

「奴隷に堕とされるとわかっていて、仲間を売るエルフがいるものか！」

「この都市について多少なりとも調べているのなら理解しているでしょう？ 奴隷ギルドへの所属の意味を」

ララノアでもそれくらいは知っていた。

娼館で働きながらもギルドの庇護下で人権が保障され、罪人でない限り理不尽な暴力に曝されることなく、ある程度の自由が約束されている。対してギルドに所属しない奴隷には人権など存在せず、所有者の思うがままに家畜同然の扱いを受けている。同じ奴隷であっても、その立場は大きく異なる。

「だからどうした！ そのような脅しに私が屈するとも!？」

ミスを犯した時点で死は覚悟の上である。無様に生き恥を晒すつもりもなければ、仲間を売って生き延びるなど論外だ。

ララノアが死ねば、再び新たなエルフが派遣されるだろう。自分のような短慮を起こさなければ、次こそアルフィリアを救うことができるはずだ。

もはやララノアにできることは、この場で舌を噛み切って一切の情報を漏らさないことだけである。

「強情ねえ。まあそれがいつまで続くか見ものではあるけど——」

——コンコン。

姫を救えない己の無力さを呪いながら、ララノアは顔を伏せ、舌に歯を当てたところで、不意に扉がノックされた。

「——誰かしら？ 今いいところなのだけど」

「ウルスラです」

（ウル、スラ……？）

扉越しに告げられた名前に、ララノアは顔を上げた。

その名に記憶の奥底が刺激された気がしたのだ。

そして現れたのは、黒のボンテージを身に纏った妖艶な隻眼のエルフ。右目は前髪で隠れ

ているものの、わずかに眼帯をしているのが見えた。左目にはモノクルを着けており、露出している肌には拷問を受けたと思われる痛々しい傷跡が刻みつけられていた。

「急にどうしたの？」

「お楽しみのところ、申し訳ありません。家畜小屋で賊を捕らえたと耳にしましたので」
そう告げるウルスラと目が合った瞬間、ララノアは身を強張らせた。

言葉遣いや振る舞から教養が感じられ、物腰こそ柔らかいものの彼女の瞳は道端の小石でも見るような冷たく濁った眼差しをしていた。

「それでわざわざ？ 相変わらず仕事熱心ねえ」

「家畜小屋の管理者として当然の務めです。それで、彼女がそうなのですか？」

「ええ。東の森の国の残党で組織された解放軍の一人よ」

「解放軍、ですか」

ウルスラは顎に手を添えて逡巡する素振りを見せる。

「何か気になることでも？」

「いえ、大したことではありませんが……シャウア様は解放軍の情報をどのように活用するおつもりで？」

自白を前提に話を進める二人。ララノアは仲間を売るなど絶対にありえないとしながら

も、不安を拭いきれなかった。

「そうねえ……げいか猊下や將軍閣下に相談して、今回の件を火種にして解放軍を匿っている国と戦争を起こすの。そうすれば奴隷と武器が売れるし、戦場で捕らえた新しい奴隷も手に入るわね。東の森の国のエルフはほぼ狩り尽くしちやっただから、最近は新品の純血エルフは高値で売れるし」

「お前は、エルフの皮をかぶった悪魔だ……っ」

嬉々として語るシャウアがまったく別の生物に見えた。彼女にとっては同族であるエルフでさえ、私利私欲を満たすための道具でしかないのだと、少なくともララノアにはそう思えてならなかった。

せめてもの救いは、彼女たちが解放軍の情報に明るくないということ。潜伏している国についても確証はないらしく、ララノアが永遠に口を閉ざしてしまえば最悪の事態は避けられるのだ。

ところが、そんな内心を嘲笑う者がいた。

「ではいつそのこと、悪魔らしく振る舞ってはどうですか？ 悪魔は対価と引き換えに相手

の望みを叶える存在です。情報に対価を支払ってみては？ 拷問で自白を迫れば死にます

よ、彼女」

「どういふことかしら？」

「知り合いに彼女のような人がいましたから。誇りのため、仲間のためなら自分の命も惜しくない——そう考えている人ですよ」

ララノアは冷や汗が止まらなかつた。

今し方顔を合わせたばかりだというのに、すべてを見透かされているようだった。

「誇り、ねえ……」

「ですから、こういうのはいかがでしょう？ 見たところ彼女は潜入捜査よりも戦闘が得意なようですから闘技場で闘ってもらい、勝てば無罪放免、負ければ解放軍の情報を提供させるというのは」

「でもそれだと、この娘にとってメリットが薄くないかしら？」

仮に助かったとしても任務は失敗。しかも人間に解放軍が活発に動き始めたことを知らせてしまったというオマケ付き。責任を感じているララノアは、この都市から逃れたところで仲間の元へは帰れないだろうと首を傾げるシャウアに、ウルスラはさらに続けて条件を提示した。

「はい。なのでもし彼女が勝利したあかつき暁には、アルフィリア様とベアトリス様ら王家のエルフを解放いたしましたしょう」

「な——っ!!」

淡々と付け加えられた条件に、驚愕するララノア。解放軍にとって救出対象である王家のエルフを解放すると、あまりにも簡単に言っただけなのだ。

「あら、あなたにしては思いきったことを言うのね」

解放軍にとっては命を賭けるべき存在のエルフ王家。少なくとも同族であれば敬うべき王家を、平然と賭け事の景品のように扱う発言にララノアは驚愕する。同時に、それほどアルフィリアの価値は低いと言われているようで憤りも感じた。

「彼女にとってこれほど破格の条件はありません。迂闊に命を散らすような真似はできないでしょう」

「本気で王家の再興を願っているのなら——」と、ララノアを挑発して死という逃げ道を塞ぐウルスラ。無論その言葉が真実である保証などないが、まだ所在の掴めていなかった后母ベアトリスまで解放するという。

「それは本当……なのか？ 私が勝てば、お二人を——」

「約束しましょう」

これほど破格の条件を提示するということは、自分たちの勝ち揺るがないという絶対の自信があるという意味。

（しかしシャウアや人間たちにとってアルフィリア様たちに価値を見出していないからこそ、平然と解放するなどと言えるのか……）

そう考えれば彼女たちの王族軽視の発言も理解できてしまう。つまり勝てばいいのだと、昨夜失態を犯したばかりだということに、ララノアの中では首を縦に振る以外の選択肢は消えていた。

「絶対……絶対だぞ！」



「無論ですよ。あと念のために確認をしておきますが、闘技場がどのような場所かはお存じですか？」

「……知っている」

腕に覚えのある者や、奴隸、犯罪者らによる一対一、もしくはバトルロイヤルをショーとして提供し、勝敗を賭ける人気の賭博場の一つである。さらに闘技場の人気に拍車をかけているのが、その場に限り敗者は勝者に絶対服従という掟だった。

生殺与奪はもちろんのこと、女剣闘士が敗北すれば衆目環視の中で凌辱ショーが行われる。ララノアにはそれを観て喜ぶ人間の感覚が理解できないが、参戦する者は後を絶たない。なぜなら勝利は金と名声に繋がり、さらには十の勝ち星を挙げた者には市民権が与えられるのだ。

逆に十敗を喫した場合はすべてを奪われ、奴隸よりもさらに惨めな家畜の身分へと墮とされてしまうのだが、一縷の望みに賭けて闘技場に立つ者は多かつた。

「——ということでしょうか、シャウア様？」

「あなたたちねえ……何を勝手に話を進めているのかしら？」

不服そうに、ジト目をウルスラに向けるシャウア。

「いけませんでしたか？」

「……別にいいわよ。なかなかいい体をしているから、見世物としても充分に使えるわ。ただし闘技場で闘うからにはあそこのルールには従ってもらわ。姫様たちの解放には十勝が条件よ」

「もう勝ったつもりか」

「その威勢は素敵よ。そんな態度がいつまで続くか楽しみにさせてもらおうわ」

すでに凌辱が確定しているような物言いに眉を吊り上げると、シャウアはララノアの反応に笑みを深めた。

都市の中心部に位置する円形闘技場。

直径は百メートルほどで、何層にも連なる客席が中央の空間を取り囲んでいる。

(悪趣味な……)

格子戸が開かれて中央に進むララノアが最初に抱いた感想だった。

闘技場は外観の印象に比べて手狭で客席に比重が置かれており、観客との距離はかなり近い設計になっていた。

今ならシャウアの“見世物”という発言がよく理解できた。

敗北すればすべてを失うララノアとは対照的に、観客はまるで演劇を楽しむかのような気

軽さだった。

劇の内容は殺戮と凌辱。そして彼らが、ララノアに後者を望んでいるのが手に取るように伝わってくる。さらに潜入のための軽装であったため、露わになっている素肌にも男たちの下卑た視線を感じていつそう不快感を積もらせていく。

（十勝だ……十勝さえすればアルフィリア様とベアトリス様をお救いできるんだ。姫様たちに比べたら、この程度の恥辱……っ）

王家を救出するまでの辛抱だと言いつ聞かせる。ララノアは解放軍の中でも相応の実力を有していた。

東の森の国が奪われて以来、王族を救出するために血の滲む訓練を積んできた。今ではかつて騎士団長を務めていたヴィルヘルミナに引けを取らないと言われるほどの実力であった。

一昨日こそ迂闊にも冷静さを欠いて不覚を取ってしまったが、大抵の人間に後れを取ることはないと言っている。

シャウアたちが望む凌辱劇も、血沸き肉躍るような決闘も演じるつもりはない。全力を持って敵を斬り捨てるのみだ。

ところが、肝心の対戦相手がまだ現れていなかった。

ララノアは視線を貴賓室に向けた。

すると、それを待っていたと言わんばかりに妖しい笑みを浮かべるシャウア。そしてその傍らに立っていたウルスラが前に出ると、下品な騒音を撒き散らしていた客席が一齐に静まり返る。

「さて皆様。本日はなんと、常勝無敗の王者アムラスに挑戦者が現れました！ 他国からやって来た流浪のエルフです！ 無敵の王者が本日も勝利を収め身の程を知らしめるのか、それとも奴隷の意地を示して武名を轟かせるのか、勝敗のベットはただいまを持ちまして締め切らせていただきます！」

ララノアが解放軍に所属していることが知らればシャウアとの賭けが成立しなくなるため、肩書はウルスラのアドリブによるものだった。いくら奴隷身分のエルフであっても、観客からすれば国外からわざわざ現れた実力不明の存在である。

オツズを少しでも均等にする狙いもあるのだろうか、先ほどからララノアの耳に届くのは圧倒的にアムラスを支持する声だった。

（それはそうだろう。無名なうえに奴隷身分のエルフト、現王者との一戦なのだ。金銭が絡んでいる以上安牌あんばいに流れるのは理解できるが……あの女の余裕の正体はこれだったのか）

領主の代理としてこの都市を牛耳っているのだから、闘技場でララノアの対戦相手を操作

するのも容易いだろう。敵の間者に対して王族の解放という大盤振る舞いを演じてみせたのも、絶対に負けないと確信していたからだ。

だからといって負けるつもりなどない。今のうちに笑っていればいいと、ララノアは貴賓室を鋭く睨みつけた。

「では、この闘技場で常勝無敗の剣闘士“王者”アムラス！」

ウルスラが入場を宣言すると対面の格子戸が開かれ、場内に割れんばかりの歓声が沸き起こった。

『ア・ム・ラ・ス！』

『ア・ム・ラ・ス！』

今し方までララノアの肢体を舐めるように眺めていた下劣な男たちでさえ、声を張り上げては足で床を打ち鳴らしていた。

巨大な闘技場が振動で揺れるほどで、王者の人氣が窺えた。

「お、お前は……っ」

アムラスが堂々とした足取りで闘技場中央まで歩を進める。その姿を認めた瞬間、ララノアは激しい動揺を余儀なくされた。

ただ歩いているだけだが、その動作に隙はなく、一筋縄ではいかない相手だと一瞬で看破

できたものの、ララノアにとってそれ以上に衝撃的なものがあつた。

現れたのは自信と驕慢に満ちた目をした男だつた。

「またいきなり飛びかかつてくるかと思つたんだがな……一昨日のように」

互いの距離が五メートルほどの位置で相対して煽るように呟くのは、家畜小屋でアルフィアを犯し、ララノアを捕らえた男だつた。

「くっ……お前のような男が、チャンピオンだど？」

「ああ。この俺こそが王者、アムラス様だ」

見下した笑みを浮かべ、言葉の端々に己こそが絶対強者だという自信に溢れている。

焼けた肌は赤銅色で、引き締まった腕はオーガさえくびり殺せそうなほど太く逞しい。全身がはち切れんばかりに筋肉の鎧で覆われており、防具など不要とばかりに腰布一枚しか身に着けておらず、武器も右手に量産品とわかる粗悪な剣を握っているだけだつた。

一昨日はアルフィアを助けた一心で気づかなかつたが、目の前の男からは相対しているだけで押し潰されそうなほどのプレッシャーが感じられた。

（相手に吞まれるな……この男は強い。確かに一度不覚を取つたとはいえ、落ち着いて臨めば対処できないはずがない。私がアルフィア様をお救いするんだ！）

ララノアは己を鼓舞し、まっすぐ睨み返すと、アムラスは愉快そうに口を歪ませた。

「ほお、いい目だ。俺の強さに萎縮しない奴は久しぶりだな。だったら簡単に潰れてくれるなよ？　せいぜい俺を楽しませるよう努めてくれ」

その歯牙にもかけていない物言いに、ララノアは眉を顰める。

「私は負けない……負けられないんだ！」

「その意気だ。ここでは力こそが正義。敗者はすべてを失う……あの家畜のようにな」

「か、ちく……っ！　お前はどれだけアルフィリア様を弄ぶつもりだ!？」

冷静に努めなければと頭ではわかっている、アムラスの一言一句がララノアの神経を逆撫でしてくる。

「弄ぶも何も、あれはそういう玩具だろう？　チ×ポを挿れるしか存在する価値のないものを、俺が使用してやっているんだ、むしろ感謝するべきじゃないか？」

それが当然だと、あつけらかんと言いつつ。

どこまでもアルフィリアをおとし貶めるアムラスを、沸騰しそうになる激情を抑えながら、ララノアは低い声で止めた。

「もういい。それ以上喋るな……」

これ以上この男の声を聞いていると怒りで頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

(ふう……落ち着きなさい私。冷静さを欠いてしまえば、一昨日の二の舞だ)

性根こそ腐っているが、アムラスは油断できる相手ではない。闘いにおいて常に冷静な判断を求められるため、心を鎮めていなければならない。

ララノアの失態でこのような状況に陥ったが、王家に不敬を働いた人間を誅殺できると思えばよい機会である。

「そうか。では観客も待ち侘びていることだからな、さっそく始めよう。先手は譲ってやる」

どこまでも相手を格下と見くびるアムラスに齒を食いしぼりつつ、腰を低くして構えて戦闘準備を整える。

「その減らず口を黙らせてやる！」

ララノアはその場から腰に下げていたナイフを投げて先制攻撃を仕掛けた。

常に目立つように帯剣しており、剣を抜くと見せかけての奇襲だった。しかし相応の速さで飛来したそれを、アムラスは難なく半身になってかわ躲す。

「堅物そうに見えたが、なかなかいい攻撃だ」

飛ばしたナイフが当たれば儲けもの。避けられたとしても体勢を崩したところへ斬りこもうとララノアは突進した。だがアムラスは無駄のない最小限の動きであっさりと躲してしま

った。

舌打ちをしたくなる気持ちを抑えながらそのまま飛びこみ、裂帛れっぽくの気合をこめて大上段から剣を振り下ろした。

当時は祖国を滅ぼされ逃げることしかできなかつた未熟なララノアも、王家を救出することを悲願として百年以上剣を振るい続けてきた。

並みの人間では視認さえ難しい斬撃だった。

しかしアムラスは並みどころではない。渾身の一撃が空を斬るもララノアは取り乱すことなく身を翻して連撃に切り替えた。

それでもアムラスはそれらをことごとく避け、時には剣で防いでみせた。

そんな攻防が数十秒ほど経過したあたりで、ついに一撃が命中した。

「おごおおっ!？」

アムラスのボディブローがララノアの腹部を捉えた。

掠りもしない苛立ちから、わずかに大振りになった隙を狙われた。

剣を振り下ろすよりも速くアムラスの拳がめりこみ、ララノアは体をくの字の状態で吹き

飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「おげええええ!! お、ぐつ……げほつ、げほつ!」

軽装の革鎧ではアムラスの膂力りよりよくを受け止めきれなかった。

衝撃によって押し上げられた内臓から内容物が逆流して血液も交えて嘔吐した。

「む、加減を誤ったか? すぐ終わってはつまらないからな、一昨日より拳の振りを緩めたつもりだったが……」

あまりにも脆いと、呆れたように呟くアムラス。普段から、相手が男であれば初撃から容赦なく殺しているが、女は負かした後で犯して楽しむため、過剰な攻撃は控える傾向にあるのだが、たまにはうっかりすることもある。

しかし相對しているララノアからすれば、それは敵としてさえ認識されていないに等しい物言いではなかった。

「くつ、あ……なめ、るなああつ! 私は、姫様をお助けするんだ!」

「それはさつきも聞いたぞ。つまらんことを囀さえずるだけならガキでもできる」

重いダメージを負っているのは一目瞭然だが、アムラスはララノアを煽りつつ剣を構えるまでその場から動くこともなく待った。時には命さえ落とす決闘の場とはいえ、観客が存在している以上はショーである。後に犯される運命にあるのだから、今くらいは好きにさせて

やろうと。

「言わせて、おけばっ！」

まだ鈍痛が響いているが、齒を食いしばって突撃する構えを取る。

「ふむ、感情の高ぶりで痛みを抑えこんだか。俺の前に立つからには、これくらいの気概は見せてもらわんとな」

敵意を剥き出しにして立ち上がったララノアを眺めながら愉快に笑う。

闘技場での勝者には莫大な金と名声が手に入る。いずれは奴隷身分から市民になることも可能となる。ゆえに参加者は後を絶たず、死に物狂いで這い上がるとする。

理由は様々だが、ここに立つ者は誰でもララノアと同様に負けられない理由がある。しかしアムラスはチャンピオンに上り詰めて自由市民としての身分を得てもなお、闘うことが好きというだけで王者として君臨していた。

ただ自分が楽しむためであり、アムラスにとってララノアは文字通り身を削ってまで自分に愉悦を提供してくれる道化どうけでしかなく、決死の覚悟で向かってくる姿には感謝の念さえ抱いていた。

「あああああっ！」

これまでで一番速い動きでララノアが飛びこむ。

劍の届く間合いまで入り振りかぶると、アムラスの視線がわずかにそれを追って躲すようララノアより先に反応した。その瞬間を見計らい、左足で地を蹴ってスライドするように彼の右側へ瞬時に移動すると、斬り払うのではなく強靱な筋肉の鎧を貫くために劍を首へと突き出した。

(これならっ！)

確実にアムラスの意表を突いた。圧倒的な強者であるという自覚が慢心を生み、決定的な隙を生んだのだ。

コンマ数秒でしかないが、それで充分だった。長年劍を振ってきた経験から、寸分違わずに首を突き刺せると確信する。

ララノアは思わず笑みさえ浮かべそうになったのだが——王者という肩書は伊達^{だて}ではなかった。

アムラスは、躲すどころか突き出された劍先を右手で掴んでみせた。

「あ、ありえない……っ!？」

勝利を確信していただけに、目の前の光景が信じられなかった。

するとアムラスは、反撃するどころか掴んでいた劍を解放し、ニヤリと挑発的な笑みを浮

かべると「続けるよ」と手招きする。

百年以上剣を振るい続けた自負のもとで、最高のタイミングで放ったはずの一撃でさえ、アムラスには通用しなかった。アルフィリアの救出というエルフの悲願をこめた刃やいはさえ防がれたララノアには、もはや有効な攻撃手段など存在しなかった。

「こんな、こんなっ……うう、ああああ!!」

ララノアは負けるわけにはいかないのだと、どれだけ自分に言い聞かせても、アムラスへ刃が到達するイメージすら湧かなかった。

ついには進退窮まっかんしやくて痼癩を起こし、叫び声をあげながらひたすら斬りかかった。

感情に任せたそれは、お粗末なほど精彩を欠いており、騎士の振るう剣と呼べるものではなくなっていた。

「所詮はこの程度か……」

「ぐがっ!」

アムラスは手にしていた剣を放ると、大振りの剣を躲すと同時に膝蹴りを叩きこんだ。そして苦悶し怯んだ隙に、右手でララノアの首を掴み、片手で持ち上げた。

華奢な首に、筋骨隆々とした太い指を食いこませて締め上げる。

「はぐつ、んんう、あがああつ！」

さらに持ち上げられているために自重が加わり、ララノアは苦悶に顔を歪めて拘束から逃れようと必死にアムラスの腕に拳を叩きつけ、足をバタつかせる。

「大層な口を利きいていたから、多少はマシかと思っただがなあ」

アムラスはつまらなそうにため息をついたかと思えば、次の瞬間には獲物を捕らえた野獣のよう獰猛な笑みを浮かべていた。

「がふつ！ んぎいっ……！」

グツとまた指が首に食いこむ。

歯を食いしばるララノアだが、額からは玉の汗が吹き出てくる。体格差は圧倒的で、身を振りながらアムラスの胸を蹴り続けるが、分厚い筋肉に阻まれてダメージが通らない。

「なんだそれは？ あの家畜を助けるんだろう？ だったらもつと気合を入れろよ」

「わ、私は……っ、あつ、負け、ないいい……い、ぐうう！」

「諦めの悪さも度がすぎれば見苦しいな。まあ、それもいつまで続くか客は楽しみにしてるんだろがなあ」

「んぐつ……な、何をお……あああつ、や、やめ——っ!!」

アムラスは空いていた左手でララノアの軽鎧を掴むと、力任せに腕を振った。

生地が軋むどころか破断する音を響かせ、纏っていた装備をいとも容易く剥ぎ捨てられ、闘技者には似つかわしくない白い柔肌が、観衆たちに晒される。

「ほう……あの家畜のように下品に肥大化した肉塊とは違った、張りがあって形のいい乳をしてるじゃないか。男を知らんのか乳首の色もくすんでいない綺麗な色だ。下の毛は少し無造作に生やしすぎているようだがな」

ララノアは一瞬、自分の身に何が起こったのか判断できなかつたものの、間を置かずにとツと沸き起こった歓声に現実へ引き戻され、色白の素肌を瞬時に真っ赤に染めあげる。そしてアムラスの舐めるような視線に、屈辱と羞恥に声を張り上げた。

「み、見るなああ……あつ！ かはつ、あ、んああつ！」

「そう言うわりには見られて乳首が硬くなっているようだが？ まさか最初から期待していたのか？ あんなチ×ポ狂いの家畜を姫と崇めているような連中なら、同類だとしても不思議じゃないか」

母性の象徴とも言える双乳の頂に鎮座するピンク色の突起。観客の好色な視線に敏感に反応したかのようにそれは隆起していた。

自分だけでなく、アルフィリアを冒瀆し続けるアムラスに対して殺意を募らせていくもの

の、ギリリツと首を絞め上げられていくにつれて、ララノアの意味とは関係なく抵抗の力が衰えていく。

「あ？ 抵抗しないのか？」

「うぐう……うつ、あつ、あ……！」

絶え難い屈辱に言い返したいララノアだったが、呼吸がままならないために、もはやまともな言葉を発することができなかつた。

「もう終わらせるか」

手も足も出ないララノアに落胆するアムラス。

「うつ、あ……わ、だじ、はあ……ま、まげ……られ、ないい……っ！」

シャウアとの賭けは、十勝もしくは十敗すること。ここで負けたとしても、まだ終わるわけではない。しかし、だからといってアルフィリアを玩具として弄ぶ男に負けを認めることは、ララノアの騎士としての矜持が許さなかつた。

「そこまで言うなら足搔あがけ。それができなければこのまま落ちるだけだ」

「かひい!? がっ、あがあ、あ……！」

戯言だと、アムラスは鼻で笑いながらギリギリと首を絞めていく。

もはや勝敗は誰の目にも明らかだった。

そんな無様な姿を晒すララノアに向けて、観客から『落とせ！』『落とせ！』とコールが起こり、中には『大穴狙いだったのによお！ 首をへし折っちまえ！』と、金をすった当てつけに声を荒げるものもいた。

だが屈辱に身を震わせる余裕もなく、締めつけが強くなるにつれてララノアの顔から血の気が引いていく。

「これで終わりだ」

「ふぎい!? んがつ、あ……ああ……」

限界を迎えたララノアの黒目がぐるりと上に上がり、手足が垂れ下がった。

力尽きて全身の筋肉が弛緩すると――

ジョロツ！ ジョロロロロオ！

股間から黄金水が溢れ出し、足元に水溜まりを作り上げた。

醜態に闘技場が静まり返り、ジョロジョロと無様に失禁する音が響き渡る。

そして『漏らしやがったあ！』と誰かが笑えば『ギャハハハッ！』と連鎖し、場内が割れんばかりの笑いに包まれた。

「よかったな。これまでお前の弱さに盛り上がりが欠けていた観客も喜んでいようだ

ぞ！」

アムラスは衆目に応えるように、落ちたララノアを高々と掲げた。

「ジョロロオ——と、意識を失って弛緩しきった尿道から溢れ続ける黄金水。水溜まりはどんどん広がっていくが、ララノアは白目を剥いたままビクツ、ビクツと痙攣するばかりだった。」

間もなくすると場内に勝敗が決した鐘が打ち鳴らされ、闘技場が揺れるほどの歓声が沸き上がる。だがそれはアムラスの勝利を祝福するだけのものではない。敗北をしたのが女の闘技者であることに興奮しているのだ。

「うう……あ、ああ……」

ララノアは呻き声しか発することができない。自分が陥っている状況すら理解できずにいた。

「想像以上に口だけだったな。おい、起きろ負け犬！」

アムラスはそう呟くと、首を絞めていた手を放した。

「あぐつ、んあ……あああ……わ、私、は？」

重力に従って力なく地面に崩れ落ちたが、その衝撃で意識を取り戻した。

白目を剥いていた瞳に、徐々に光が戻っていく。

「さっさと、起きろ！」

「ぐぼお!? おっ、おえ……っ、あっ、あ……わ、私は、負け……た?」
アムラスに蹴り上げられ、強制的に起こされる。

『ケツ、威勢がよかったの最初だけかよっ!』

『何が流浪のエルフだよ、ただの臭えシヨンベンエルフじゃねえか!』

『てんで弱っちいくせに出てくんなよな!』

浴びせられる罵声の数々。まだ意識が朦朧としているものの、醜態を晒したララノアを嘲笑う観衆の声が、否応なく現実を突きつけられる。

「お前の負けだ。汚らしく小便を撒き散らしながらなあ!」

自分の股間が濡れているのを自覚して、大きく目を見開くララノア。震えながらも、視界に不自然な水溜まりを捉えてしまう。

「あっ、あ、あああああっ!」

王家の救出に出端から躓つまずいてしまっただけでなく、衆目に裸身を晒された挙句に失禁しながら敗北した事実、恥辱と絶望感が一気に押し寄せてきた。

それでも現実にはさらに非情だった。

「うるさいぞ、いつまで喚いている。つまらん試合に付き合わされたんだ、こつちでは俺を
楽しませてみる！」

「あうっ！ ま、まさか……本当に、こんな場所だ!？」

アムラスはララノアの腕を掴んで力任せに立ち上がらせると、観衆に見せつけるように自
身は背後に回り、両手首を左手で握って拘束すると脚を開いた低い体勢を維持させられた。

元より筋力に差があるうえ、意識を取り戻したばかりのララノアではろくに抵抗すること
さえ叶わない。装備を剥かれているため、豊満な乳房や性器が丸出しの状態で、自ら恥部を
突き出すような屈辱的なポーズを披露していた。

『なかなかいい体してるな』『シヨンベンエルフのわりに……』『生意気なエルフがどんな
アへ顔を見せてくれるか……』と、嘲笑っていた観客もララノアの痴態にざわめき始め、大
きく喉を鳴らす音があちこちから聞こえてくる。

敗者を気遣う者など、この場には誰一人としておらず、欲望を剥き出しにした視線が乳房
や股間に突き刺さるのをひしひしと感じた。

「や、やめろお！ 私を見るな、見るなっ……放せえ！」

「やかましい！ ここはそういう場所だ。今さら何を言ってるんだお前は？」

呆れるアムラスの呟きを耳にしながら、その気になれば簡単に斬り殺せる観衆にも柔肌を

見られ、なす術もなく嘲られる。女である自分の負けが何を意味しているのか理解はできても、早々に自分が負けることはないと思いと根拠もなく思いこんでいたのだ。

人間の下劣さを一身に浴びたララノアは、こみ上げてくる屈辱感に顔を歪めた。

「やはり人間はクズだ……っ」

仮にアムラスから逃げ出すことに成功したとしても、ルールを反故ほごにすればアルフィリアとベアトリスの解放が遠のいてしまう。ララノアは逃れられない現状に歯噛みした。

「ここでは勝者が絶対だ。誰がお前に言葉を発するのを許可した！」

「んひいいいっ!!」

立場を弁えろと、アムラスの平手がララノアの無防備な尻たぶを容赦なく打ち据えた。バチーンツ！ と、尻肉がブルンツと弾み、一発で真っ赤に染まってその痛烈さを物語った。

「この場のお前は俺のペットだ！ 身の程を知れっ！」

バチンっ！ バチンツ！ と、立て続けに見舞われる平手打ちに、

「痛っ！ あああっ、やめっ——きひいいいっ！」

どれほど非道な仕打ちを受けても、エルフを弄んで悦に入る人間に頭を下げるなど、プラ

イドが許さなかった。尻を真つ赤に腫らしながらも、それだけは譲れない。

悶絶しながらも懸命に歯を食いしばっているのが観客にもわかり『いつまで保つんだか……』『やっぱり最初は生意気なくらいのほうか……』と、むしろにわかには盛り上がり始めた。

その様子に、アムラスも口角を吊り上げる。

この闘技場で王者に逆らう者など滅多に現れない。しかも今し方ボロ負けしたばかりだというのに、意地を張る姿は逆に新鮮だった。

「ひっ!! お、お前どこを触って!？」

アムラスの手が尻から股を潜って股間へ触れた。

ララノアは悲鳴をあげるが、密着した指は離れない。

「負けたお前のどこを触ろうか、俺の自由だ」

股間の割れ目に沿って指でなぞられると、ララノアは背筋に軽い電流が流れるのを感じつつ、羞恥に唇を噛むしかなかった。

しかし本人の意思に反して、敏感な器官はピクピクと震えてしまう。

「家畜どもはここを弄ってやると悦ぶが、お前はどうか？」

「んっ、ふう……そう見えるのなら、お前の目がおかしいんだ……不要なら私が抉ってやる

ぞ……っ」

「クハハツ、裸でガニ股を晒してるヤツに言われたくないな」

「……どこまで我々を弄べば気が済むんだ、人間はっ」

怒りをぶつけても、最初から奴隷と認識している女の言葉など彼には届かない。時折他の観衆にも見えるように、ララノアの体の向きを変えていく。

「くっ、ふう……くそ、私は……んくう！」

恥部を見世物にされ、悔しさを隠しきれない。だというのに、肉体はアムラスの愛撫に反応してジンジンと熱を持ち始めていた。

決して感じているわけではないと言い聞かせるが、膣口を刺激されて体が火照りだす。膝がプルプルと情けなく震え、全身に力が入ってしまう。

「指が濡れてきたな。これはさっきの小便とは違うようだが？」

「ただの、生理現象だ……くっ、人間如きに私は屈しない！」

「そこまで言うなら最後まで抗ってみせろよ？」

アムラスはララノアの態度も含めて楽しんでおり、試すように徐々に指へ力をこめていく。

「んあっ!? こ、こんなことをして何が楽しいんだ……あ、理解、できんっ」

悪態をついて誤魔化そうとするが、今度はアムラスの指が淫裂を割って体内に滑りこんできた。異物の侵入を許してしまったララノアは、わずかに声が高くなっていた。

「ん？ 思ったよりキツいな……お前、処女だな？ まさか数百年と生きていながら男を知らんとは……白馬の王子でも夢見てたのか？」

アムラスの煽りに観衆がいつそう沸いた。

「わ、笑うな……っ！」

祖国を守れず北の森の国へ亡命した時から、女であることは捨てていた。奴隷に墮とされた王家を救うまでは、自身の幸せなど二の次だったのだ。

アムラスの言はまったくの的外れなのだが、それを正直に告げたところで処女が証明されたと喜ばせるだけだ。あえて黙ってはいるが、どれだけ馬鹿にされてもまともに抵抗すらできない不甲斐なさに、涙がこみ上げてくる。

ところが、悔しいはずなのに指を押しこまれた膣内がジクジクと痺れて震えが止まらない。貞操が脅かされているというのに、嫌悪感とは異なる感覚を覚えつつある自分がいた。

「口ではなんとでも言えるが、体は正直だな。音まで聞こえるぞ？」

「ふう、ふう……うう、うるさいっ……んんっ」

膣内で指が蠢くたびに、クチュクチュとねっとりとした水音が聞こえてくる。

（なんだこれは！　なんだこれはっ！　なんだこれはっ!?!）

不快であるはずなのに、敏感な場所を弄られると声がこぼれそうになる。ララノアは眉を震わせながら、淫らな声を嘯み殺すのに必死だった。それがアムラスや観衆の嗜虐心を刺激していることを気づかずに。

「処女のくせにこれだけ垂れ流していれば、問題ないなっ」

「ひぐっ!?!　こ、これ以上指を押しこむなああ……!」

「クハハッ！　処女のくせに指くらいなら難なく入るぞ！　数百年間誰にも相手にされない化石マ×コが、とんだ淫乱だなあ！」

無遠慮に指を挿入しているように見えて、後で楽しむためか器用に処女膜の隙間を縫って侵入してくる。これまで経験したことのない体内に異物が埋めこまれる感覚に自然と口が開いて、息を吐くのと同時に淫らな声が溢れてしまう。

「んひいっ!?!」

男の太い指が、膣内の肉を掻き混ぜるように蠢く。誰にも触れられたことのない場所を刺激され、甲高い悲鳴をあげてしまった。

思わず自分の声なのかと疑ってしまうほどの艶を含んでおり愕然として息を呑んだ。

「一気にマン汁の量が増したな。感じているのが丸わかりなんだが？」

「こんなもの、気持ち悪いだけだあ……あつ、ぐう、私は感じてなどお……あお、おっ……動かす、なあ……っ！」

どれだけ無様でも諦めるわけにはいかなかった。

「これだけ垂れ流しておきながら否定されてもな……さらに要求されているようにしか聞こえんぞ。まあ逆に肯定されても別に遠慮などせんがな」

小馬鹿にしつつ、未通の肉穴を捏ねくり回していく。

「あくう……！ 卑猥な音を、立てるなあ……んぐう！」

どれだけ歯を食いしばっても、膣口の奥から卑猥な粘着音が聞こえてくる。果てはアムラスの指を伝ってポタポタと垂れ落ちる始末。腹立たしいが、どれだけ拒絶してもララノアは分泌される粘液を止めることができなかった。

滴る淫液を目の当たりにして、自分の情けなさに泣きたくなりながら、同時に昂ぶっていることも自覚していた。

解放軍として王家を救うために、娯楽や己の幸せなど考えたこともなかったララノアにとって、快楽を知識としては知っていても体験したことのない未知の感覚だった。

（ありえないっ……この私が人間に弄ばれて感じるなんて……！ 耐えないと、耐えないとお！）

気を抜けば達してしまいそうだった。

歯を食いしばって押し寄せてくる衝動に抵抗する。

「どんどん溢れてきたな。好きなだけイケよ、何百歳で初めてアクメだぞ！ 小便まで漏らしたんだ、イキ顔を晒すくらい今さらだろ？」

「んあ、はあ、はあ……んんう、調子に、乗るなあ……っ！」

殺したいほど憎い敵に弄ばれ、拳句に公衆の面前で果てるなど、これ以上恥の上塗りをするわけにはいかない。

「いや、調子に乗らせてもらうぞ。いつまでも同じことをしていたら観客が楽しめないからな。このままイカせてやろう！」

「も、もうやめ——ふぎいいっ!? あっ、ああああっ！」

ララノアの制止を遮って、アムラスは二本目の指を捻じこんだ。

相変わらず処女膜を傷つけることなく、乱暴な言動には似つかわしくない繊細な指使いで、粘膜を掻き巻るように動かしていく。勢いを増した強烈な刺激に、もはや声を抑えることができなかつた。

衆目環視の中で大きく喉を仰け反らせ、みつともなく甲高い嬌声を響かせた。

指を啜えこんでいる淫裂からは、先の失禁を思い起こさせるほどに淫らな汁が溢れ出し

て、足元を色濃く染め上げていた。

「これだけ弱いくせに剣を振って無駄な時間を費やしてきたんだ、自分が女であることに感謝しながらたつぷりイツてしまえ！」

アムラスが、膣肉の敏感な場所を無遠慮に擦り立ててくる。誇りを愚弄されているというのに、もはやララノアはろくに言葉を発する余裕もなく、全身をガクガクと震わせていた。

そしてトドメとばかりに手首を捻り、膣粘膜を抉る。これまでとは違った摩擦感に、ララノアの意味がっいに決壊した。

「おひっ?! いあっ、あっ、あひひひひひっ!!」

ララノアがグツと背筋を仰け反らせ、調子の外れた淫声を張り上げる。それと同じタイミングで、割れ目の上部に位置する尿道口から、透明な体液が放物線を描いて盛大に飛び散った。

とうとう観衆の面前で絶頂した挙句、潮噴きまで披露してしまった。

案の定『潮か、小便か!』『ギャハツ、噴きやがった!』だのと観衆は大いに沸き、ララノアを罵るものからアムラスの手練手管を賞賛するものまで、様々だった。

あまりにも惨めだというのに、ララノアの瞳に涙は溢れてこぼれ、代わりに震える唇から言葉にもならない嬌声ばかり溢れてしまう。

（なんだこれはっ!? こんな知らない! 知らないっ! ダメだダメだ! こんなものに、流されるわけにはあああっ!!）

敵の玩具にされて悦ぶなど、ララノアのプライドが許さない。しかし味わったことのない性感を繰り返し刻みつけられ、堪えていた分だけ蓄積していた快感は途方もないものだった。

意識さえ飛びそうになり、視界が明滅する。

大勢の男たちの下卑た視線を浴びているというのに、全身を震わせて潮噴きを止めることもできなかつた。

（違うっ……私は姫様たちをお救いするのだ! 敵に弄られて気持ちいいなんて、あるはずがないいいいっ!）

まだ東の森の国が健在だった頃は、アルフィリア姫を傍で支えていた騎士ヴィルヘルミナに騎士見習いの従者として剣を教わり、解放軍に入ってからも王家の再興しか頭になく、色恋などの己の欲求は二の次だった。

ララノアがこの世に生を受けて三百二十一年間、ろくに意識したこともなかつた反動なのか、初めて体験するオーガズムの壮絶さに翻弄され、無様に下半身を躍らせて喘ぐことしかできなかつた。

「かはっ！ はあ、はあ、はあ……んあ、ふああ……っ！」

甘美な痺れに苛まれながらもアムラスの指が動きを止めると、ララノアはようやく意識を取り戻すことができたものの、全身が熱くなって汗を滴らせて、最初のような勢いが失われていた。

乳首はビンビンに勃起し、内腿から足首まで滴った淫液で濡れている。大きく肩で息をしながら熱い吐息をこぼす様は、誇り高いエルフとはかけ離れただらしないものだった。

「また威勢がいいのは最初だけだったな。観客に見られながら派手にイッたな」

「んあ、はあ、あ……あああつ、誰の……せいだっつ」

「あつさりと負けたヤツのせいに決まっているだろう？ そもそも、この状況でマン汁を撒き散らしてたんだ、満更でもなかったんじゃないか？」

「そんなわけが……っ、くう……ある、かあ……！」

「別に認めたくないならそれでもかまわん。認めさせるまでだからな」
虚勢を張るララノアに、アムラスは不敵に笑う。

「ま、まだ……終わらせない、つもりかっ……」

ララノアの瞳が不安に揺れるが、絶頂の余韻に震える口から漏れたのは艶を含む息遣いだ。敗北と屈辱のショックが胸中を渦巻いているはずなのに、まだ体内に残っている官能

の灯ともしびがヒクヒクと淫裂を痙攣させてしまう。

「終わる？ バカを言うな、まだこれからだろうが！」

アムラスによる絶望的な宣言が告げられると、今度は膝裏に手を回されて股間を観客に見せつけるように抱え上げられた。

「ああっ！ こ、これ以上何をするつもりだ……っ！」

疲弊したララノアの表情に、困惑と恐怖の色が浮かぶ。

『ヒュ、またいい声で啼なけよな！』

『最初の自信はどうしたあ？ そんなに股をおっぴろげて恥ずかしくねえのかよ！』

『こつちに向いてくれアムラスう！ デカチンでマ×コをガバガバにしてやれえ！』

観衆はこれから行われるショーに股間を熱くして野次を飛ばしてくる。

（野蛮人どもめ……敗者を弄って悦ぶ下衆が！）

どうにもできない悔しさに唇を噛むララノア。

先の強烈な絶頂感が抜けておらず、痺れてまったく力が入らない。

「観客も待ちきれないようだしな、続きをするぞ負け犬」

「くっ、う……次は、何をするつもりだ……っ」

「決まっているだろう？ お前の貫通式だ」

元より腰布一枚しか身に着けていなかったアムラスは、気がつけば裸になって漲った男根を反り返らせていた。

「ひっ!? そ、そんな……無理だ、こんなものっ!」

敗北した時点でこうなることは理解していたが、考えないようにしていたのだ。

近づけられただけで、それから発せられる熱が伝わってくるほどの極太ペニス。

巨大なアムラスの体軀に見劣りしないどころか、より凶悪さを放っていた。

細身な女の腕と錯覚させるほどで、腹を突き抜けるのではと、気丈に振る舞いながらもじつとりと冷や汗を滲ませていた。

「お前は俺がああ玩具で遊んでいたのを見ただろう？ だいたいここからガキをひり出すんだ、問題ない」

アムラスが無慈悲に呟くと、抱えているララノアをゆっくりと降下させる。

(た、確かにアルフィリア様は……だがこんな大きなモノが本当に……!?)

男根が股間に近づくにつれて、これを挿入されたら自分が壊れてしまうのではと恐怖に息を呑んだ。依然として観衆から野次を飛ばされているが、緊張のあまりまるで聞こえない。

「い、いやっ! やめ——」

赤黒く腫れ上がった亀頭が股間に触れると、ララノアは男の熱さにゾクゾクと背筋を震わせながらも、恐怖を抑えきれなかった。

だがそれよりもアムラスの行動のほうが素早かった。

「——んぎいいいっ!? うあああああつ!!」

初めての行為への恐怖心を焦らすこともなく、いきなり拳と見紛うばかりの亀頭を膣穴へズツポリと埋めこんだ。

目を見開いて悶絶するララノア。体格差もさることながら、不慣れな処女の肉穴には凶暴すぎて悲鳴をあげた。

「先端が入ったんだ、これで問題ない、なっ!」

アムラスは笑いを堪えつつ、ララノアの膣内へと押しこんでいく。

「あぐううっ! お、おっ、大きすぎるう……む、無理だ、入らなあ……あああつ!」

どれだけ喚こうがまるで意に介さない。

圧倒的な力で、ララノアの狭い膣穴を強引に押し広げていった。

そして瞬く間に処女膜へと到達するや、感慨を覚える暇もなく突き破られ、激痛に身を振るものの限界以上に広げられながら膣奥まで啜えこんでいた。

「ほらみる、やればできるじゃないか!」

上機嫌で嘲笑しながら、腰を揺すつて可能な限り根元まで捻じこんでいく。

「ふう、ふう……んうううっ！　ぐう、う、あああああっ！」

訓練でそれなりに痛みには慣れていているつもりが、体の内側から抉られる痛みはこれまで経験のないもので、堪らず声をあげてしまう。さらにはあまりの巨大なペニスに、ララノアの下腹部がうつすらとアムラスの形に膨らんでいた。

子宮を押し上げられるような感覚と、これまで経験したことのない痛みに、だらしなく開いた唇から涎が垂れてくる。無様すぎて、激痛によって失神ができればどれだけ楽になれるかとさえ考えてしまうほどののだが、ララノアは自分が感じているのが痛みだけではないとも自覚していた。

膣内を蹂躪されて痛くて苦しいはずなのに、同時に甘い痺れのようなものも感じていた。挿入される前に散々愛撫されて昂ぶっていた影響で、本能で牡を求めてしまった挙句に、圧倒的な存在感を放つ男根に子宮が狂わされてしまっていた。

破瓜^{はか}による出血も少なく、流れ出る淫液がうつすらと朱に染まっているものの、観衆の距離からではそれを判別するのは難しく、ただひたすらに淫猥な蜜を垂れ流しているようにしか映らないだろう。笑いにされて憤りを感じるが、膣奥も燃えるように熱くなっていく。

乳首も限界まで肥大化して煩惱が理性を侵食しつつあり、先ほどのアムラスによる愛撫と同様に、強い牡に牝が目覚めた肉体を抑えきれなくなりそうだった。

破瓜の痛みさえ上回る暴力的な快樂。

苦痛で頭がおかしくなったのか、徐々にララノアはだらしなく破顔していった。

（ど、どうして……!? 苦しいのにつ……殺したいほど憎いはずなのにつ……どうして私の体は……っ!）

子宮をズンツと突き上げられるたびに、思考が乱れた。

まるで肉体に別の意思が宿ったかのように、肌が粟立ってアムラスに抱えられながらしきりに身を揺すっていた。

『アイツ、自分から腰振ってないか!』

『ブツ、ハハハツ! 人間には屈しないとかほざいてたの誰だよ!』

『最初から犯されるつもりだったんだよ! アムラスのは特別デカイからな!』

観衆からは罵りよりも、馬鹿にする笑い声のほうが大きくなっていく。

「気持ちいいんだな? 無駄に歳だけ重ねて男を知らなかったザコマ×コのくせに、一丁前に自分から腰を振ってるぞ?」

「ああおっ! おひつ、み、見るなあ……んお、こ、これは違つ……私は、そんなつもりは

あああ……!」

「つもりはない？ お前のマ×コが俺のチ×ポに吸いついてはなさないんだが？ こんな淫乱マ×コでよく今まで処女でいられたな、よほどエルフの男どもは粗チンばかりなのか？」

頑なに官能を認めようとしないうらラノアだが、アムラスは粗暴で我侷わがままな男である。反抗されれば、むしろ嬉々として責め立ててくる。

やれやれと呆れながらも、腰の角度を調節してペニスにグツと力をこめた。

「おごっ、おっ、おんんう……! こっ、これ以上入らないいい! んお、奥まで、届いてるからああああっ!」

そんな訴えも、苦痛を上書きする勢いで子宮へ強烈な快感を叩きつけていく。

「まだだ! まだイケるだろ! 俺の極太チ×ポでガバガバになったマ×コを、もっと客に見てもらえよ!」

「んぎい! いっ、いやだあああああっ! 私は屈しないっ、屈したくなんか——ああおとおおっ!」

子宮を突き破らんばかりにペニスがめりこみ、ララノアは激痛と快感が緋ない交まぜになった混沌の渦に呑みこまれていく。それでも肉体の反応は顕著で、一突きごとにアクメを叩きつ

けられているかのように痙攣が止まらない。

（気持ちよくない！　こんなので気持ちよくなるわけがっ！　わ、私は姫様を——王家の方々をお助けするのだっ!!　下賤な人間に子宮を潰されてながら、イグわけがないいいいいっ!!）

それでもララノアは必死で首を横に振り、理性を保とうとする。

「わかりやすすぎるだろ……まあ好きだけほざいてろ！　これから何百年も男を知らなかったマ×コに、種付けするところを見てもらうんだからなあ！」

アムラスは笑って、腰使いを加速させた。

「いつ、いあっ！　やめえええっ！　んごっ、ゴツゴツ突くにやああっ！」

種付けと耳にして背筋に悪寒が走り、思わず悲鳴をあげるララノア。しかしこれまで幾度となく女を犯し、弱点を知り尽くしている力強いペニス捌きに性感帯を刺激され、あつという間に声を上擦らせてしまう。

「今期待したな？　マン汁が一気に溢れてきたぞ？」

「ばっ、馬鹿を言うなあ！　んお、おっ……私は誇り高きエルフウ……お、お前に、お前にやんかにい……いんんんっ！」

心身共にズタズタにされながらも、ララノアは淫声をあげてしまう。目の前の絶望から逃

れるために、脳の防衛本能が感覚を狂わせているのかもしれない。

だがアムラスにとってそんなことはどうでもよかった。この男は自分の思うがままに女を弄り犯したいだけだ。

「遠慮せずイケよ誇り高いエルフ様あ！ 俺のチ×ポに屈して種付けアクメを客に披露するんだよ！」

艶を含んだ声で泣き喚くララノアに満面の笑みを浮かべながら、アムラスはラストスパ―トをかけた。

男を知ったばかりの肉穴へ、体を弾ませるほど力強くペニスを打ちつけていく。

「おぐううっ！ いぎっ、あああっ！ やめっ、やめりよおおっ、おおおっ！」

懸命に拒絶するが、ララノアの肉体はビクビクと痙攣するばかりだった。

「マ×コがどんどん熱くキツくなってきたぞ！」

当人の意思とは裏腹に、牡の逞しさが漲ったペニスによる容赦のないピストンによって官能は限界まで膨れ上がっている。途方もない悦びが下腹部で渦巻いており、かつてない境地へと押し上げようとする。

（イヤ、イヤだっ！ こんな男にイカされて種付けされるなんて絶対にいいっ！）
そう内心では思い続けていても、体はまるで主人の言うことを聞いてくれない。

絶望感に苛まれながらも、烈火のごとく子宮を抉られるララノアの顔は蕩とろけていた。

「イケよザコマ×コ！ 誇り高いエルフ様のアへ顔を見せつける！」

クライマックスが迫り、観客たちは食い入るように見つめている。ララノアの処女喪失と種付けアクメは、この場にいる人間の目に強く焼きつくことになるだろう。

「わ、私はイカにやい！ 私はず、わらひはああ——」

「おらあ!!」

アムラスが短く声をあげると同時に、張り詰めたペニスが子宮を串刺しにして、そのまま精液を撃ちつけた。

「——おおおおおおつ!?!」

大量の牡汁によって爆発的な勢いで子宮が張り詰め、最も過敏な場所で灼熱の奔流を浴びたララノアの理性は瞬く間に崩壊する。強烈な絶頂感に白目を剥くと獣じみた咆哮をあげ、アムラスに背を預けて仰け反った。

男根を啜えこんだ膣口がプルプルと震え、許容量を超えた白濁液が隙間を押し広げて溢れ出した。

『ギャハハハッ！ 生意気なクソエルフがガチイキしてやがる！』

『舌伸ばして涎垂らしてやがっぞ！ さすがアムラスのデカチンだな、なかなかあんなみっ

ともないイキ方させられねえよ!』

「んいやあああつ!! み、見るにや、見るにやあああつ!!」

ララノアは絶叫するものの、目尻は垂れ下がって衝撃が引かずに脚は突っ張ったまま。さらには結合部から精液を垂れ流しているため、場内はいつそう下品な笑いに包まれた。



屈辱のあまり目尻には涙が浮かぶ。圧倒的な快感の前に積年の想いなど無力でしかなかった。憎い人間によって、ララノアは人生で初めてのアクメを刻みつけられてしまった。

「無様にイツたじやないか。所詮あの玩具の同族か」

子宮にペニスを嵌めたまま、アムラスが嘲笑する。

「あ、ああ……そ、それはあ……っ！ 違う、わらひっ、私はあ——おほおっ!!」

言い訳の言葉すら浮かばないほど、敗北感と不甲斐なさに襲われる。解放軍としての使命やエルフの誇りを持ちながら、敵のペニスによって大勢の前で種付けアクメを晒してしまった。

さらにはそんな状態でも、体内で男根が震えた途端に甘美感を覚えている己がいた。

「ハハッ！ いいぞ。少しは身の程を知ったようだが、マダムとの賭けは始まったばかりだ。簡単に壊れてくれるなよ」

そう呟くと、アムラスは深く埋没させていた男根を再び抽送させ始める。

子宮を充満させるほどの射精をしたばかりにもかかわらず、極太ペニスは些かも硬さを失っていないかった。

「ぬひいいいい!! やめろっ、動くなあああっ！ んお、これ以上、私を乱すなあ——んあ、あへえええっ!!」

依然として絶頂の余韻に震えていた膾粘膜を掻き筆られ、ララノアは感極まったような淫声を迸らせ、そして――

ジヨロ、ジヨロロロ……。

先ほどの失禁で出しきつていなかったのか、抽送の刺激に触発された膀胱から堰を切ったように黄金水が溢れた。

『おい見ろよ！ アイツまた漏らしてるぞ！』

『何百年も生きてるババアだから、下が緩くなつてたんじやないか？』

『俺なら恥ずかしくて自殺もんだぜ！』

観衆の笑い声に、もはや言い返す気力も湧かなかつた。

するとそんな下品な声も、徐々に聞こえなくなっていく。

(アルフィリア様……申し訳ありません。いずれ必ず私が、お助けを……)

これまで培ってきた自信を打ち砕かれ、弄ばれた心身はとつくに疲弊しきっており、押し潰されそうになる心を懸命に鼓舞しながら、ララノアの意識は闇に溶けていった。

第Ⅱ章 尻穴を犯され達し、守ったエルフの誇り？

——負けた。

今は亡き東の森の国の騎士として、王家の救出は命を賭してでも成さなければならぬ至上の命題である。

戦時下のララノアはまだ騎士見習いの少女で、生き残った仲間と再起を誓いながら滅びゆく祖国を背に逃げることしかできなかつた。

解放軍に参加してからは、己の弱さを呪いながら訓練に励んできた。

もう誰にも負けないように。

もう誰にも奪われないように。

もう二度とあの悲劇を繰り返さないように。

だから貿易都市バルローニへの潜入任務を任された時、内心ではその場で叫びたくなるほど歓喜した。

役目はあくまで情報収集だが、王家のために尽くせることが嬉しかった。

場合によつては、自らの手で薄汚い人間から救い出すことができるかもしれない。

ところがそんな思いが空回りして、アルフィリア姫を発見したにもかかわらず自身のミスで囚われの身となり、拳句に領主代理の戯れで王族の解放を賭けて都市最大の娯楽の一つである闘技場への参加を余儀なくされた。

敗北すればその場で凌辱という下衆な人間が好みそうなルールではあったが、チャンスだとも思った。

賭けに勝ちさえすれば悲願を達成することができるとだ。

長命であるエルフは、人間と比べればはるかに長い時間を訓練に費やすことができるため、相応の実力を身に着けているという自負もあった。

しかし、結果はララノアの敗北だった。

強敵だという認識はあったが、それでもあの時はアルフィリアを盾にされたせいだと己を鼓舞してアムラスに立ち向かったものの、完膚なきまでに叩きのめされた。

エルフの誇りを取り戻すために、人間には到底不可能な長い時間を訓練に費やしてきたというのに、ララノアの剣はまったく通用しなかった。

剣は容易くいなされ、殴り飛ばされて首を絞められ、観衆に囲まれながら失禁するという無様な姿まで晒してしまった。

さらにはそのまま装備を剥ぎ取られ、嘲笑を受けながら凌辱された。

手も足も出ず、処女を散らされて笑いものにされた。

自身の不甲斐なさを思い知らされながらも、祖国を救えなかった時から女であることは捨てていた。無論純潔を弄ばれたことは悔しいが、ララノアにとって最も屈辱的だったのは、慰み者にされながらも本人の意思とは裏腹に、醜悪な男性器に貫かれた肉体には、少なからず浮遊感にも似た甘い刺激が生じていたことだ。

アムラスにからかわれるたびに否定していたが、あれが女にとっての悦びなのだと、直感的に理解できてしまった。

祖国を滅ぼした人間になぶ嘲られている最中、あの頃と同じように無力さに打ちひしがれながらも、性衝動を覚えてしまった自分自身が何よりの屈辱だった。

（私は、今まで何をしていたんだ……）

人間に虐げられるエルフの無念を晴らすために厳しい訓練に励んできたというのに、結果は何も変わらなかった。

アムラスが幾度目かの射精を終えて満足した頃には、初めて味わう強烈な性感に翻弄されたララノアは呆心状態だった。

ペニスを引き抜かれて支えを失うと、そのまま崩れ落ちて地面に倒れこんだ。

足元は特に、膾内に収まりきらなかった淫液と精液に塗れていたが、無力感に苛まれていたララノアは起き上がることさえできず、アムラスが退場した後もその場に放置された。

それからしばらくして闘技場の清掃係らしき奴隷によって、凌辱の痕が色濃く残った姿のまま宛てがわれた部屋へと運ばれた。

剣闘士は基本的に奴隷身分であるため、アムラスのように強い剣闘士でなければ待遇のよい部屋は与えられない。狭いうえに小窓が高い位置に一つあるだけで、日の光も満足に届かない。さらには鉄格子まで嵌められている。扉も分厚く頑丈な鉄製で、外から鍵をかけられており、そこはもはや部屋ではなく牢獄だった。

薄暗い室内の隅には排泄用の壺が置かれ、唯一のベッドも適当にまとめた藁にシーツを敷いただけの粗悪品だったが、処女を散らされた屈辱と無力感に苛まれているララノアには似合っていた。

そして、覚束ない足取りで汚された体のまま崩れるようにベッドに身を沈めた。

藁がゴワゴワとして肌を刺し、ねっとりとした不快な感触と饜すえた臭いが鼻をつく。

一応体を拭くための布くらいは用意されていたが、敗北者に成り下がったララノアは身を

清める気力さえ湧いてこなかった。

気がつけば夜が明けて外はすっかり明るくなっていった。

外から聞こえてくる鳥の囀りまで、まるで自分を嘲笑っているように聞こえる。

「私は、アルフィリア様をお救いできるのだろうか……」

昨日の自信が嘘のように、ララノアは弱々しく呟いた。

まだシャウアとの賭けに負けたわけではないが、人間の剣士があれほどの強さを有していたなど、想像もしていなかった。

「私は馬鹿だ……」

短命な人間には不可能な、長い時間を鍛錬に費やしてきたことで、自分が強くなったと錯覚してしまったのだ。

そもそも人間が弱ければ、かつてララノアが従事し、尊敬していた騎士ヴィルヘルミナの率いた騎士団も敗北しなかったはずであり、東の森の国が侵略されることはなかったはずだ。

たとえば短命ゆえに世代が変わったとしても、弱くなったと断じる理由にはならない。そんな簡単な考えにも至らなかつた自分が、愚かしくてたまらなかつた。

そうして後悔の念に沈んでいると、不意にガチャリと鍵が開く音が聞こえ、重い扉が開か

れた。

「やれやれ、こんなことだと思いましたよ」

身を起こす気力もないため視線だけ動かすと、そこにはララノアを闘技場へ参加させるきつかけを作ったウルスラが入ってきた。

彼女を目にした瞬間、現実には打ちひしがれるばかりだったララノアの瞳に怒りの色が宿る。だが当人は特に気にする素振りもなく、小さなため息を漏らした。

「……私を笑いに来たのか？」

自己嫌悪に陥っていたとはいえ、敵地にいなながら訪問者の気配にすら気づけなかったことを不甲斐なく思ったが、彼女にそれを悟られるのが悔しくて誤魔化すように話を急かす。

「違いますよ。シャウア様がお呼びです」

「……っ！」

「ですがその前に——」

ウルスラは淡々と用意していた水を張った桶とタオルをベッドの脇に置くと、シャウアの名前を聞いて表情を歪ませるララノアの手を取って強引に起き上がらせた。

「な、何を……？」

「このまま出歩くつもりですか？ まあそのような性癖を持っているのなら無理に止めはし

ませんが、乾いた精液で髪や肌がカピカピですよ？」

「うっ……」

凌辱のショックで身を清めるどころではなかったため、髪はボサボサで所々固まっており、倒れた時に付着した土や砂がそのままだった。

指摘されると、自分がどれだけひどい姿をしているか改めて思い知った。

「ついでに臭いますよ？ まあ敗北した挙句に凌辱されたショックで無気力になったのですから、気づけなくても仕方がないのかもしれないかもしれませんが」

「……うるさい」

すべてを見透かしたようなウルスラに苛立ちを覚えるが、彼女の言う通りであるため、恨めしく呟くのが精いっぱいだった。

「とりあえず体を拭きますので、ジツとしていてください」

「用意がいいことだな」

「私は剣闘士の管理と教育も任されていますから。初めて敗北した翌日は、ショックから立ち直れない人も珍しくありません。あなたのように自尊心の強い方は特に」

「当たり前だ！ エルフの誇りを踏みにじられて、平然としていられるものか！」

「……確かに、そうかもしれないですね」

ララノアと会話を続けながら、ウルスラは水を絞ったタオルでテキパキとララノアの体を拭いていく。手慣れた様子で、柔肌を傷つけないように丁寧に、無様に弄ばれて汚れた肉体を擲捨することもなかった。

シャウアに傅き、ララノアを闘技場へ送りこんだ同族の裏切り者とは思えないほど優しい手つきに、内心混乱する。

「お前はいったい何人の同胞を陥れてきたのだ……なぜそんなに平然としていられる!？」

「これが私の役目だからです」

迷うことなくきっぱりと言つてのけるウルスラ。

「……エルフの誇りや同胞を売つてまで、その地位に縋りたいか！」

奴隷ギルドに所属していればエルフでもそれなりの自由が守られているが、ウルスラは領主代理であるシャウアにも意見しており、明らかに他の奴隷よりも地位が高いのは容易に予想できる。そしてそれはシャウアや敵である人間に尻尾を振つて得たものに他ならない。ところが、次に彼女の口から発せられた言葉は、ララノアが想像していたものではなかった。

「アルフィリア様に尽くすことが、私の役目です」

「……は？」

一瞬、彼女が何を言っているのかわからなかった。

「私の忠誠は王族の方々のみに向けられています」

だから多くの同胞がどのような仕打ちを受けようと関係ないと言いきった。

思ってもいなかった発言に啞然とするララノアだったが、不意にかつての記憶が脳裏を過った。

「な、なにを言って……いや、ウルスラ？　確かヴィルヘルミナ様がおっしやっていた王族の侍女の方の名前も、ウルスラと……っ!？」

「あなたは、ヴィルヘルミナ様を知っているのですか？」

ララノアの眩きを耳にした途端、これまで一度も表情すら変化させなかったウルスラが目を見開いた。

「わ、私はヴィルヘルミナ様の従者で騎士見習いをしておりましたから……」

彼女の反応から記憶にあった人物と確信すると、ララノアの中で憤りよりも驚きが勝つて、幾分か態度が軟化する。

「そう、そうだったの……その気位の高さはあの人譲りということですか」

「い、いえ私ごときが恐れ多いです！　当時騎士見習いだった私は、ただ憧れるばかりで……最後までお供することすらできませんでしたから」

和平のためにバリステン王国へ嫁いだアルフィリアが、当時の国王に非道な仕打ちを受け

っていると知り、ヴィルヘルミナ率いる騎士たちが救出に向かうことになったが、未熟だったララノアは同行を許されなかった。

出立を見送ることしかできず、それがヴィルヘルミナの最後の姿となった。

バリステン王国に拿捕だほされたと聞いたが、以降瞬く間に戦況は人間側の有利に傾き、拳句には王が人間の手によって討たれ、ララノアたちは敗残兵となって北の森の国へ助けを求めて亡命し、再起を図ることとなったのだ。

そして時を経て王家の再興の足掛かりの礎いしずえとなるつもりが、ララノアの迂闊な行動によって頓挫しようとしている。気がつけば悔しさのあまり、握りしめた拳に爪が食いこんで血が滲んでいた。

「……少し、安心しました」

「え？」

「私では、アルフィリア様たちを連れて逃げるなんて不可能ですから」

「あなたは、まさか……っ！」

目を剥くララノアに対して、笑みで返すウルスラ。垂れた前髪を掻き上げて眼帯を見せると、そこにはエルフ王家の紋章が刺繍されていた。

それは彼女の王家に対する忠誠心の表れだった。

「私がアルフィリア様と再会できたのは、本当に偶然でした」
ウルスラは天を仰ぐと、目を細めて語る。

「実は私は百七十年前にアルフィリア様と同じ奴隷商に飼われていたのです。しかしアルフィリア様が他の人間に買われてしまい、なんとか探そうと逃げ出したのですが捕まり……罰として目を抉られ激しい拷問を受けました」

そつと、抉られた跡に眼帯の上から触れるウルスラ。

「その後は私も売られて各地を転々としました。ですがアルフィリア様の行方は知れず……しかし四十年前ほど前、今の主人であるシャウア様の元へ流れ着き、礼儀作法や教養があることを認められて雇っていただけになり、奴隷の管理を任せられました。そして彼女が所有している奴隷の中にアルフィリア様がいたのです」

どれほど過酷な時を過ごしてきたのかは想像に難くないが、再会することができた当時を思い出したのか、ウルスラは口元を綻ばせていた。

「もはや東の森の国はなくなっしまいました。私の忠誠心は揺らぐことはありませんでした。なので私は、シャウア様に家畜小屋の管理人になれるよう進言しました。すべてはアルフィリア様のお世話をするために……」

元王家の侍女であるウルスラにとって、アルフィリアやベアトリスら王族の安全を最優先に考えるのは当然のこと。解放軍との繋がりもなく戦闘能力を持っていない彼女では、人間の都市から連れ出すなど不可能だ。

ウルスラは自分が可能な範囲で食事などの健康管理を行い、解放軍のような救いの手が現れるのを待っていたのだろう。本物の忠誠心を感じ取ったララノアは、彼女のこれまでの行いが理解できた。

そして、その考えに至ることのできなかつた己の浅慮を責めた。

「そういう、ことですか……」

非力な彼女では、己の地位を利用して最低限の安全を確保するのが精いっぱい、他の同胞よりも王族を優先させただけのこと。それでも所有者であるシャウアには逆らえず、家畜として人間の慰み者にされるアルフィリアを眺めていることしかできず、ひたすら耐えるしかなかつた無念は想像を絶するものだろう。

それと比べれば、ララノアはまだ一敗しただけである。

人間にも強者がいることを思い知り、到底樂觀できる状況ではないが諦めていい理由にはならない。

「実はあなたにお聞きしたいことがあるのです……」

唐突に、ウルスラは真剣な眼差しをララノアへ向けた。

「き、急にどうしたのですか？」

態度が急変し、たじろぐララノア。そして次の言葉に大きく目を見開いた。

「アルフィリア様と母后ベアトリス様の御子……お二人の殿下はご無事ですか？」

「ど、どうしてそのことをっ!？」

ララノアの分かりやすい反応に、ウルスラの口角がほんのわずかだが吊り上がる。

「アルフィリア様と共に奴隷にされた者なら知っております。人間の戯れによって弟君ビョ
ルン様と交わらせられ産まれた御子様……近親の忌子であります。王家の正統な血筋のお二
人……! その御子様を東の森の国の敗残兵がお連れして逃げたと聞いております! お二
人はご無事なのですかっ!？」

落ち着いた様子から一変し、力をこめてララノアの肩を掴むウルスラ。

あまりの鬼気迫る勢いに、ララノアはつい最重要機密を漏らしてしまう。

「お、落ち着いてください! 誰かに聞かれてしまいます! 王家の御子様——王子たちは
ご無事です。場所は言えませんが我々がちゃんと保護しております!」

「そうですか……それはよかった……」

安堵したウルスラは、元の落ち着いた雰囲気を取り戻した。

「お二人の殿下に関してはそのシャウア様も知りません……どうかご内密に。特にあのシャウア様には」

あの血も涙もない悪魔のようなエルフ、シャウアの下で自分の身の安全のために同胞を貶めているなどと考えていた自分が恥ずかしいと、自己嫌悪するララノア。どのような劣悪な環境に置かれようとも、彼女は必死に王家を守ろうとしていた事実には、彼女こそ本物の忠臣だと感動さえ覚えた。

さらにウルスラは、二人の王子のためにララノアの勝利を望んでいるのだ。

すべてが敵だと思っていたが、実は味方がいたことに一筋の光明が見え、ララノアは決意を新たにす。

「はい！ もちろんです！ 必ず勝つてアルフィリア様たちを助けてみせます!!」

ララノアの瞳に生氣が戻ると、ウルスラは顔を綻ばせた。

「体の清めは終わったので、次は着替えですね。替えの衣服はあちらの棚に用意してありますので……お手伝いはいらいますか？」

「いえ、大丈夫です！」

からかうように呟くウルスラに向かって、気概を取り戻したララノアは晴れ晴れとした顔でそう言うと、素早く立ち上がって棚に手を伸ばした。

すると今度は、その行動を眺めているウルスラの瞳の色が濁っていく。

「そうですね。お二人の御子様を必ずお救いしないといけませんからね……」
そのか細い呟きが、ララノアの耳に届くことはなかった。

「なぜ貴様がここにいるっ!？」

身支度を整えたララノアがウルスラに連れられ、シャウアの待つ応接間に通された第一声がそれだった。

そこには昨日観衆の前で自分を凌辱した張本人であるアムラスがいたのだ。

咄嗟に距離を取って身構えるが、当の彼は警戒するまでもないとばかりにソファにふんぞり返ったまま顔を向けるだけで動こうとしない。

「あ？ 何を言ってるんだお前は？」

意味がわからないと呆れ声で小馬鹿にしたような態度は、不快感を募らせるだけだった。

「貴様あ！」

実力差を思い知らされたが、再び使命感に火を灯したララノアは怖気づくことなく、今にも飛びかかりそうな勢いだった。

「あら、意外と元気そうね。アムラスは私が呼んだのよ。そもそも誰を招いたとしても、あ

あなたに断りを入れる必要なんかないでしょう？」

「くっ……」

妖しく微笑みながらも挑発的に、諭すような声で呟くシャウアと目が合い、渋々ながら口を噤んで睨み返した。

ララノアからすれば、自分を見世物にしながら純潔を奪った男がいるのだから気が気ではない。

「まあ言いたいことはあるかもしれないけれど、とりあえず座りなさいな」

「……いや結構だ。私はここでいい」

シャウアに促された座席位置はアムラスの隣だった。

対面する形で座る以上仕方がないことではあるが、許容できなかったララノアはきっぱりと拒絶の意思を示す。

「ああ、自分を女にした男が隣にいたらドキドキするものね」

「そんなわけあるか！」

ありえない発言に声を荒げるが、彼女はそんな反応も面白そうに眺めていた。

「そうなの？ でももう少し傍に寄りなさい。お話をするには少し遠いわ」

「よくもぬけぬけと……」

ララノアは苛立ちを隠そうともしないが、シャウアは意にも介さない。

仕方なく彼女と相對するよう正面に立つが、アムラスがいつ行動を起こしても反応できるように、常に彼を視界に収めておく。

「それにしても、本当に元氣そうね。てつきり負けたショックで泣いているかと思ったのだけど」

「あれだけ俺にボロ負けしたくせになあ」

シャウアは意外そうに、アムラスは煽るように声を漏らした。

「ふんっ……確かに貴様に負け、体を汚された。だがエルフの誇りまで失ったつもりはない！ アルフィリア様は必ず取り戻す！」

ララノアは強い言葉で啖呵たんかを切った。

今のままでアムラスに敵うとは思っていないが、闘う力を持たないウルスラが、彼女なりに王家に尽くし、守ろうとしていたことを知った今、騎士であるララノアが折れるわけにはいかない。

内心で渦巻く不安を掻き消すように、エルフの誇りを掲げて己を鼓舞する。

「誇り、ねえ……で、そんな志の高いエルフのあなたにとって、アムラスのチ×ポはどうだ

ったかしら？ 観客は盛り上がっていたけど、衆目監視の中で初めてのチ×ポを味わってイッた感想は？」

「……っ！ あんなモノ、汚らわしいだけだ！」

吐き捨てるように声をあげるが、全身を貫くように走った感覚が脳裏に蘇り、ララノアは咄嗟に身を震わせた。

「だそうよ、アムラス？」

「昨日はあれだけ喘いでたくせになあ……まあでも、いいんじゃないか？」

「あら、あなたにしては珍しく寛大ね？」

「何百年も処女を拗こじらせてたんだ。チ×ポのよし悪しもわからんのだから、いちいち目くじらを立てるほどじゃない。それに、他の男を知れば、どれだけこの俺のチ×ポが特別か、いやでも理解するだろう？」

「相変わらず大した自信ねえ」

「クハハツ、当たり前だろ。俺はアムラス様だぞ？」

チャンピオンとはいえ一介の剣闘士でしかないアムラスが、エルフとはいえ領主代理に対しても傲岸不遜な態度を貫いていることに困惑しつつも、まるでこれからもララノアが敗北

を重ねて下衆な男の慰み者になるものとして会話を成り立たせていた。

「……貴様らの思い通りになってたまるか！」

「昨日の今日でそんな風に言われてもねえ」

「そもそも、別に俺らがどうこうするわけじゃない。お前が勝手に思い知るっただけだ」

ララノアがどれだけ吠えても、アムラスは元よりシャウアも眉一つ動かさない。小柄な体軀には似つかわしくないほど大きく実った乳房や、足運びなどで彼女が戦闘向きではないと容易に想像することができると。しかし時折彼女から感じるプレッシャーは、数々の修羅場をくぐり抜けた歴戦の戦士にも近いものがあつた。

まだ幼さを残した容姿から、ララノアよりもかなり若いエルフだ。そんな彼女が欲に塗れた人間たちの中で、これほどまでの地位に上り詰めているのだ。得体が知れないという意味ではアムラス以上だろう。

「それだけ元気なら、早めに次の試合を組んでも大丈夫そうね」

「気遣いなど不要だ」

「別に善意じゃないわよ？ 命がけの闘いとはいえ観客にとってはショーでしかないもの。コンディションが整わないうちは出場させられないわ」

「私なら問題ない。あの程度で音を上げるほど柔ではないからな」

実際はウルスラの話を書くまではそれほどころではなかったが、敵である彼女たちにわざわざ伝える必要はない。

「クハツ、俺の前でそんなことが言えるなら確かに大丈夫だな。どちらかと言えば頭のほうが心配だが」

「はあく……どこからその自信はくるのかしら？」

昨日の敗北の印象が強い二人は呆れ気味だが、ララノアとしては何を言われようとも王家の救出以外に優先するものなど存在しない。

「私は諦めない！」

「またアムラスと闘うことになるとしても？」

「……そんなことでは屈しない。どれだけ体を汚されても、いつか必ずその喉元に食らいついてやる！」

根拠などないが、ララノアには闘技場で闘う他に選択肢など存在しないのだ。

「それも、エルフの誇りというやつかしら？」

シャウアの声がわずかに低くなるが、ララノアは気づかない。

「当然だ。どれだけ絶望が待ち構えていようと、必ず王家を復興させて虐げられてきた同胞の想いを、種族の誇りを取り戻す！」

今の時代、エルフを取り巻く情勢を考えれば決してありえない話ではない。しかし領主代理としてのシャウアしか知らないララノアには驚愕の事実だった。

「ふふふ、まだ幼かった私にとって地獄そのものだった。毎日ゲロを吐くまでザーメンを飲まされ、自分の腕より太いチ×ポで犯される……私は毎日助けてと心から叫んだわ。でも誰も助けてくれなかった。私は自分がエルフであることを呪い続けたわ。

でも私は母とまた会うことだけを心の支えに耐えてきた」

「……………っ」

ララノアはアムラスに犯され、たった一度の凌辱で心が折れかけたというのに、幼いシャウアは延々と犯され続けたという。それが想像を絶するほどの苦痛であったのは想像に難くない。もしも自分が同じ立場に墮とされていたらと思うと、冷や汗が吹き出して鳥肌が治まらなかった。

「だけど……私が人間の子を孕まされて出産間近の時、久々に会った母はもうチ×ポの肉欲に吞まれていたわ……エルフの誇りなんて微塵も感じない肉欲に囚われた獣のようだった」

そんなおぞましい記憶にもかかわらず、シャウアは笑っている。

「それでも母は私にとってすべてだった……だから私は母と一緒に犯されながら約束したのよ。ずっと一緒にいるって……何十年でも何百年でも一緒にね。そしてここで新しい家族を

いっぱい作ろうって……」

シャウアの微笑んでいるが、感情が一切ない冷たい表情にララノアは底知れぬ恐怖を覚え身震いした。

「私は母とここで産んだ子たちを守るためにこの街で生き抜いた。家族のためならいくら汚辱に塗れても汚泥を啜ろうとも耐えられる……そしてこの体一つで力を手に入れてきたのよ。家族を守るためにね」

繰り返された凌辱の果てに辿り着いた彼女の覚悟。ララノアが時折彼女から感じていた得体の知れなさの一端を垣間見た。

しかし同情することはできない。彼女は家族のためなら同族を奴隷に墮とすことも厭わない。ララノアとは決して相容れない存在である。

「あなたもアルフィリア姫を助けたかったら死ぬ気で足掻きなさい」

「……当たり、前だ。私は必ず貴様からアルフィリア様を取り戻す！」

予想もしていなかった壮絶な身の上話に吞まれかけたが、ララノアにも譲れないものがある。

「ふうん……そこまで言うのなら、あなたの言うエルフの誇りを見せてくれないかしら？もちろんタダとは言わないわ。そうねえ……闘技場の勝利数に一勝を加算してあげるわ」

「……どういふ風の吹き回しだ？」

身構えるララノア。

あまりにもあからさますぎる。

「決して悪い条件じゃないと思うのだけど？」

「本気で言っているのか？」

「ええ、私だって鬼じゃないわ」

白々しいにもほどがある。

しかし怪しいのは明白だが、一勝が加算されるということは、それだけアルフィリアの救出に近くなるということ。そしてそれは、シャウアが多少のハンデくらいでは自分の勝利は揺るぎないと確信しているということでもある。

「その油断が貴様の命取りになる……好きにすればいい」

「ご忠告感謝するわ……」

アムラスとの一戦で、人間も侮れないと思ひ知らされた。

ろくでもないことを企んでいたとしても、一勝は一勝である。もはや自分は穢された身である。さらに泥に塗れようが躊躇う理由がない。いずれシャウアの表情から余裕の笑みが消えることを幻視しながら、ララノアは悪魔の誘いに頷いた。

「ひっ、くう……あ、んあっ、あああっ……！」

艶めかしい声が絶え間なくこぼれていた。

ララノアがシャウアの怪しい提案を受け入れてから、すでに数十分が経過していた。

そして同じくその場にいたアムラスは、傍に控えていた使用人の奴隷に命じて食事を用意させ、ガツガツと頬張っていた。

大きな骨付き肉の骨までしゃぶり、また次の肉へと手を伸ばす。

「んぐっ……これはこれで美味いが、ウルスラの飯のほうが美味しいな」

「いつの間にか勝手に家の執事に用意させておいて、なんて言い草よ」

「俺には関係ない身の上話なんかを聞かされたんだ、これくらい許せよ」

領主代理を前にしても傍若無人に振る舞うアムラス。そしてシャウアもそれを受け入れており、特に咎めようとはしない。むしろ齒に衣着せぬ物言いを楽しんでいるようにも見受けられた。

コツクの腕を貶めながらも、食事の手は止めないアムラス。いくつもの肉の塊を食らい、血のように紅いワインで流しこむ。

「くふう、んんっ……ああ、おっ……！」

「そんな食べ方で味なんて分かるの？」

「下賤な身の上だからな、貴族様みたいな上品な食い方してたら、それこそ面倒臭くて味なんかわかるかよ。せつかくの飯なんだ、好きなように食わせろよ」

「そのわりには、ことあるごとにウルスラが作る食事と比べてるじゃない」

「俺の中で一番印象の強い味だからな。どうせ食うなら、より美味しいモノだろ？俺は三大欲求をとことん楽しみたいだけだ」

「ウルスラの教育の賜物かしら……？できればもう少し礼儀作法も躰けてほしかったわ」

「ハツ、生まれが孤児の俺らにそんな上品な真似ができるかよ」

悪態をつきながらも、シャウアの言葉には律儀に返していくアムラス。

「んうっ、うぐう……んふうう！」

「おい、さつきからうるさいぞ。食事中だ、黙れんのか？」

「だ、誰のせいだとお……んっ、あああ……っ！」

柳眉を吊り上げて抗議するララノア。しかし白い頬は仄かに赤みを帯び、瞳は潤んでおり、迫力に欠けていた。

唇の端からは涎が、そして淫裂からは蜜がトロトロと溢れており、小刻みに肩を震わせては、時折ビクンツと大きく震えてはくぐもった喘ぎ声をあげる。

「責任転嫁はダメよ。好きにしろと言ったのはあなたなんだし……誇り高いエルフは、この程度で挫けたりしないんでしよう？」

「ふう、ふう……んっ、くうう！」

闘技場の一勝と引き換えにシャウアから提示されたのは、ララノアがどれだけ強くエルフとしての誇りを抱いているのか証明すること。自分の母親があえなく快樂に屈した彼女にとって、そんなものは幻想だと嘲笑っている。

所詮はララノアも同じ穴の貉むじなだと。

シャウアにとっては単なる余興の一環なのだが、ララノアにとっても昨日衆目環視の中で犯されながら感じていたのは間違いだったと、弄ばれて悦ぶはずないのだと自分自身に証明したかった。

だから裸にされても、椅子に座った状態で後ろ手に縛られ、胴は背もたれと一緒に縄で括られても、脚も開いて股間を剥き出しにした体勢で固定される恥辱にも耐えた。

そして股間へ男性器に模した張型を挿入されて今に至っていた。

唯一誤算だったのは、シャウアがララノアを追いこむために用意した張型には、磨り下ろした芋が塗りたくられており、挿入されて間もなく膣内が猛烈な痒みに見舞われたことだっ

た。

拘束されて身動きが取れないため、堪えながらも体を震わせるララノア。しかし五分もすれば切なげに腰を振るい、間もなくしてギシギシと椅子の足を軋ませていた。

「あ、あぐう……うつ、くつ、ふう、うう……んううつ」

くぐもった、それでいて蕩けたように甘い声を漏らすララノア。

その気などないはずなのに、敏感な場所だけに嫌でも意識させられる。

唾液や淫液から漂う牝の香気。全身から吹き出した汗が幾筋も滴り、敵意を剥き出しにしながらも蠱惑的な色気を放っていた。

それを見ても玩具で遊ぶような目で見ているシャウアは、本当に同族なのかと疑わずに入られなかった。

「ねちっこいやり方だな……」

「あら、お気に召さないかしら？」

「少なくとも俺の好みではないな。従わんのなら力づくで屈服させればいいだけだ」

己に絶対の自信を持っているアムラスがつまらなそうに呟くと、シャウアはむしろ笑みを深めた。

「あなたらしいわねえ……だけどこの娘みたいなのは圧倒的な上下関係を叩きこむより、ね

つとりとじつくり責めてプライドとチ×ポを天秤にかけさせたほうが、面白いでしょう？」
その証拠に——とシャウアが指差す先には、露わになっっている白い乳房の頂でピンク色の突起が充血して天に向かっていた。

「ち、違うっ……これは何かの間違いだ……私は、そんな女じゃない……んんっ」
ララノアは首を振って否定するが、その顔は真っ赤で弱々しかった。

挿入した張型はよく磨かれています表面に凹凸がない。そのため腰を揺すった程度では痒い粘膜に引つかかることもなく、ツルツルと滑るばかり。勃起しきった乳首だけでなく、満足な刺激が得られないもどかしさから淫裂からは卑猥な蜜を垂れ流してヒクヒクと震えており、肉体がかなり昂ぶっているのが一目瞭然だった。

荒い呼吸を繰り返しながらも強がるララノアは、シャウアの視線の手前堪えてはいるが、小刻みに腰を揺らしては刺激を得ようと必死になっている。

つい先ほどまで、エルフの誇りだの口走っていたとは思えないほど滑稽だった。
「もうすっかり出来上がってるわね……」

切なそうに艶声を漏らすララノアを眺めながら、シャウアは愉悦に浸っていた。

「くうう……っ、こ、この程度でえ……っ！ んあっ、私は……負けなっ！」
舐めるように浴びせられる視線に、ララノアは不快感を訴えながら体を揺する。

しかししっかりと拘束されているため、視線から逃れる術はない。羞恥のあまり拘束を解こうとするが、太い縄や頑丈な椅子はどれだけ力をこめてもビクともせず、その必死な姿にクスクスとシャウアの笑い声が聞こえてくる。

「うぐうう……こんなことを、いつまで続けるつもりだあ……っ」

「まだ続けるわよ。これからが本番だもの。このくらいなら母さんでも耐えられたはずだから、誇り高いあなたなら問題ないでしょう？」

「ま、まだ何かするつもりか……あ、あつ、くう……ずっとこんな屈辱的な格好をさせた挙句、放置していたくせに……っ！　ふう、ふう……もういい加減に、解放しろお……おおっ！」

いたずらに弄られて肉欲を煽られ、ララノアは苛立ちを隠そうともせず荒い呼吸で大きく胸を上下させながら睨みつける。

「せつかちねえ……そんなに疼いてるのかしら？」

昂ぶっているのは明らかだが、シャウアはあえてララノアに尋ねる。

「そんなわけ、ない……っ！　んんう……この程度で、私が音を上げるとでもお！」

「へえ、そうなの。じゃあ今度はきちんとイカせてあげる」

「な、なにっ……!!　どういう、つもりだ……っ」

不敵に微笑むシャウアに、ララノアは思わず体を強張らせる。

「安心しなさい。焦らしたお詫びにたっぷり快樂を味わわせてあげるわ……気持ちよすぎても暴れないでね」

「き、気持ちよくなるわけが……っ！」

含みのある言葉に、胸中に不安が渦巻く。口には出さないが、昨日処女を失ったばかりのララノアは性に対する知識も経験も浅い。まだどれほどの性感が待ち構えているのかと、警戒心を抱かずにはいられなかった。

「ふふふっ……さあ、あなたの出番よアムラス」

「あ？」

唐突にバトンを渡され、アムラス自身も予想していなかったのか目を丸くする。

「勝手に食べた分くらい働きなさい。それとも闘技場チャンピオンのアムラスでもこの娘の誇りを屈服させる自信がないのかしら？」

「安い挑発だな。だがまあこの俺が奴隷エルフ一匹躰けられないなんて言われるのは、冗談でも癩しやくに障さわるな」

「別に無理に頼むつもりはないわよ？」

あからさまな物言いに、ララノアの知るアムラスであれば誰が相手でも容赦をしない印象

であったが、シャウアの挑発には笑みさえ浮かべていた。

その表情に驕りや嘲りはなく、彼女を対等な立場として認めているようにも見えた。

「ククツ……わかったよ、今回はお前に乗せられてやる。ただし俺のやり方でやらせてもらうぞ？」

そう言うと、アムラスは食事の手を止めてララノアと向かい合って立つ。

「ええ、好きにイカせてやってちょうだい」

「わ、私は屈しない……絶対に、誰であろうとお……！」

観衆の前で散々弄られた感覚が蘇ってくる。しかし気丈に振る舞おうとするララノアに対して不敵に笑った。

「ああ言ってる。お前がなんと言おうが俺のやることは変わらん」

「うひっ!? んあ、あああつ……んくう！」

膣口に挿れたままになっていた張型を引き抜くアムラス。強烈な痒みに苛まれている膣内は、前戯をするまでもなくトロトロに蕩けた粘液が大量に糸を引いていた。

しかしそれほどの卑猥な光景にも目もくれず、アムラスは膣穴に二本の指を添えて一気に突き入れた。

「ひぎいいっ!? んああああつ!!」

アムラスは膣粘膜の感觸や具合を確かめるような回りくどい真似はしなかった。

膣穴に埋めた指を挿入から間もなく前後させ始め、休む間もなく荒々しくも高速で掻き回すと、ララノアはか細い喉を震わせた。

それとほぼ同時に、激しい指使いの前ではなす術もなく、さっそく全身を引きつらせて指を締めつけていた。

「ああああっ……！ あっ、あひいいい！ 指、速いい……っ！ い、イクものかあ！ ああ、イキたくない！ 私が、んい、いつ、イカされてか、堪るかあ！」

「相変わらずこっちは喜んでるようだが？ そら、遠慮せず好きなだけイケよ！」
「やつ、やめっ！ んあっ、あああ……指を、動かすなあ！ ああっ、こんな違ううっ、違いうっ！ 私は感じてないっ！ 感じて、なんかあああっ！」

強烈な疼きと痒みに晒され、気がおかしくなりそうなほど焦らされ続けていたのが、一転して膣奥まで穿^{ほしく}り返すような力任せの愛撫に襲われると、堪えていたものが一気に溢れ出した。

「遠慮する必要はないぞ。いくらでもお代わりさせてやる」

痒みに悶えながらも、ララノアにはどうすることもできなかつた。

その苦痛から解放された肉体は衝動を抑えきれず、当人が望むと望まざるとにかかわらず

悦びがこみ上げてくる。

拘束している縄を軋ませ、椅子の脚をへし折らんばかりに悶絶する。

ララノアは押し寄せてくる絶頂感に抗えなかった。

ろくに身動きも取れないため、アムラスにされるがまま、無理矢理イカされ続ける。

「うぐっ、うああああっ！ やめろおお！ こ、こんなに長いのは知らなっ……んいい

っ！ も、もうイキたくないっ……もうイカせるなあああっ！」

どれだけ叫ぼうが、アムラスは手を止めない。

アクメに晒されている膣内を、淫液が泡立つほど乱暴に掻き回される。獣のような咆哮をあげて口を閉じることままたまらない。無様に喘ぎ声を迸らせて、縛られている椅子ごと跳ねる勢いで腰をくねらせて悶える。

「やっぱり力任せに犯すのが正解だったな」

壊れたように痙攣を繰り返すララノアを見下ろしながら、アムラスはシャワーに視線を向けた。

「まだ甘いわねえ。美味しい料理も毎日同じものじゃ飽きちやうでしょう？ 愛撫も同じ。

焦らしたから余計に敏感に反応してるの。まあ大抵の奴隷は力づくで快樂漬けにしてもいいんだけど、この娘は一応大切な情報源だもの。すぐに壊れてもらったら困るわ。それにちよ

つと意固地になつてゐるから、緩急をつけてじつくりと快樂のよさを教えてあげるのも面白いわ」

「そんなものかねえ……」

興味なさに眩くアムラスだが、返す言葉が浮かばなかつたのか、声にどこか悔しさを滲ませていた。

「だけでも『緩』の時間はとつくに終わつてゐるもの、遠慮なくイキ狂わせてしまいなさい」

「ふん……言われなくてもそのつもり——だつ」

ただでさえ終わらないアクメになす術がないというのに、アムラスはララノアをさらなる悦樂の高みへ追いやろうとしていた。

膣内はかぶれて、痒みに苛まれている膣粘膜は過敏になつて全体が性感帯と化している。

それを理解しているアムラスは、責めるポイントなど小難しいことは考えず、今し方シャウアに窘められた憂さ晴らしをするかのように、指を前後に振り乱す。

「あひいいいつ!? あああつ、あ、あまり乱暴につ……するなあ! あぐううっ!」

「クハハっ、これまで我慢していたんだからたっぷりイケよ! 別に身構える必要はないぞ。俺がたっぷり潮を噴かせて天国を見せてやるよ……!」

アムラスは潮を噴かせることを声高に宣言すると、軽く爪を立てつつ鋭敏な粘膜を徹底的に弄り尽くしにかかる。

「ひぎいいっ！ きっ、あっ、やめっ……やめ、ろおおっ！ んんう、止まらないっ、止まらないいいいいっ！」

絶頂を迎えている間も容赦なく指を突き入れられ、ガタガタと椅子ごと体を痙攣させた。掻き出された汁は内腿を伝って座面に広がり、足元へ滴っては水溜まりを作り上げるほどに無様な姿を晒し続ける。

「ああ、おっ……手を、どけろおおっ！ あ、頭おかしくなるううっ！ んあ、あああっ！ そ、それでも私は、負けないいい！ んお、おおっ……た、たとえ何回イカされたとしてもお……おおおんっ！」

「おかしくなれよ！ 余計なことは考えるな！ お前はイクことだけに集中してろ！」
ララノアにとってアムラスもシャウアも敵である。負けるわけにはいかないと、蕩けて下がりそうになる目尻を気力で吊り上げながらも、彼の言葉を魅力的に感じられてしまう自分も存在していた。

どれだけ歯を食いしばろうとしても、溢れた淫液に塗れた指で膣内を執拗に磨き上げられると、熱いものがこみ上げてくる。誇り高いエルフにあるまじき滑稽な姿を晒していると分

かっついていても刺激に踊らされ、何度も背筋を反らして跳ねてしまう。

「うああっ！ い、いやだああ！ 奥が熱くなつて、また大きいのがくるう！ あああっ、私はイツてない！ イツてないのにつ、またっ……まあああっ!!」

濁流となつて押し寄せてくる快感に取りつかれ、声を発することすら敵わない。限界を超えてとつくに果てているはずが、限界のさらにその先が迫っているような感覚に見舞われる。膣内は忙しく痙攣し、尿道口まで疼いてヒクヒクと蠢いていた。

「まだイケてないんだったら、もっと気合を入れてやるよ！ 存分に潮を噴いてイツちまいなあ！」

アムラスがわざとらしく声をあげると、発情した肉体は絶頂に悦んでいるのか、膣口が収縮して膣内を蹂躪している指を締めつけてしまう。

「あああああっ！ ひぐっ、いつ、いい……んぐううっ！ いひっ、いあああっ！」

「ハッ、イツてないとかこれでよくもぬけぬけと……だったらイカせられない詫びに、たっぷり潮を噴かせてやる！」

ララノアのけたたましい嬌声に呆れながら、アムラスは指先を蕩けている膣粘膜に深く食いこませ、抉るように擦りあげた。

「いぎいいっ!? ひああ、おっ、おっ……おほおおおおんっ!!」

指の熱さと硬い爪で搔き毟りたかった痒みも刺激され、アクメからさらに達した悦楽に塗れたララノアは、音が鳴るほどの勢いで大量の潮を噴き上げた。

縄を引き千切らんばかりに軋ませ、全身がガクガクと激しく痙攣し、緊縮した膣口はあらん限りの力で指に食らいついていた。

「いやあああつ！ んごつ、こ、こんなの知らないっ！ これはダメっ……いああつ、く、狂うう！ おつ、おかしくなるう！ 頭が真っ白になって、馬鹿になってイキ狂っちゃ——んおおおっ!!」

膣口から飛び散る潮は、間欠泉と見紛うばかりに派手な様相を呈しており、ララノアと向かい合っているアムラスをビシヤビシヤに濡らしていた。

「ふんっ、家畜でももつといい声で鳴くぞ。まあこのスケベな水芸は評価してやるから、とことん出し尽くせ！」

豪快に潮を噴くララノアを愉快に嘲りながら、アムラスは収縮する膣穴を穿って責め続ける。

「んぎいい……いいっつ！ いお、おおおつ、止まらない！ 止まりやないいいっ！ あおおつ、おあああああつ!!」

苛烈な刺激に思考さえままならなくなってきた。

徐々に呂律が怪しくなり、叫ぶばかりで頭の中が真っ白に弾けたようで、狂ってしまったと錯覚するほどだった。

「呆気ないな……誇りはどこへいったんだか、なあ！」

アムラスはため息交じりに呟くと、トドメとばかりに膣内で指を曲げると、手首のスナツプを利かせてとりわけ敏感なGスポットを抉るように突きこんだ。

「おおおっ!? おほおおおおんっ!!」

一際大きな淫声と共に潮をしぶかせると、アムラスは膣穴から指を引き抜いた。

ヌポツと粘着質な音を立て、ベツトリと纏わりついた淫液が滴る。

「おい、何一人で満足してるんだ？」

「あ、あああ……あひつ、い、あ……はあ、はあ、ああ……っ」

指が抜けたことで刺激こそなくなったものの、余韻に痺れるララノアはまともに返事を返す余裕すらない。しかしそれを汲んで気遣ってくれるものなど、この場には一人もいなかった。

「チツ……」

肺にめいっぱい空気を取りこんで荒い呼吸を繰り返すララノアに舌打ちすると、アムラスはおもむろに拘束している縄を引き千切った。

すると終わらない絶頂感に晒され続けて脱力しきっていたララノアは、自身の姿勢を支えることもままならず、体勢を崩し、前のめりになって椅子から転げ落ちた。

足元の絨毯がクッションとなって衝撃は抑えられたものの、己の体液が染みこんでいる場所へ顔面から突っこむ。顔面をぶつけた鈍い痛みも、グシヨグシヨに淫液を吸った絨毯の不快感すら気にもならない。さらには膝をつき、自ら臀部を突き出しているような滑稽な姿まで晒していた。

だが疲弊した肉体は起き上がる力すらなく、ピクピクと小刻みに震えて膣口を息づかせるばかりで、まるで自らアムラスに肉穴を差し出しているようでもあった。

「はああ、あ、あふああ……あ、ああ……」

頭が茹だるような快感の連続に、ララノアはまだ意識が朦朧としており、アムラスの行動に気づけなかった。

「おい、いつまでへばっているつもりだ」

アムラスは冷たく言い放つと右手を振りかざし、突き出された美臀へ容赦なく振り下ろした。

「ひぎい!？」

その瞬間、だらしなく涎を垂らすばかりだった唇から、無様な悲鳴があがった。

剣闘チャンピオンであるアムラスの太い豪腕から繰り出される平手打ちは、一撃で淫欲の波をたゆたっていたララノアの意識を現実に取り戻した。

「やっとお目覚めか？」

ララノアはまだ呼吸が整いきっていないものの、振り返ってアムラスをキッと睨みつける。

「なにを、する！」

「それはこっちのセリフだ、戯け。なにを一人で満足した気になっているんだ」
言葉の意味を理解したララノアは目を剥き、愕然とする。

「ま、まだ続けるつもりなのか!？」

「むしろなぜ終わりだと思った。イッたのはお前だけだぞ？」

「そ、それは……」

「お前は今のうちに奴隷としての身の振り方を心掛けておけ」
アムラスは再び手を振り抜いて強烈な平手を打ちつけた。

「ひぐっ！」

「ふんっ」

「ああああっ！」

躡けるかのように、アムラスは立て続けに臀部への平手打ちを繰り返す。彼はララノアがシャワーとの賭けに負けることを前提に、奴隷に堕ちたものとして扱っていた。

（散々弄ばれた拳句にこの仕打ち、本当に屈辱だ……しかし、今だけはありがたい）

己を辱めている相手に、わずかでも感謝を抱かなければならない不甲斐なさに、ララノアは拳を握りしめる。さんざん焦らされた直後に執拗な愛撫を見舞われ、吹き荒れる快感に頭がおかしくなりそうだった。

そんな意識さえ飛びかけていたところへ、アムラスによる容赦のない平手打ち。無論このような仕打ちにショックを禁じ得ないが、白い柔肌にくつきりと赤い手形が浮かぶほどの痛みは、ララノアに正気を取り戻させてくれた。

（今のうちに己の妄言に酔いしれていればいい。今は耐え忍ぶ時……私は絶対に快樂に負けはしない！）

まだ肉体に蔓延^{はびこ}る甘い痺れは健在で起き上がることさえ難しい状況だが、打たれてヒリヒリと痛む臀部の熱が、この屈辱的な状況を思い出させてくれる。どれだけ自分が穢されようと、一歩でもアルフィリアの奪還に近づけるのであれば手段など関係ない。今しばらく耐えるだけだと自分に言い聞かせる。

だがララノアはまだ理解できていなかった。人間の果てしない肉欲への渴望と、快樂という底の見えない深淵を。

「じゃあ次はこっちの穴で俺のチ×ポを満足させろよ」

「ぐっ……す、好きにしろ」

観衆に晒されながら処女を奪われた記憶が過り、今度こそ快樂に流されて堪るものかと齒を食いしぼる。しかし次に訪れた感触によつて目を見開くことになる。

アムラスは突き出されたララノアの臀部を両手で掴むと、尻肉の谷間を左右に広げ、しとどに濡れた淫裂と不浄の穴を露わにした。

身を硬くして膣内への挿入を警戒していると、おぞましいペニスの感触は膣口ではなく、その上部に位置する窄まりから感じられた。

「んなっ……!?! な、何をしている!?! そこは、違う!?! そこは——」

「やかましい!?! そんなことを俺が知らんわけがないだろう」

「だ、だったらどうし——てえ!?! な、何をする!?! 汚らわしいモノをそこに押しつけるなあ!?!」

「お前が潮を噴きまくったおかげで塗りたくった芋はほとんど流れ出ただろうが、万が一俺のチ×ポがかぶれたらどうする??! そもそもこっちの穴でもセックスはできるから問題な

い。今後使うことになるだろうからな、今のうちに俺が慣らしてやるよ！」

「何を考えているんだ貴様は！　そ、そんな場所でなど、異常にもほどがある！」

「これだから森暮らしの潔癖なエルフは……どうせ言っても信じないだろ？　だから実際に試させてやるよ！」

混乱するララノアをよそに、アムラスは尻たぶを掴む手に力をこめて腰を押しこんでいく。

「じ、冗談ではない！　そんなところまで貴様に——」

「お前に拒否権はない。それが今回のルールだろう？」

「くっ、それは……」

好きにすればいいと認めたのはララノア自身である。ここでこちらから約束を反故にすれば、今し方まで耐えてきたものが水泡に帰してしまう。

「そもそもお前なら問題ない。羞恥を感じるなど最初だけだ。お前ならすぐに俺のチ×ポが病みつきになるだろうぜ」

「うひい！　そ、そこは不浄の……こじ開けるなあ……待て！　や、やめっ——」

堪らず肛門を締めつけて侵入を拒むが、強引に亀頭でこじ開けられていく。

排泄の穴まで弄ぼうとする人間の浅ましさに戦慄し、同時に顔から火が出そうなほど羞恥

が燃え上がった。

「案の定、だな。昨日まで処女だったくせにちよつと弄っただけでマ×コを大洪水にしゃがって……尻穴も柔軟じゃないか。初めてですんなり俺のチ×ポを啜えられるんだからな。奴隷に堕ちたら、俺専用のチ×ポケースにしてやろうか？」

従順な尻穴に感心すると、アムラスは一気に腸内へとペニスを埋めていった。

「あおっ!? んおおおおおっ!!」

無理矢理肛門を広げられて男根を押しこまれた衝撃に、ララノアは獣ばりの絶叫を迸らせた。

「わかるか？ 俺のチ×ポが全部入ったぞ！」

括約筋などものともせず、アムラスの勃起したチ×ポは根元までララノアの腸内へ埋没していた。

「んお、おっ……そんな、バカなあ！ し、尻穴につ……ひう、んんんっ！」

普段外部から刺激を受けない場所であるだけに、驚くほど敏感だった。

背筋が震え、圧倒的な挿入感に唇を震わせながら、言葉を紡いでいく。

「ハッ、驚いてるわりには、随分と気持ちよさそうな声を出すじゃないか。本当に初めてか疑いたくなるくらいだ」

「ふい、いいっ……こ、こんなもの、初めてに決まっているう……んおおっ！ わ、私は、気持ちよくなどおお……っ！」

「自覚がないのか？ 盛りのついた獣みたいな声だぞ」

アムラスは薄ら笑いを浮かべながら、さっそく腰をくねらせると、ペニスで円を描くように動かし始めた。

「おっ、くううっ！ 動くなあ……な、なにが楽しいのだっ、こんなものお……こんなあ、あああっ！」

熱くて鋼のように硬い男根が尻穴を貫いて蠢いており、筆舌に尽くし難い汚辱感に苛まれる。嫌でも意識してしまう存在感に、ララノアは身震いが止まらなかつた。

（人間はどこまでっ……不浄の穴でこのような……挿入できればどこでもいいというのか!? ありえない、狂っている……っ）

想像だにしていなかつた行為に愕然としながら、ただ耐えるしかないララノア。

「どうだ？ 少しは尻穴がよくなってきたか？」

「くっ、ふう、ふう……バカも、休み休みに言え——いいんっ！」

認めるわけがないはずなのに、ララノアの声は抵抗しつつも快感を表すものだった。

叩かれて調子を取り戻したはずが、自分の中の常識が加速度的に崩れていくのと同時に、

これまで経験したことのない感覚が尻穴から芽生えているのも感じた。

（なんだ、これは……あ、ありえない！ この私がこんなっ……不浄の穴で感じるなんて、ありえるはずがっ……！）

腸内を埋め尽くす異物感に息を詰まらせるくらいしかできなかつたところへ、突然アナルに芽生えつつある性感に戸惑う。錯覚だと頭を振ってみるが、広げられた尻穴とその周辺の粘膜から生じる感覚は決して不快ではない痺れだった。

「こんなに早くお尻で順応できるなんて、素質は充分といったところかしらね」

肛門へ挿入して間もなく、甘い喘ぎ声をこぼし始めたララノアに、アムラスにバトンを渡してから静観していたシャウアも感心したように呟いた。

（この感覚はどういうことだ……?! よりによって、そんな……最初は痛いくらい無理矢理広げられてたはずなのに……なぜ、今はジンジンと疼いて……!）

ララノアとしては「ふぎけるなっ！」と声を荒げたい場面だというのに、予想もしていなかった感覚に言葉に窮してしまう。

奥まで挿入されると強い圧迫感と息苦しさを覚えるが、腰を引かれると腸粘膜とカリが擦れて、間違いなく甘美な刺激が背筋を駆け抜けた。

今し方己の不甲斐なさに活を入れたばかりだというのに、排泄器官を貫かれていくうちに

再び理性が揺らぎつつあった。

「ほあ、あつ、ないっ……絶対につ、不浄の穴で感じるなど、ありえるかあ……！」

必死でアムラスの前では感じまいとしているが、男根の熱を直に感じている腸粘膜から生じる愉悦は、もはや錯覚だと自身を誤魔化しきれないほど膨れ上がっていた。

「まあ、そう思いたければそれでいいんじゃないか？」

アムラスは適当に返すと、ストロークを大きくして腰を振った。

どれだけ歯を食いしばっても、男根が引いていくたびに蕩けるような官能が全身を駆け抜ける。排泄感にも似た感覚に加えて、長大なペニスの圧迫感が薄れていく安心も手伝って、悦びも一入だった。

（入ってくる時はきつくて、苦しいはずなのに……！）

根元まで挿入されると息が詰まるほどの存在感に身を硬くするが、その逆をされると全身から力が抜けそうになる。昨日処女を失ったばかりであり、さらに汚辱に塗れているにもかかわらず、ララノアの反応は官能に彩られていた。

辛うじてアムラスを睨みつけるものの、肛姦によって腰がプルプルと震えてしまう。

「昨日まで処女だったくせに尻穴で喘ぐか……さすがは淫らで卑しいエルフだな！」

アムラスはララノアの細い腰をしっかりと掴むと、丸い尻肉へ腰を打ちつけていく。

「んおお……っ、おおっ、止めろ！ こ、擦るなああ……あああつ！ あくう……ふう、ふう、そこは排泄器官だぞっ、お、おおおっ……この変態めええ！」

非難の声をあげながらも、淫声を抑えきることができない。嘆きとも喜びとも受け取れる様子だが、彼らには後者にしか聞こえない。

「ククツ、だったらこの糞をひり出すことしか知らなかったケツ穴を、チ×ポを突っこむと嬉しすぎて発情するマ×コと同じように躡けてやろうか！」

アムラスは愉快にそう宣言すると、抽送の速度を上げた。

「おごっ!? おほおおっ！ お、尻の奥を、掻き回すなあ！ ああんっ、んんう……やめっ、やめろおお！ お、おんっ、捲れて、しまおう！」

「無様だな。ケツ穴を穿られて悦びやがって……」

侮蔑の言葉を投げかけ、アムラスは遠慮なく腰を振るう。

（なぜだなぜだなぜだあ！ 感じたくないのにつ……尻の穴を犯されているというのに、なぜ私は気持ちいいなどと……!）

アナルセックスを嫌悪しつつも、ララノアの肉体は確実に昂ぶっていた。

「もう一度聞くぞ、ケツ穴を犯されるのは気持ちいいか？」

「うぎいい……き、気持ちよくななど、おおおっ……ぐっ、な、いいんっ！」

「そのわりには、腰を引くたびに間抜けな声をあげているようだが？」

「くひいいいいっ!!」

頭の中が真っ白になるほどの衝撃に、震えが止まらない。

「別に認めるくらい問題ないだろう？ 尻穴で感じていると、誇り高いエルフは糞穴で快感を覚える変態なのだ」と

「ふう、ふう、ふざけるなあ……あおおっ！」

実際、快楽を認めたところで、まだシャウアとの賭けに決着がついていないララノアが奴隷に墮とされるわけではない。認めようが認めまいが、今はどちらを選んでも立場が変わるわけではない。むしろ快楽を受け入れれば意地を張る必要もないため楽になれるかもしれない。

だがエルフの誇りを嘲笑ったアムラスとシャウアの前でそれを認めることは、ララノアの中では敗北と同義であって、絶対に認めるわけにはいかなかった。

「予想通りで面白味のない反応だが、それなら体に認めさせるまでだ」

アムラスは自信に満ちた笑みを浮かべ、叩きつけるように力強い腰使いを見舞い、さらに平手で尻肉を叩いてくる。

「おおおおっ！ まっ、待てえ！ おぐっ、乱暴につ、するなあ……あああっ！ んん

う、こ、壊れるううっ！」

「クハッ、まだ余裕だろう？ 認めるまでどんどんいくぞ！」

「ひぐう！ くっ、止めえ……っ！ あああっ、あひいっ、いぎっ、いいいっ！」

「遠慮するな、もつと感じろ、チ×ポに身を委ねてバカになってしまえ！」

平手打ちとともに加えられる猛烈なピストンによって容赦なく腸壁を摩擦され、ララノアは調子の外れた声でよがり狂う。一度は蘇った理性も瞬く間に劣勢へと追いやられ、暴力的なまでの官能が脳内を侵食していく。

鼓動が加速し、全身の火照りが治まらない。ひっきりなしに喘いで閉じられない唇からは、ダラダラと涎を溢れさせて見るに耐えない表情を晒していた。

「ああ、おっ、おかしくなるっ！ こんな、頭がおかしくなるう！ ふああっ、あくううっ……こんなに、気持ちいいなんてっ……あああっ、ありえないっ！」



は気づかない。迫りくる絶頂の波に、腰の痙攣が止まらなくなっていた。

「今さらなにを気取ることがあるんだか……まあいい、俺もイッてやる！」

アクメに達しようとしていると、アムラスもまた射精を宣言した。

「あひいいいっ!? そ、そんなっ……ダメだ！ 止めろお！ あああっ、今射精されたらっ、私は、私はあああっ！」

昨日子宮を無慈悲に蹂躪した射精の衝撃を思い出し、薄氷の理性では絶頂させられるのは免れないと確信してしまう。そしてそれを逃れる術がないことも。

「そらいケ！ たっぷり出してやるから、誇り高いエルフ様のケツ穴でアクメを決めてみせろ！」

アムラスは嘲り、最後の一突きとしてペニスを直腸へ深々と捻じこんだ。

「んほおおおおっ!! おぐっ、んんう……あああっ、イクツ！ イクイグう、またイクのを止められないいいいんっ!!」

アナルセックスの快楽に呑みこまれ、腸内を白濁に染められながら、ララノアは咆哮にも似た嬌声を轟かせて悦楽の頂へと上り詰めた。

何もできない悔しさから大粒の涙が溢れてくるが、強烈なエクスタシーには抗えない。エルフの気位の高さを示すはずが、不浄の穴は意思とは関係なくクイクイと収縮を繰り返し、

ペニスに射精を促す始末。

「いい締めつけだ……もうすっかりケツマ×コになってるな」

アムラスはその貪欲さに感心すると、大量の精液を解き放っていった。

「あひい……い、イツてにやい……んお、お、わ、わたひは……わたひはああ……」

射精が終わり、絶頂のピークから抜けたララノアは、もはや振り返る力もない。辛うじて意識を繋ぎ止めているものの、ただうわ言のように呻くのが精いっぱいだった。

そんな潰れたカエルのようにピクピクと痙攣を繰り返すララノアを見下ろしながら、シヤウアが満足そうに告げる。

「うふふつ、あなたのエルフの誇り……んふつ、誇りはしつかりと見せてもらったわ。約束通り闘技場の一勝分をプレゼントしてあげる。本当は今後の試合のことを少し話したかったのだけど……無理そうね」

「たいしたイキ様だったからな。チ×ポ狂いの家畜といい勝負じゃないか？」

（私は、どうなってしまったのだ……）

どれだけ否定したところで、不浄の穴を犯され蕩けるようなオーガズムを知ってしまった。

ララノアには、アルフィリアを救い、王家を再興させるという使命がある。しかし再び敗

北するようなことがあれば、衆目環視の中で犯されることになる。

想像するだけで身の毛がよだつほど汚らわしいと思いつつも、押し寄せてくる官能の世界が脳裏を過り、子宮を疼かせてしまうのだった。

第三章 堕ちた同胞たちと見世物キヤットファイト

沸き起こる歓声と地鳴りが響いていた。

大金を賭けて一攫千金を夢見る者。強気な女闘士が無様に敗北した挙句凌辱される様を楽しみにしている者。人間たちの欲望が具現化した場所が闘技場である。今この瞬間に歓声をあげたのは前者で、地団太を踏んで闘技場を揺らしているのが後者だった。

「ふう、私の勝ちだ……」

仰向けに倒れた男の剣闘士の首へ、ララノアが剣の切っ先を向けていた。

「ぐっ……」

対戦相手を見下ろして反撃の気配がないことを確認しつつ、ララノアは息を整える。

アムラスに一矢報いることすらできずに敗北した経験から、人間を侮るのを止めた。これが自分の実力だと誇示するように、貴賓室から観覧しているシャウアとウルスラに視線を向ける。

するとウルスラから、ララノアの勝利が告げられた。

「おっしやあああつ！ 大穴かましてくれやがった！」

「嘘だろ!? 一昨日はボロ負けだったじゃねえか！」

「あの野郎なにしてんだ！ 竿役のてめえが、ボコられてどうすんだ！」

相手はチャンピオンだったとはいえなす術なく敗北し、処女まで奪われた話とはつくに知られているため、対戦相手が代わってもララノアのオツズは数倍となっていた。

それは一部を除いて、大半の人間はララノアに勝利を期待していなければ、信じてもないということ。求めているのは、裸に剥かれて無様に泣き叫びながら犯される姿である。

ところが、それはアムラスに通用しなかったただけであって、騎士として解放軍として己を高めてきたララノアの実力は、並みの戦士の比ではない。その証拠に、軽装を生かした俊敏な動きで相手を翻弄し、実力で勝利をもぎ取ったのだ。

「耳障りなっ……」

周囲の罵声に顔を顰めるララノア。金銭欲や性欲などの欲望渦巻く闘技場に立つと、人間の欲深さを嫌というほど思い知らされた。

自身が穢されたことで奴隷に墮とされた同胞がどのような扱いを受けてきたのか、そして一刻も早くこのような都市から王族を逃がさなければならぬと、強く決意する。

「これで昨日の辱めの分と合わせて二勝目……やはり特別なのはあの男だけか」

今回闘った相手も決して弱くはなかったが、アムラスと比べれば雲泥の差があった。他の試合も覗いてみたが、彼ほどの脅威を感じる者は現時点では確認できなかった。無残な敗北を喫したララノアは人間の強さを知って己の強さに疑問を抱いていたが、決して自分が弱いわけではないと実感することができた。

「アルフィリア様、今しばらくお待ちください……私が必ずお助けいたします」
目的は勝利を重ねて王家を救出すること。それ以外のことは考えていない。
ララノアは踵かかとを返し、勝利に酔うこともなく闘技場を後にした。

——二日後。

大した疲弊もなかったララノアは、ウルスラに頼んで早々に試合を組んでもらった。観衆の下卑た視線や罵声には辟易するが、アルフィリアを救うためには仕方がないと自分に言い聞かせつつ、目の前に立つ今回の対戦相手を睨みつける。

「ツイてるぜ。お前アムラスにボコられてた奴だろ？ 見てたぜ。いい体してるから俺も使ってみたかったんだ」

ララノアの瞳に宿った黒い感情に気づく様子もなく、男は胸や腰へ舐めるような視線を向

け、自分の勝利を疑っていないかった。

「下衆が……」

「アムラスに突かれてヒイヒイ言っただくせによく言うぜ……生意気な奴隷はしつかり躡けてやらないとなあ」

シヤウアとの賭けは公おおやけになっっていないため、男はララノアを奴隷と思いこんでいた。

そんな根拠もなく自信に満ちて傲慢な態度に苛立ちを募らせるが、目の前の男は一切気にした素振りもなく薄ら笑いを浮かべていた。

「なら私は、貴様がもう二度と減らず口を叩けないようにしてやろう」

「チツ……奴隷の分際で」

軽薄なうえに堪え性もないらしく、ララノアの言葉に男の目つきが変わった。

見下していることに変わりはないが、怒りと殺気が混じったものへと変貌した。

互いに睨み合う中、ようやく試合開始の合図が響いた。

「ルアア！」

最初に動いたのは男のほうだった。

剣を構えると一直線にララノアへと走る。驚異的な速さではないが、ただの口だけではな

くそれなりの速度ではあった。

一気に距離を詰めると、ララノアが反応できていないかと思ひこんだのか、ニヤリとした笑みと共に上段から振り下ろしてきた。

無論、自分を犯すと公言する男に一瞬たりとも華を持たせるつもりはない。

硬い金属音を響かせて、男の剣をララノアが抜いた剣によつて片手で受け止める。

ぶつかった衝撃を確かめつつ、翠色の瞳でジツと男を見据えた。

男はあっさり受けられたことに顔を顰めるが、ララノアがそのようなあからさまな隙を見逃すはずもなく、その醜悪な顔面に拳を叩きこんだ。

「おべらっ!!」

しかし腐つても剣闘士。

闘いに身を置く者としての勘か、反射的に退つて衝撃を幾分か逃がしていた。

体勢を崩してそのまま地面を転がると、距離を取つてすぐさま立ち上がり、そして熱を感じた鼻先へと無意識に手を伸ばした。

「——っ!？」

ヌルリとした感触に、弾かれたように手を離して確かめれば、手の平は真っ赤に染まっていた。

鼻頭を中心とした激痛と相まって、男は自分の状態を理解する。

「よ、よくも俺に血を流させたなあ！ 奴隷の分際でっ！」

憎悪を宿した瞳でララノアを睨みつけ、ヒステリックに声を張り上げる。

（自意識過剰なところは同じでも、あの男とはまるで違うな……）

アムラスも大概な自信家ではあるが、あれは闘技場のチャンピオンとして君臨するだけの實力に裏打ちされたものである。彼と比べれば、目の前の男の言葉はひどく薄っぺらに聞こえた。

痛みに耐えながら構えなおすが、ララノアは追撃をかけることもなくただ佇んでいる。まるで気にかかる必要もないとばかりな態度に、男はギリツと忌々しそうに歯を食いしぼる。

観衆からは『なんでぶっ倒さなかったんだよお！』と、ララノアの勝利に賭けていた者から野次も飛んできたが、それ以上に『ちんたらしてんじやねえ！』『とつとと剥いて犯せえ！』などと、男に対する罵声のほうが多かった。

無駄にプライドが高いだけに、屈辱に腸はらわたが煮えくり返っているのが、顔を合わせて間もないララノアにも手に取るように伝わってくる。

「くっ……ぬあああっ！」

同じ轍を踏まない策があるのか、男は叫ぶと同時に再び正面から飛びこんできた。

「はっ！」

ララノアに向かって振り下ろされた斬撃は感情的になっているだけに力任せの直線的な軌道を描いており、性別の差異から筋力こそ相手が上だが、真正面から受け止めようとせず横から弾くようにすれば、軌道を逸らすのも受け流すのも容易だ。

「クソがああああっ!!」

男はようやくララノアの実力を理解したものの、見下していた相手が自分よりも強いなどと認められず、半ば自棄を起こして何度も連続して剣を振るう。しかしそのたびに弾かれ、受け流されて一撃とて届くことはない。

男の顔に焦りの色が濃くなった頃、ララノアは剣戟けんげきの合間を縫って前に出た。

「……これが貴様が見下していたエルフの力だっ！」

足を踏みこむと、男が剣を振りかぶった瞬間に合わせて手に持った剣を肩の高さで水平に引き、相手よりも早く突き出した。

弱者を痛ぶることで悦に入る下衆にかける慈悲はないと、殺気を纏った一突き。しかし生存本能による直感なのか、男はすんでのところで身を躲した。

男の瞳にわずかながら安堵の色が浮かび、崩れた体勢を踏ん張って堪えると、そのまま振りかぶっていた剣をララノアに叩きこもうとする。

「——っ!？」

しかしララノアは剣を突き出した腕を引くことなく、振り返る腰の捻りを加えて袈裟気味に剣閃を走らせた。

「初撃を躲された場合も考えているに決まっているだろうが！」

ララノアは相手の浅慮に呆れつつ、男の左肩から腹部にかけて一閃し、真っ赤な鮮血が舞い上がった。

「うがあっ!？」

時間にして刹那の一秒。まだ男が剣を振り下ろす前に、ララノアの剣が彼を捉えた。

男は咄嗟に後退し、右手で傷口を庇いながら焼けるような痛みに唇を噛みしめている。対してララノアは、剣先に付着した血を振り払い、男を観察していた。

小刻みに痙攣しているが、まだ自らの力で立っている。

「……浅かったか」

「ぐぎぎい……：奴隷ごときがあああっ！」

「ずっとそればかりだな。貴様の言う奴隷ごときの私は、まだ一撃も貰っていないぞ」

「があああつ！ お前みたいな牝豚は、ただ腰だけ振ってりやいいんだよおつ！」
怒りが痛みを凌駕したのか、男が再び動きだした。

予想以上のしぶとさには感心するが、だからといって傷が回復するわけではない。むしろ血を流し続けているため、動きはさらに緩慢なものになっていた。

奴隷であるエルフに人間が負けていいはずがないと、くだらないプライドを掲げて襲いかかってくる。

「口を開けば奴隷奴隷と……」

こんな人間に同胞のエルフがどれだけ辱められてきたのかと、考えるだけで吐き気がする。もうこれ以上汚らわしい声を聞きたくなかった。

ララノアはわざと懐まで誘いこむと、真正面から襲ってくる剣を勢いよく弾き返した。これまで蓄積していたダメージは深刻らしく、剣戟に重さはなく、さらには反動を抑えきれずに体勢を崩した。

ララノアは剣の柄を握る手に力をこめると、切っ先を下方へ突きつけて無機質な声で告げた。

「そんな汚らわしいものをぶら下げているから、貴様ら人間は……っ！」
今度はララノアが吠えた。

生きるために仕方なく奴隷娼婦に身を費やすしかない同胞たちを、この男は何度も嘲笑つた。

もはや殺すのは容易いが、ただの死では生温い。

ララノアは冷徹な視線を向け、容赦なくその刃を放った。

「ぎいやああああああああああつ!!」

喉が裂けんばかりの絶叫。そして観客の男たちも全員が身を竦ませて震えあがった。

剣を引き抜くと、男の腰巻が瞬く間に真っ赤に染まった。

ララノアが狙ったのは股間。数多の同胞を弄んだ者には相応の報いが必要だと、生物として命を絶つのではなく、牡として殺すことにした。

若く血気盛んな男にとって、これ以上の屈辱はないだろう。

やがて男は血溜まりに沈み、激痛のあまり気絶していた。それを静かに見下ろして動かなくなつたと確信した頃、ララノアの勝利が告げられて決着の銅鑼ドラが鳴り響いた。

賭けに勝った者、凄惨な光景に興奮している者は歓声をあげるが、男としての死に同情を向ける者も少なくなかった。

このような男にまで同情を向けられていることにララノアは目を細めると、剣を収めて踵を返した。

そして貴賓室を見上げ、自分が凌辱されることを期待していたであろうシャウアと視線を合わせると、一転して勝ち誇った笑みを浮かべてみせた。

この二戦で対決した剣闘士は決して弱くはなかったが、ララノアの敵ではなかった。

脅威になりえるのはアムラスだけだと確信し、一度は失いかけた自信を取り戻すことができた。その点に関してだけは感謝してやってもいい——と。

ところがシャウアは不敵なララノアに眉を顰めるどころか、満面の笑みさえ浮かべていた。

その笑みが何を意味していたのか、ララノアは己の浅慮をまだ理解することができていなかった。

「なっ、ななななんだこれはっ!？」

狭い室内にララノアの絶叫が響き渡る。

「何って、今日の試合での衣装だけど？」

ララノアの反応に不思議そうな顔をしつつ、あっけらかんと答えるシャウア。

隣に立っているウルスラに顔を向けるが、彼女は困った顔をして首を横に振った。

それはつまり拒否権はないということだった。

ララノアも、自分の立場は理解しているが、状況に理解が追いついていなかった。

「……なぜ、こんなものに替える必要が？」

前回、前々回と特に怪我を負うことなく勝利を収めたララノアは、数日後に再び闘技場に立つことになった。

王家を救うために短いスパンで試合をこなせるのは僥倖なのだが、闘技場へ向かおうと考えていたところへ、ウルスラを連れ戻したシャウアが現れた。

呼び出されて館に向かったことはあったが、わざわざ彼女から訪ねてきた時点で嫌な予感しかなかった。

そして案の定、それが的中した。

「今回はちよつと特殊な催しなのよ。だから奴隷にはそれなりの格好をする必要があるの」

「……特殊？」

不穏な発言に、ララノアは眉を顰めた。

するとシャウアに代わってウルスラが説明を請け負う。

「特別難しいことはありません。形式はバトルロイヤル。ただし参加者は女の奴隷エルフに限られます。ルールは……鬼に捕まらないようにすること」

「……意味がわからない」

子供の遊戯のようなルールに、首を傾げるララノア。

「この場合の鬼は、人間の男性となります。ただし鬼は基本その場から動けません。殴る蹴るは自由ですが、武器の使用は禁止。参加者たちは他の参加者を突き飛ばすなどして鬼に捕まえさせることで人数を減らしていきます。そして捕まった者はその場で犯されて失格となり、最後に残っていた一人が勝者となります」

「な、なんだその馬鹿げたルールは!？」

予想もしていなかった内容に、ララノアは目を剥いて声を荒げた。

「あら、ひどいことを言うわね。結構人気の催しなのよ？」

心外だと、わざとらしく拗ねたように呟くシャウア。

「つくづく腐っているな！」

奴隷の扱いなど嫌というほど目の当たりにしてきたが、ララノアの知る人間の肉欲に対する渴望は、ほんの序の口でしかない、目を追うごとに思い知らされる。

「それは誤解よ。少なくとも奴隷側にもメリットはあるわ」

「どこにそんなものが……っ！」

「最初に説明したでしょう？ 一定数勝ち星を挙げられれば、望むものが手に入るのが闘技場よ。でも、どんな願いを内に秘めていたとしても、全員が闘う力を持っているわけではな

いわ……だから闘えない奴隷にも希望を持てる催しが考えられたの」

奴隷身分からの脱却は誰もが願うことであり、多少のリスクを負ってでも挑戦する価値はある。ララノアにも理解はできるが、そこに至るには多くの同胞を蹴落とさなければならぬ。

「だ、だからといって——」

「闘いで魅せられないのなら、女として魅せるしかないでしょう？」

「——っ！」

ララノアは言葉に窮した。奴隷が無条件で施しを受けられるはずがない。求めるのであれば、自らの力で勝ち取るしかないのだ。

「だけどあなたにとっては都合がいいんじゃないかしら？」

「……どういう意味だ？」

「だってこれに出るのは戦闘技能が劣る奴隷がほとんどだもの。解放軍に所属してこの都市に単身潜入を任されたあなたの敵じゃないでしょう？ よかったわね、これでまたアルフィア様の救出に一步近づいたわよ」

「そ、それは……っ！」

シャウアの言う通り、参加者がろくに戦闘訓練を受けていないのであれば、まず敗北はな

いだろう。しかしそれは同族を自らの手で蹴落さなければならぬ。王家を再興させることはエルフの悲願。多少の犠牲は仕方がないと理解していても、抵抗を禁じ得ない。そして同時に、自分が有利だと言われた瞬間、ほんの一瞬とはいえ幸運だと考えてしまった自分に愕然とした。

「……というわけで、さっさと着替えてきなさい。じやないとせっかく拾える一勝が失格扱いになってしまおうよ？」

「くっ……わ、わかった。着替える……っ」

先の二戦を経て、アムラス以外に恐れる人間はいないなどと楽観視していた自分に腹が立った。

シャウアは己の目的のためであれば、たとえ同族であろうと陥れることを厭わない。ララノアには彼女に従う以外の選択肢など存在しないが、もっと危機感を持つべきだった。そうすれば、少なくとも試合の直前になってこれほど動揺することはなかっただろう。

「安心なさい。会場では皆同じ格好だから」

「何を安心しろと……!!? こ、こんな卑猥極まりないものを、私がつ……くう」

渡された衣装に驚きと恥辱で震えながらも、ララノアは逆らえない。渋々ではあるが、着替えるしかなかった。

「う、うう……屈辱だ」

着替えて闘技場へ移動して観衆の前に立ったララノアは、すべては王家のためだと頭の中で何度も自分に言い聞かせながら、齒を食いしばって恥辱を堪えていた。

シャウアから渡された装いは実に卑猥極まりないので、平常心を心掛けたいララノアの内心を掻き乱していた。

布面積が極端に少ない衣装は、いわゆるマイクロビキニだった。

乳首と股間を辛うじて覆う広さがあるだけで、ほとんど紐と言っても過言ではない。しかも手入れの行き届いていなかった股間は、布では覆いきれずに茂った陰毛がはみ出している。そんな卑猥な格好を強制され、羞恥に身を振りながら立っていた。

さらには周囲から向けられる無数の視線の影響か、妙に体が熱い。

薄らと額に汗を浮かべながら、他の同胞の様子を窺う。長命なエルフは外見では年齢の判別は難しいが、せいぜい百五十歳くらいの小柄な者もいた。ララノアの他に十五人も参加しているが、恥じらって震えている者など見当たらなかった。

普段から奴隷として路地で客を取っている者にとって、今さら際どい露出を強要されたくらいで取り乱したりはしないのだが、何も知らないララノアには目的のためならどのような

恥辱にも耐えられるという強い意志の表れのように感じられた。

(それほど、それほどの覚悟が……っ！)

戦闘においては、平静を保てない者から脱落していくものである。

心構えができていなかったのは自分のほうだったと痛感する。しかし平静を装ってみても、慣れない格好にどうしても周囲の視線が気になってしまう。

『あのギリギリ見えるか見えないかの状態が、ある意味全裸よりもエロいよな！』

さらには観客の誰かが口にした言葉で、嫌でも意識してしまう。

「うう……そのつもりで着せいのだろうな」

下品な視線を受けながら、どうすることもできない自分に歯噛みする。豊満な乳房も、丸く大きな臀部もほとんど丸見えで、肉土手ははみ出ている陰毛と共にくびり出されてほとんど露わになっていた。

貴賓室でシャウアがほくそ笑んでいるのが容易に想像できてしまう。

悔しいが、今のララノアにとって彼女は遠い存在である。

一泡吹かせるためには、今回も勝ち星を拾ってアルフィリア救出へ着実な一歩を繋げるしかない。すでに彼女は己の勝ちが揺るぎないと確信しているようだが、どれだけ不利な状況でもララノアは諦めるつもりはない。

しかし現実にはララノアの心境など慮ってはくれない。

間もなく、ウルスラの言っていた鬼役の男たちが姿を現した。

彼らはララノアたちから一定の距離を取ってぐるりと取り囲み、全身を舐めるような視線を向けてくる。しかもまだ始まったもないというのに、誰もがすでに勃起しており、股間の布地を突き破らんばかりに盛り上がっていた。

叶うなら、今すぐにも全員を八つ裂きにしてやりたくなる。ララノアが勝利するためには、同胞を力づくで男たちの生贄にしなければならぬのだ。

さらに今回に限って、控室で事前に避妊薬を飲まされたりもしたが、そんなものはなんの免罪符にもならない。

(下衆どもめ……っ)

男たちは、この闘技場で多くの金を賭けた観客の中から選ばれており、必然的に人間の若者は少ない。肥えた中年貴族が多く見られ、果ては白髪の老人までいた。すでに興奮しているのか鼻息を荒く、見苦しい贅肉を恥じらいもなく晒しながら獲物が運ばれてくるのを下卑た笑みを浮かべて心待ちにしていた。

奴隷エルフたちの視線は冷ややかになる一方で、彼らのボルテージは最高潮に達している。そしてそれを待ち構えていたかのように、ウルスラの声が響く。

『お待たせいたしました。この度は日頃から闘技場を愛してくださる皆さまへの恩返しとして、ささやかな余興をご用意しました。捕らえた奴隷には事前に媚薬を服用させていますので、大きな傷を負わせなければどのように扱うかは自由です』

「なっ……!?!」

予想もしていなかった爆弾発言に絶句する。そしてすぐに彼女の言う媚薬が、先ほど飲まされた避妊薬のことを指していると気づいた。

「奴隷のみなさんも安心してください。こちらに解毒薬がございます。ただし一本だけなので……勝ち残った方にお渡ししましょう」

ララノアが先ほどから感じていた体の火照りは、羞恥からくるものではなかった。

まだ症状は軽いものだが、意識すると徐々に熱が上がっているように感じられる。

どれほど強力な薬かは定かではないが、悠長に時間をかけていられる状況ではなくなり、他のエルフたちの顔にも焦りの色が窺えた。

(どこまでも我々をバカにして……っ)

シャウアは、たった一つの解毒薬を求めて醜く争う同族を嘲笑うつもりなのだ。

射貫かんばかりに貴賓室を睨みつけるが、そんなララノアを無視するように、開始の合図が鳴らされた。

すると次の瞬間、ララノアにとって予想外の事態が起こった。

一刻も早く解毒薬を手に入れようと一斉に動き始めたかと思えば、参加者は示し合わせたようにララノアへと殺到した。

驚いて反応が遅れたものの、真っ先に飛びかかってきた者を半身を引いて躲し、軽く飛び退いて距離を取る。そしてすぐ後ろから掴みかかろうとする者の足を払って転ばせる。それでも痛みをしかめたのは一瞬で、鬼気迫る表情ですぐに起き上がると他のエルフと連携してララノアを取り囲む。

「な、なぜ私ばかり……狙うっ!？」

「決まってるだろ！ あたしらが弱いからだよ！」

「あんたみたいなのがいたら、ウチらに勝ち目ないじゃん！ だったら、徒党を組むしかないっしょ！」

彼女たちは、ララノアが剣闘士として闘っていることを知っており、自身が弱いとわかっているからこそ事前に示し合わせていたのだ。

叫びながら突進してくる相手をすんでのところ躲し、すれ違いざまに体を捻って背中を蹴り飛ばして背後に回っていた別のエルフにぶつける。

「くっ……!！」

シャウアの言っていた通り、戦闘技能は低い。技術も何もなく、ただがむしやらに突っこんでくるだけ。ララノアにとって障害になりえる強者はいない——コンデイションがいつも通りであればだが。

媚薬の影響か体が熱く、力が入りづらくなっていた。

それは相手も同じだが、それを人数で補ってくる。

武器も使えないため、たとえ素人が相手だとしても決定打に欠ける。もつとも、今回のルールは相手を倒すことを主眼としたものではないため、無理に昏倒させる必要はない。

「すまん……」

ララノアは躲しながら周りを囲っている男との距離を測っていると、功を焦った一人がお誂え向きに突貫してきた。

不用心に伸ばされた腕を掴むと、自らの目的のために犠牲にしてしまう同胞への謝罪を口にしながら、腰を捻って一本背負いで獲物がかかるのを待ち構えていた中年貴族へと投げつけた。

「ひっ……!？」

彼女が自分の末路を悟って短い悲鳴をあげたが、もはや後の祭りだった。

「うおっ！ な、なかなか豪快だな。ふむ……もう少し肉付きが豊かなほうが好みなんだ

が、これはこれで悪くない。一足先に楽しませてもらおうかの」

煩惱のなせる業か、ひ弱そうな中年貴族でありながら飛んできたエルフの体を難なく受け止め、間髪を容れずにエルフの柔肌へ手を這わせる。さらには辛抱堪らないとばかりにすかさずいきり立ったペニスを取り出し、彼女の股間へ狙いを定めた。

「やつ、やめ——んほおおおおっ!? おっ、おごっ! なに、ごれえええっ! チ×ポ、すごしゆぎいいっ!!」

挿入された途端に絶叫し、抽送が始まると気がふれたように嬌声を撒き散らす。それが媚薬の影響なのは一目瞭然だが、その豹変ぶりに唾然とする一同の背筋に冷たいものが走った。

助かるためには、最後まで生き残るしかない、気を持ち直した者から再びララノアへ押し寄せた。

獣じみた嬌声が嫌でも耳に残るが、引き下がれないのはララノアも同じだった。

隙を突いては先と同じように鬼へ投げ飛ばそうとするものの、二の舞にならないように、ほとんどの場合二人以上で同時に襲いかかってくるため、思うように人数を減らせなくなった。

「はあ、はあ、はあ……」

ララノアの呼吸が乱れ始めるも、まだ十人以上残っていた。

さらに犯されているエルフの嬌声が異様なほど下腹部に響いてくる。

「息切れしてきたわ！ あと少しよ！」

「まだまだ……！ 私は、こんなところで負けるわけにはいかんのだっ！」

彼女たちが総合撃を仕掛けようとしたのと同時に、ララノアも吠えて走り出した。

左右から飛びかかってきた二人をジャンプで躲し、正面の一人の腹部に蹴りをめりこませた。

さらに蹲うずくまったところへ追撃を仕掛けたかったが、邪魔が入ったためにバク転しながら躲して距離を開けようとした。

「そっちに行つたわよ！」

しかし相手は数の利を生かして回りこんでおり、ララノアが着地すると同時に二人がかりで組みつかれた。

「このっ……くらいでえ！」

「ぎゃんっ！」

大上段で組んだ両手を背中に叩きつけて一人を潰したものの、もう一人を潰す前に新手に

よって再び組みつかれる。対処が追いつかず、三人がかり、四人がかりになると踏ん張りも利かなくなってきた。

堪えようにも多勢に無勢。火照りを増す肉体は、思うように力が入らない。徐々に地面を挟りながら押しこまれていく。

「ぐっ、うう……っ！ 私は……私はアルフィリア様をお救いするまで、負けるわけにはあ
あっ！」

喉を震わせて己を鼓舞するが、どれだけ力をこめても振りほどけない。

「バカ言ってるんじゃないよ！」

「な、なに……？」

「今さらあんなチ×ポ狂いがなんの役に立つんだい!？」

これまでの必死さとは違った、敵意を剥き出しにした同胞の視線に、ララノアは思わずたじろいだ。

「まさかアレが元に戻るとでも？」

ララノアに向けられる視線は、明らかに失望の色を含んでいた。

「もし助けられたとしても、どうせまたチ×ポ欲しさに国を売られるのがオチさ」

「ふざけるな！」と叫びたいララノアだったが、理解してしまった。

彼女たちは人間に抗うことを諦めており、王家に救いも期待もしていないのだと。

『千年以上生きるエルフは誰もがいつも時間が解決してくれると思いきや、奴隷になつてもまだ、耐えていれば人間は寿命で死んでいき、いつか国も滅びて奴隷から解放される日が来るって……』

シャウアの言葉が脳裏を過る。

百七十年間都市内で奴隷に堕ちた者と、都市外で国の再興を誓った者との価値観は、両者共に理解できないほど乖離かいりしていた。

その証拠に、彼女たちは得体の知れない者を見ているかのような瞳をララノアに向けていた。

「わ、私は——っ！」

シャウアの言葉を否定したいのに、かけるべき言葉が見つからなかった。

その動揺は肉体にも影響を与え、もはや彼女たちを抑えこむどころではなく、完全に力負けをしてズルズルと後退させられていく。

そしておぞましい気配を背後で感じて己の状況に気づいた時には、両肩がブヨブヨとした太い指で掴まれていた。

「デュフフツ……いらっしやうい」

「あつ……」

すべてを理解した時には、もはや手遅れだった。

鬼である男に捕まった者はその場で失格となり、犯される。

しがみついていたエルフたちが脱兎のごとく離れていき、咄嗟にララノアも続こうとしたが、肩を掴む手を振り払えなかった。

「寄つて集^{たか}つて襲われてたけど、嫌われてるのかな？ 駄目じゃないか、奴隷同士仲良くしないとお」

馬鹿にするように耳元で囁かれてララノアは眉間に皺を寄せるが、同時に男の生温かい息遣いに悪寒が走った。

欲情してギラギラと眼を見開いてニヤついた笑みを浮かべている男は、たつぷりと贅肉を蓄えており、運動とは無縁な肉体はただ立っただけで大量の汗を滴らせていた。それがぬめっているようにすら見え、まさにカエルのようだった。

口調もアムラスやこれまでの対戦相手のように高圧的な態度こそ取っていないものの、ねっとりとした不快感が纏わりついてくる。

「ば、馬鹿にするな……ああつ!? 触る、なあ……んんっ！」

ララノアの体にビリツと電流のような痺れが走った。

媚薬の回った肉体は、本人の意思とは裏腹に敏感に反応してしまう。

(気持ち悪い……気持ち悪いはずなのに……つ)

嫌悪感さえ抱く醜悪な男による愛撫。逃げ出したいと心の中で叫んでいるというのに、媚薬の影響で力が上手く入らず、肥え太った中年貴族の手を払いのけることすらできない。それどころか、興奮のあまり滲み出ている肉欲の気配が這い回る手の平から伝わって、ララノアの体は戦慄していた。

「どうしたのかなあ？ 呼吸を速くして……もう感じてるのかい？」

「か、感じてなどいないっ！」

反射的に言い返したが、その声には戸惑いが多量に含まれていた。

「ぐふっ、その強気な感じがいいねえ。でもそれがいつまで続くかな？ これから僕みたいなデブに犯されるんだよ？ ねえ、どんな気分？」

「さ、最悪に決まって——ひやうんっ!？」

言い返そうとするも、ララノアの言葉はあっさりと遮られた。

背後から豊かな双乳を握られただけのだが、鋭い衝撃が脳天まで響いてきた。

(たったこれだけで……!! い、今のは驚いたただけだ! そうに決まっている!)

一瞬脳裏を過つた感覚を必死に否定する。しかし肉体に伝わる刺激に、ララノアの体は竦んでいた。

「ついさつきまであんなに勇ましかつたのに、意外と可愛い声が出るんだねえ」

「ば、バカを言うな！ 少し驚いただけ——えんっ！ んんんっ！」

声を荒げるが、再び中断させられた。

男のじつとりとした汗に濡れた手の平が、無遠慮に乳房を揉み始めていた。

ララノアは眉間に皺を寄せ、唇を噛んでこぼれそうになった喘ぎ声を押し殺す。

（感じてない……！ たとえ媚薬を盛られていても、このような気色の悪い男に触れられて悦ぶなどお……っ！）

数百年異性と縁のなかったララノアだが、最近になって凌辱という最悪の形で快樂を刻みつけられた。

そして記憶が新しいからこそ、理解してしまう。肉体に生じている感覚が快樂であるということを。

媚薬という卑劣な罠に嵌められたからといって、それを免罪符にできるほどララノアのプライドは安くない。しかし、堪えようとして唇を閉じ続けるのは難しく、艶めかしい吐息が漏れてしまう。

手の平からはみ出した乳肉が歪に形を変えるだけで、甘美な疼きが背筋を駆ける。

興奮しながらも力任せというわけではなく、外見通りにいやらしくねちっこい、ゆったりとした愛撫に、ララノアは戸惑っていた。

「くっ、んんう……こんなものっ、こんなものお……おおっ、んくうう」

いやらしい手つきで乳房が揉みしだかれていく。人間に弄ばれて悔しいはずなのに、甘美な刺激を受けるたびにララノアの体はヒクヒクと震えてしまう。膝が震え、気を抜くと崩れ落ちそうだった。

（こ、これは媚薬のせいだ！ 私の意志では、ない！ でも私は、こんな男に感じさせられたくない！）

先に捕まり、挿入された途端に豹変した奴隷エルフの姿が脳裏を過る。

「もう少し抵抗するかと思っただけど、案外大人しいねえ。僕の愛撫、そんなに上手だったかな？」

白々しいが、耳に息を吹きかけて項をくすぐ擦られると、反射的に体が震えてしまう。

「勘違い、するな！ はあ、あっ……これは媚薬が効いているだけで、貴様が私の体を感じさせているわけじゃ、ないっ！」

ララノアは着実に押し寄せてくる快感に震えながら言い返した。

「そうかもしれないね。だけどそれって、媚薬で気持ちよくなってるって認めてるよねえ」

「ふくっ……うう、そ、そんなこと……な、いいんっ！」

どれだけ意思を強く持とうとしても、快感をすべて抑えることは難しいと理解してしま
う。アムラスに弄ばれたことで、そういう体にされてしまったのだ。

しかし、だからといって奴隷に堕ちるつもりはない。アルフィリアを救うためなら、この
身がどれだけ汚されてもかまわない。それでも心まで堕ちるつもりはないと、決意を固める
ララノア。

しかし、この男はそれを嘲笑い、容赦のない官能を送りこんでくる。

「くひいいいっ!!」

一際強い刺激に、思わず声が裏返ってしまった。

快楽に流されないよう、乳肉に沈む指の感触にばかり意識を向けていたのが仇となり、こ
れまで触れられていなかった乳首を人差し指と親指で摘まれて、キュツと捻りながら引っ張
られたのだ。

「素直に言えばいいのに。乳首を引っ張られるのが気持ちいいって」

「ひぐっ……うう、だ、誰がっ！」

どこまでもふざけた口調に苛立ちを露わにするが、乳首への力をこめられると、ララノアの肉体は突っ張って、ビクビクツツと否応なしに震えてしまう。

剣を振るには邪魔としか考えていなかった乳房をグニグニと揉みしだかれると、体の火照りがさらに増していく。

(くう……い、痛いくらい乱暴にされてるのにつ)

苦痛と快感の狭間で揺れて、嫌悪感を露わにして吊り上げていた目尻が下がりそうになっていた。

乳房を玩具のように変形させられ、屈辱に塗れながらもこみ上げてくる感覚を無視できない。

「そう言えば、君の名前はなんて言うのかな？　ボクはメルヒーだよ」

脂ぎった外見に加えて、妙に子供っぽい口調が不気味さを際立たせていた。

「き、貴様に名乗る名などない！」

「あらら……まあ本当は知ってるんだけどね。ララノアちゃんでしょ？　実は可愛い子は事前にチェックしてたんだよ。まあルール上ボクに選ぶ権利はないから、半ば諦めてただけどねえ……ボクたち、何かしらの縁があるのかもね？」

「そんなわけがあつてたまるかつ！」

あまりにおぞましい囁きに鳥肌が立ち、咄嗟に声を荒げていた。

「そこまで嫌がらなくても……でも反抗的な奴隷って珍しいから、ちよつと新鮮」

無駄にプライドの高い人間の貴族であれば生意気な奴隷の態度に憤りそうなものだが、メルヒーは気にした様子もなく、むしろ楽しんでいるように見えた。

（なんなんだコイツは……くう、こんな得体の知れない人間で感じたくないっ……感じるなんて嫌だっ……！ 嫌なのに、気持ちいいと思つてしまう……くそお！）

ララノアはこんな男の前で無様な姿を晒したくないと、懸命に官能を抑えようとする。しかし慣れた手つきで乳房を揉まれるたびに、抗い難い快感が押し寄せてくる。

そして抑えようとすればするほど、メルヒーは嬉しそうに指へ力をこめていく。

どれだけ媚薬が強力でも、好いてもいない男に弄られて感じてしまう自分が恨めしくて仕方がない。

「デユフフツ、やっぱりおっぱいは大きくないとねえ。揉み応えがあるし、ララノアちゃんは感度もバツチリだし」

「ふ、ふぎけるなあ……あくつ、んんう……！ 私の胸は貴様の玩具ではないっ……はあ、はあ、んくうう！」

「玩具だよ。少なくとも今はボクのおね……奴隷だもの。そもそも僕に捕まった時点でララノ

アちゃんには何も言う資格もないんだから」

睨み返しても、官能に潤んだ瞳では迫力など皆無。それどころか、無造作に乳肉を捏ねくり回されると無様な声を抑えられない。

(悔しい……こんな男に弄ばれて、淫らな声をあげさせられて……！)

アムラスのようにララノアを上回る圧倒的な戦闘力を有しているわけでもなく、ただ貴族という肥え太っているだけの男に、手も足も出せない。

「少しは観念したかな、ララノアちゃん？」

メルヒーは勃起した乳首を人差し指と親指で挟み、コリコリと捻りながら呟いた。

「わ、私はっ……あ、あっ、お前なんかには、屈するものっ……かあ！」

敏感な乳首を刺激され、ララノアは目も当てられないほど叫びを所々詰まらせてしまう。

「媚薬のせいなんだし、無理をする必要なんかないと思うけど？　乳首だってカチカチのビンビンだよ？」

「そ、そういう問題では、ないい……！」

「貴様も、くだらない妄言を——おひっ！　いんん

う……さつさと、私を犯せばいいだろうっ！」

強制的に発情させられた肉体にペニスを挿入されたらどうなるか不安は拭えないが、メルヒーを満足させればこの場を乗りきることはできる。無駄に逆らって長引かせると、頭がお

かしくなつてしまいそうだった。

「オマ×コにチ×ポを入れるだけじゃサルと変わらないよ？ 穴に突っこむだけじゃ味気ないし……寂しくない？ もしかしてエルフはそれが普通？ 単にララノアちゃんにこれまで恋人がいなくて知らなかっただけなんじゃないの？」

「ば、馬鹿に——いひいいいいっ!!」

声を荒げた矢先、ララノアの視界が真っ白に染まった。

「デユフフツ、何か言つたララノアちゃん？」

メルヒーがララノアの乳首を力任せに引っ張つた。

（今、何をされた!? ち、乳首だけでこんなつ、こんな……っ!）

摘んだ乳首で乳房全体を持ち上げられ、綺麗なお椀型の乳肉が引き伸ばされて円錐のように尖らされていた。

その際、メルヒーは放さないように潰すほど力をこめており、引っ張られた乳首は柔肉の自重と相まって長く伸びきつていた。

「ひっ、いあああああつ!! これが私のつ……違う、こんないやらしい形じゃ……!」

あずき 小豆大の突起は、二倍どころか三倍以上は伸ばされていた。

ララノアは変容した乳首に目を見開きながらも、そこから生じる快感に身震いが止まらな
い。

「よく伸びるねえ。もつと引つ張ってつて言ってるみたいだよ」

「そ、そんなわけないっ！ いぎっ、んんう……やめっ、伸びるう！ あっ、ああ、乳
首があ……んいいいいっ！」

「でも乱暴なのがいいんでしよう？」

どれだけ頭の中で否定しても、メルヒーの言う通りだった。

千切れそうなほど伸びきった乳首から、甘美な痺れが絶え間なく襲ってくる。

「んい、痛いはずなのにっ、なんでこんな、ああっ！ やめっ……いいいいっ、乳首を、弄ぶ
なあああっ！」

「頑固だねえ。無理に意地を張らなくても……まあバレバレなのに必死になってるのも面白
いけど……ほら、まだ伸びるよお」

メルヒーは快樂に抗えずに困惑するララノアを笑いながら、乳首を前後左右に引つ張って
乳肉を弾ませ続ける。

「くひいいっ！ や、やめろお、おおっ！ 乳首、伸びるう……も、戻らなくなったらどう
するんだああっ！ あぎっ、いんんっ！」

何百年と性とは無縁であっただけに、たとえ媚薬を飲まされているとしても、乳首が伸びることも、痛みさえ快感に思えてしまうことも、まるで自分の体ではないような恐怖心さえ芽生えていた。

（これが女の体というものなのかっ!? アムラスの時もそうだった……己の無力さが憎くて悔しかったはずなのに、この体は奴を拒絶できなかつた!）

「そんなに嫌がらなくても……乳首は多少長いほうが下品でエッチだと思わない?」
メルヒーはあえて煽り、引っ張っていた乳首を解放した。

強引に引き伸ばされていた反動で乳房がブルンツと波打ち、元のお椀型に戻る。

「んはああ、はあ、はあ……んっ、き、貴様あ……」

絶え間ない衝撃にまだ呼吸が戻っていないが、自分は屈しないとメルヒーを睨みつける。

（これが、私の乳首なのか……っ）

散々捏ねくり回された乳首は赤く腫れており、かつてないほど硬く勃起していた。

引っ張られていた直後だからか、わずかだが長くなっているように見え、自分の肉体は穢されるたびに、着実に淫らに作り変えられていると実感させられた。

「乳首、すっごいピンピンだねえ」

メルヒーは上向きにピンツと突き立った乳頭を眺めながら呟いた。

「ぐう……っ、き、貴様が好き勝手に弄り回したからだろう!？」

「そうだね。でも感じてたのはララノアちゃんだよ？ 痛い痛いって言いながら、喘いでいっばい感じてたねえ」

「か、感じていたのは……うう、媚薬のせいだ！ 私の意志では、ないっ！」

依然として乳首には摘まれていた感覚が残っており、ピリピリと微弱な電流のような刺激が伝わってくるが、ララノアは声を荒げることで、必死にそれから意識を逸らそうとしていた。

「まあ、そうだね。何かのせいにすれば楽になれるからねえ」

あからさまな挑発だが、何も言い返さないままでは自分がそれを認めているようで、黙っていられなかった。

「わ、私はエルフた……エルフであることに誇りを持っている……その誇りがある限り、人間に屈したりしない！」

「ふーん、エルフの誇りねえ……あれがそうなの？」

「……え？」

首を傾げたメルヒーが指差した先では、先ほどまで団結してララノアを追い詰めていたエルフたちが目を血走らせ、生き残りを賭けて争っていた。

体を苛む快感に気を取られて気づかなかつたが、あれから何人も脱落しており、獣さながらの淫声を張り上げて組み敷かれているのが見えた。

しかしララノアにとって衝撃的だったのは、脱落して犯されている者たちの姿ではなかった。

ある者は相手の髪を掴んで引きずり、ある者は組み合つて転がりながら土塗れになり、ある者はビキニが千切れて裸になつても意に介さず、同胞を鬼に押しつけようと躍起になつていた。

騎士として訓練を積んだララノアから見れば、闘いにもなつていない。ただがむしやらに握つた拳を相手に叩きつけ、掴んだ砂で目潰しをし、怯めば馬乗りになつて殴り続ける。そこには仲間意識の欠片もない罵詈雑言ぼりぞうごんが飛び交う、狂気の光景が広がっていた。

「ねえ、我が身可愛さに同族を蹴落とすのがエルフの誇りなの？」

「そ、それは……っ」

「高潔だなんだって謳つても、所詮一皮剥けばごらんの有様だよ」

「くっ、うう……だがそれも、卑劣な人間どもが東の森の国を侵略しなければっ！」

「何百年前の話を持ち出しているのかなあ？ まあ長命なエルフと短命な人間じゃ時間の感覚が違うのかもしれないけど……弱肉強食は世の常じゃないか。強ければ生きて弱ければ死ぬ

だけ。単にエルフが人間より弱かったから奴隷に堕ちただけなんだから、責任転嫁も甚だしいよねえ」

やれやれと、呆れ気味に頭を振るメルヒー。

「よ、よくもそんな戯言をぬけぬけと……おおんっ!？」

人間の勝手な理屈だと激しく反感を覚えたララノアだったが、その激情も快感によつて遮られた。

「自分のためなら他者を顧みないエルフの誇りは充分見たよね？ おっぱいしか弄つてなかったから、そろそろオマ×コが寂しくなってるんじゃない?」

メルヒーは生温かい吐息を首筋に吹きかけながら、乳房を握っていた手を股間へ伸ばしてきた。

「そんなこと、あるわけがっ……んくう!」

ララノアは否定するが、すでに股間はグツシヨリと淫液で濡れており、割れ目を覆っていたわずかな布地も蜜を吸って張りつき、透けて溝の形を浮き彫りにしていた。

先の愛撫でとつくに昂ぶっており、失禁さながらに幾筋もの跡を太腿に描いていた。

「まだ頑張るの？ 強情なのも面白いけど、もう少しバリエーションないかなあ?」

「別に貴様を喜ばせるつもりはない!」

「まあララノアちゃんならそう言うよねえ……だったらボクの好きにやらせてもらおうかなあ」

「な、なんだと……!?!」

メルヒーの不穏な発言に、咄嗟に身を硬くする。

「そういうわけだから、オマ×コを弄りやすいように腰を落としてがに股になってくれる?」

「ふ、ふぎけるなっ! 誰がそんなことお——っ!?!」

「別にララノアちゃんの返事は聞いてないよ」

今まで背後から手を這わせてくるばかりだったメルヒーが、ニヤニヤと笑いながらララノアの肩に顎を乗せると、体重を預けて伸しかかってきた。

媚薬が蔓延した肉体は治まらない疼きに力が入り難く、辛うじて堪えると、凶らずもメルヒーの指示通りにがに股を披露してしまった。

股を開くと淫裂も広がって、割れ目から鮮やかな肉色の襞が顔を覗かせていた。

「あつ、気持ちよくて立っていられなくなったら力を抜いていいからね。ボクが支えてあげるからさあ」

いやらしい笑みを浮かべてそう言うと、片腕を腰に回す。そうすればララノアが躍起にな

って体勢を維持するだろうと見透かしていた。

「だ、誰が貴様に屈するものかつ……たとえ、どんなに無様な格好だとしても……くうう
う……っ」

惨めで淫猥な格好をさせられても、何もできない自分に全身が震える。

「グフツ、やつとらしいポーズになったねえ。少しは自分が奴隷だつて理解できた？」

「知るか！ こんな辱めを繰り返して……何が楽しいのだ！」

ララノアは懲りずに言い返すが、羞恥で顔が熱いだけでなく口調も弱々しい。

「全然楽しいよお。口では偉そうなことを言うくせに、オマ×コは緩くて汗を垂れ流している
ような奴隷を相手にするのは特に……」

「変態が……っ！」

「こんな場所で犯されて、あんあん喘いでたララノアちゃんに言われたくないなあ」

「ひうつ!? うひいいいんっ!!」

唐突にララノアの甲高い嬌声が響き渡った。

メルヒーが指を張りついている布地の隙間から潜りこませて横へずらしたかと思えば、間もなく甘美な刺激が脳天まで駆け抜けた。

媚薬に侵食されているうえに、散々乳房を弄ばれた肉体は発情しきっていた。

そこへメルヒーの太い指が不意に埋めこまれた衝撃は、あまりにも強烈だった。

「ほら、さっそくボクの指をグイグイ締めつけてるよ」

「んぐっ、あああつ！ う、うるさいっ……変なことを、言うなあ！」

「それってつまり、口より手を動かせと？」

「だ、誰がそんなこと——おおおおっ!？」

メルヒーは膣内で軽く指を曲げ、手首に捻りを加えた。

粘膜を擦られると、さっそくララノアの嬌声が溢れた。

「デュフフ……もうとつくにオマメコはトロトロじゃないか。今まで何人も奴隷で遊んできたけど、こんな派手に垂れ流してるのはララノアちゃんが初めてだよ」

「おっ、おひい！ や、やめろおお……っ、そこを、お、擦るなああつ！」

乳首を弄り回していたメルヒーの指が、今度は膣内の粘膜を擦っていく。

次から次へと快感を与えられ、新たな淫液を分泌させては、がに股のララノアは足の震えが止まらなかった。

卑猥な声をこれ以上派手にしないため、瞼をギュツと閉じて、官能を抑えることに努めようとする。ところがそんな努力が報われることはなく、メルヒーの指の動きに合わせて声が裏返ってしまう。

「あひっ、ひんんう……！ んう、違うっ、こんなものはあ……ああんっ、ち、違っ——ん
いいいいっ!!」

メルヒーの指を埋めこまれた膣穴からは、クチユクチユと卑猥極まりない音が鳴り響いて
いる。脂肪を纏った太い指によつて淫液が掻き出され、絶え間なく溢れ出していた。

ララノアは押し寄せる快楽を拒絶し、自分は悦んでいないと『違う』と何度も繰り返して言
い聞かせる。

「何が違うのかなあ？ オマ×コはダラダラ涎を垂らしてるし、ずっとエツチな音が鳴りつ
ぱなしなんだけど？」

メルヒーは強めに指を動かして粘着質な水音を大きく奏で、ララノアに現実を突きつけて
くる。

「おぐっ、あああっ！ き、貴様がつ、あああ、貴様が鳴らしているからだあ！ 貴様が指
で掻き回すからっ……んお、そんな恥ずかしい音、聞かせるなあ！」

「ボクが悪いの？ ララノアちゃんがオマ×コをぐっちよんこにしてるのも、気持ちよくて
嬉しそうな顔をしてるのも？」

「う、嬉しいわけが、あるかあ！ あっ、あっ、貴様が変態だから……あおおっ！ 全部、
貴様がっ……！ だ、だから早く犯せばいいだろっ！ おっ、んんう……私は、私は負けな

「いいいい！」

もはやララノアは頭で考えておらず、反射的に返していた。

淫欲に塗れ、ヒステリックに淫声交じりの声で叫んでしまった。

「安心してよお。ボクは優しいから、たとえ相手が奴隷でも気持ちよくなつてほしいと思つてるから、たくさん感じていいよ。我慢は体から毒だからねえ」

元より不気味な笑みがいつそう邪悪に感じられ、これから送りこまれる快感に対して、期待と不安に駆られたララノアは戦慄した。

「こ、これ以上何を……私に何をするつもりだっ!？」

「別に難しいことは何もしないよお」

メルヒーは楽しそうに、発情して蕩けた膣穴へさらに二本の指を追加した。

「あおおおおおっ!!」

途端にララノアは顎を仰げ反らせ、調子の外れた絶叫を迸らせた。

何が起こったのか理解できないまま、ひたすら悶え狂うことしかできない。ビクビクツと全身が震え、がに股を維持できずに崩れ落ちかけるも、メルヒーに支えられて無様に股を広げ続けていた。

「チ×ポを入れる前にしっかりと解しておかないとねえ……ついでにララノアちゃんも気持ち

ちよくなれるし、一石二鳥でしょ」

メルヒーは捻じこんだ三本の指で、膣内を無遠慮に掻き回していく。

「おひいいいっ!? いぎっ、あああああっ! あ、頭がグチャグチャになるう! やめっ、やめりよおおおっ!!」

ララノアは身を振り、髪を振り乱して悲鳴をあげた。

高速で攪拌される膣口からは、潮の飛沫しぶきが止まらない。

「いい声だよララノアちゃん! もっと、もっと聞かせてよお!」

指を根元まで突き刺して、粘膜をがむしやりに捏ねくり回していく。

「んぐあああっ! う、動かしゆなああっ! それ以上は、やめっ、ダメええっ!!」

媚薬で性欲を剥き出しにされた肉体は、性悦を敏感に感じ取ってしまう。

乳首を弄ばれていた時とまるで異なる感覚だった。

それは神経に直接触れられているような、圧倒的な甘美だった。

「ほら気にしないで! どんどん感じまくってよララノアちゃん!」

（くそおおおっ! まただっ! 弄ばれて屈辱でしかないはずなのに、気持ちいい! 悔し

いのに、目の前の人間を八つ裂きにしたいほど憎いのに……私は、私は気持ちいいと感じて

しまっている！)

王家を救い出すという使命のために、女の幸せなど考えたこともなかったはずなのに、この身に刻みつけられた快樂がララノアの精神を蝕んでいく。心の支えであったエルフの誇りや矜持が、濁流のように襲いくる快感によって容赦なく塗り潰されていくのだった。

「おほおおおおおつ!!? お、おんつ、んいあああああつ!!」

そして生理的に嫌悪感を抱くほどの相手だとしても、一度認めてしまえば抑えられるはずもなく、ララノアは瞬く間に悅樂の頂へと駆け上がっていく。

「いいよ、イツちやいなよ！」

蓄積した性感に思考は破裂寸前だった。

そこへ悪魔の囁きに後押しされて辛うじて繋ぎ止めていた理性が決壊し、ララノアは目を剥いて一際激しく痙攣した。

「ばっ、バカ者お！ んいいつ、今……今そんなこと、言われたらっ……あつ、あつ、ああっ、あああああああああつ!!」

とうとう絶頂を迎えてしまい、体中から悦びが溢れて膣奥からも熱い塊が出口を求めて殺到する。思考を埋め尽くす快樂に自制は働かず、それは尿道口から飛び出して綺麗なアーチを描いた。

潮のような無色透明ではなく黄金に煌めいており、地面に広がるとわずかなアンモニア臭が漂う。ララノアはメルヒーの執拗な愛撫に翻弄されたあまり失禁していたのだ。

「デユフフツ、おしっこをちびるくらい気持ちよかったんだあ」

メルヒーは愉快に笑うが、ララノアはそれどころではなかった。

「あああつ！ 止まれ、止まれえええつ！ なんて、どうしてっ……いやああつ、止まらない、止まらないひいっ!!」

痙攣するばかりで力が入らず、ジョボジョボと音を立てる無様な失禁を止められない。ただ今回は多数の奴隷が入り乱れて犯されているため、ララノアを注視している観客が少なく、別段野次も飛んでこなかったことだけがせめてもの救いだった。

「さすがにララノアちゃんが漏らすとは思わなかったよお」

「ぐううう……うつ、うるさい！ よくも、よくもお……っ！」

あまりの恥ずかしさと情けなさに、涙さえこぼしており普段と比べるとあまりにも弱々しい。そしてどれだけ股間が緩みきっていても、尿の貯蔵は無尽蔵ではない。やがて勢いは衰え、チロチロと内腿を伝って流れていった。

「あ、おしっこ止まった？ だったら次は、ララノアちゃんがお待ちかねのセックスだよ」

「せ、セックス……セツ、クス……だとお！ 好きにすればいい……だが私は屈しない、屈

して堪るものかあ……!」

それはララノアの本心からの言葉ではあったが、失禁のショックが大きく声に力がなく目力も弱々しかつた。

「じゃあ、遠慮なく」

そう言うと、メルヒーはさっそく悪びれもせずララノアを振り返らせて向かい合うと、おもむろに片足を抱えて持ち上げ、肩に乗せた。

「こ、今度は何を……」

「体柔らかいねえ、簡単に足が上がるなんて……これならこのまま挿入できるね」

「ひうつ?! た、立ったまま……!?!」

押し倒されるか、犬のように四つん這いにさせられるかと思っていたララノアは、目を丸くした。

「片足だと体勢が不安定だから、ボクの首に腕を回したりして掴まってよ? 例えば、恋人みたいに力強くねえ」

「なあっ?! そんなはしたない真似ができるか!」

自らカエル顔のメルヒーを抱きしめる光景を想像して、ララノアは悪寒と羞恥から声を荒げた。

するとメルヒーは予想通りの反応だと鼻で笑った。

「別に無理にとは言わないよお？　ただ支えてなくてもボクは遠慮しないからね。ズツコンバツコンした衝撃で体勢が崩れて、倒れちゃっても知らないからね？　それでもし足でも捻っちゃったら、闘技場はしばらくお休みしないといけないかも」

「うぐっ……！」

一日でも早く白星の数を集めなければならぬララノアにとって、それは致命的だった。

「どうする？　ねえ、どうするう？」

ニヤニヤとしながら、ララノアの瞳を覗きこむメルヒー。

「ぐぐっ……わ、わかった！　すればいいのだろう、すれば！」

悔しさを噛みしめ、半ば自棄やけになったように言われた通りにララノアはメルヒーの首に腕を回してしがみついた。

ぶくぶくと肥え太ったメルヒーの顔が目の前に広がり、顔を顰めるララノア。ところが嫌悪感さえ抱いているにもかかわらず、隆々と屹立した肉棒から意識を逸らすことができなかつた。

（気持ち悪いはずなのに……熱いのが当たって、それしか考えられないっ）

感情とは裏腹に、肉体の反応を誤魔化すことはできない。

膣口は切なげにキュンキュンと潤み、奥から催促するように新たな粘液がどんどん分泌されている。

「ボクのチ×ポがそんなに欲しいんだあ？」

（体が、欲しがっている……どうしてなんだっ、こんな醜悪な男のモノが欲しいなんて……私は、アルフィリア様をお救いしなければならぬというのに……っ！）

どれだけ理性に訴えかけようとも、発情した肉体はペニスを求めてしまう。ララノアはそれを否応なく自覚させられた。

一度絶頂させられたことで幾分か落ち着きを取り戻しつつあったはずが、勃起した肉棒を意識した途端に呼吸が荒くなり、小刻みに震え始めていた。

「ララノアちゃんは我慢してるつもりかもしれないけど、オマ×コはチ×ポが欲しくて堪らないって、すごい涎だよ？」

メルヒーの言う通り、膣穴は疼くあまりねっとり濃厚な淫液を溢れさせているのが、見えていなくても内腿を伝って足元まで滴っていく感触でわかってしまう。

「くっ、う……言うな、言うんじゃ……ないっ」

抗えない悔しさと羞恥に、唇を噛みしめて顔を逸らす。その反応は、メルヒーの言葉を肯

定しているも同然だった。

（だがこれは体だけだ……媚薬で体が発情しているからであって、本心から望んでいるわけではない！ 犯されることを望んでいるわけでは、断じてないっ！）

肉体がペニスを欲しているのを止められないのなら、せめて心だけでも強く持とうと、ラノアは頭の中で何度も繰り返した。

「そんな生意気な態度がいつまで続くかなあ？」

「ふ、ふんっ……私が貴様に屈するなど——おひいいんっ!？」

嘲るメルヒーに毅然と返すつもりが、挿入のために亀頭が膣穴に触れた瞬間、敏感に反応して声をあげて震えてしまった。

挿入しているところは見えないが、ゆっくりとペニスが穴を広げて入ってくるのが伝わってくる。

（あ、熱いのが私の膣内なかを広げて入ってくる！ 負けるものか、こんな男のチ×ポなどに、負けるものかあ！）

「グフフツ、いい加減ボクも我慢できなくなってきたから、一気にいくからねえ！」

ラノアを抱くメルヒーの腕に、グツと力がこめられた。

「ひっ……!! ま、待つ——おほおおおおんっ!!」

ペニスが一息で捻じこまれ、ララノアの体がビクンツと弾んだ。

アムラスの極太チ×ポほどではないが、長さはそれに匹敵して奥までしつかりと到達している。長大な肉塊の感触に腔粘膜はうねり、我先にと彼に纏わりついて締めつけていく。

「あがつ、あああつ……は、入ったつ、チ×ポが入ってきたあああつ！」

「悦んでるけど、まだこれからでしょ？」

感極まった声をあげるララノアに対して、メルヒーは淡々と返した。

ララノアは彼の言ったことがすぐにはわからなかったが、次の瞬間には蕩けるような愉悦が沸き起こった。

「あおおっ!! んひひひひひひっ!!」

奥まで突き刺さったペニスを引き抜かれると、腔肉が雁首に搔き筆られてとてつもない官能を生み出した。

そして間を置くことなく、再び腔奥に突き立てられた。

「んほおおおおおおっ!!」

ララノアの意味など容易く貫き、闘技場の外まで響いたのではないかと思わせるほど、呆気なく淫らな嬌声を張り上げていた。

もはやすぐ近くで争い、犯されている同胞を気にかける余裕もなく、観衆の声さえどこか遠くに聞こえる。淫声と共に体をピクピクと痙攣させ、膣奥を襲った肉棒を激しく食いしめていた。

「ほんの少し突いただけでイツちやつたねえ……エルフの誇りやなにやらはどこへ行っちゃったのかなあ？」

メルヒーは根元まで挿入したまま腰を揺すり、収縮する膣穴の感触を堪能する。

「んおっ、おおおっ……！　だっ、だまりえええ……っ！」

「呂律が回ってないぞお」

ニヤリと笑うと、腰を引き始めるメルヒー。

「ふああああっ！」

ララノアは天を仰いで声が裏返ってしまう。

密着している襷を引っ張りながら抜けていき、甘い悲鳴がこだまする。

何度も経験している快感だが、感じすぎてまともに呼吸をすることもままならない。

（くそお……！　チ×ポが抜かれる時の、カリに引っ搔かれるのが気持ちいい！　オマ×コが蕩けてしまいそうだった！）

「気づいてる？　ララノアちゃんのオマ×コのほうからチ×ポに食らいついてきてるよ

「お？」

その通りであるため、反論の余地もなかった。

膣内はララノアの意味に反して、快樂をもたらしてくれるペニスを逃がすまいと飛びついている。そうして密着感が増すと、カリ首との摩擦が強くなって痺れるほどの悦びが生じていた。

「やつ、やめええ……！　んい、いぎつ、認めるかあ、こんなによお……おおんっ！　オマ×コ、引っ張られたくらいれえ——おひいいいっ！」

懸命に声を絞り出す、突かれるたびに体が切なくなつてペニスを求めてしまう。

「もうトロトロだねえ。いい加減認めちゃえばいいのに、ララノアちゃんはチ×ポが大好きな変態エルフだつて」

わざと腰をゆっくりと引きながら、メルヒーが耳元で囁いた。

「そ、そんなにやこと……ないっ！　こんなもので、私は、私はあ……ああんっ！」

「別にララノアちゃんがどう思おうと、オマ×コに直接聞くだけなんだけどねえ」

メルヒーは舌舐めずりをして、ララノアの唇にしゃぶりつきながら抽送を繰り返す。

「おおおんっ!?　んぎつ、んんう——っ!!」

反射的に声をあげてしまったものの、即座に口を噤むと唇を噛んで声を抑えようとした。

「そんなことしても無駄無駄あ」

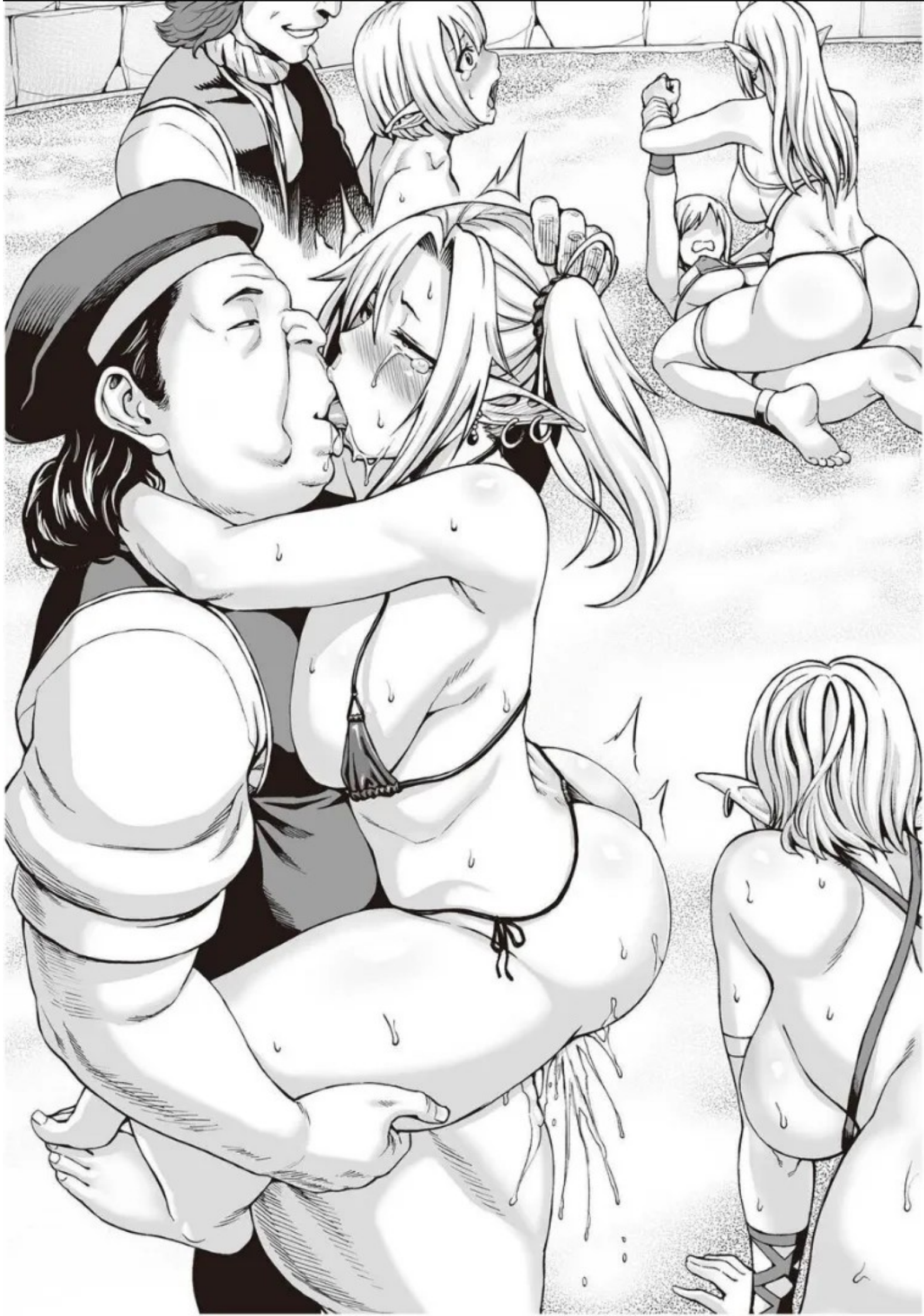
メルヒーは確信を持って笑みを浮かべ、膣奥へとペニスを突き刺す。

「あひひひひひひひっ!!」

数回は堪えたものの、強烈な快感に全身が痺れ、力が緩んだ途端に口が開き、無様なほど喘ぎ声を迸らせていた。

膝が震えて崩れ落ちそうになるも、メルヒーにしがみつくことで回避する。

「どうしたのかなあ？ 急に抱きついてくるくらいボクのチメポが気持ちよかった？」



「おああつ、そ、そんなわけあるかあ！ あああつ、チ×ポつ……んぐう、チ×ポで引つ掻くにやあああつ！ んお、おつ、ふおおつ……お、奥につ、チ×ポが入つてくりゆううつ！」

ペニスが往復するたびに、牝として膣内は歓喜の悲鳴に震えた。

人間には屈しないと、無様な姿を晒すまいとしても、到底御しきれぬものではなかった。穢される屈辱も、すべては快楽の前に霧散してしまう。

「まだまだいくよお！ あ、ちなみにそろそろあつちの決着がつきそうだよ？」

メルヒーが指差す先には、残った二人のエルフが取っ組み合いをしていた。

両者のビキニはすでに千切れており、乳房も股間も剥き出しになっており、転げ回っていたらしく、全身が土に塗れていた。それでも二人は止まらず、互いの髪を掴み合つて、ひたすらに殴り合つていた。

戦闘技術も何もない、ただ感情に任せて腕を振っているだけという見苦しさに、先ほどはその矜持もプライドもなく、我が身可愛さに同胞であろうと平然と傷つけている姿に身震いした。そしてララノアも奴隷に堕ちた暁には、彼女たちのように落ちぶれてしまうのかもしれない——と、己の未来を密かに幻視までしていた。

「んお、おつ、おおおつ！ し、子宮口が広がつてえ、あああつ、やめつ、押しこむにや

あ！ あひつ、いひいひいひいっ！」

ところが、今のララノアには他人を意識するだけの余裕は残されていないかった。

観衆の嘲笑も、同胞が痛みを顧みずに傷つけ合い、人間に犯されていても、耳に届かなければ視界にも映っていないかった。

ララノアの思考は、すべて膣内を蹂躪するペニスで埋め尽くされていた。

（き、気持ちいいっ！ 認めるわけにはいかないのに、どんどん気持ちよくなってしまいう！ しかし認めるわけには……私はアルフィリア様たちを救わなければならないというのにつ……感じすぎて頭がおかしくなるう！）

「いやはや、媚薬ってすごいねえ。ララノアちゃんみたいな堅物も簡単にアヘアへにしちやうんだもん」

それは悪魔の囁きだった。

これまでもメルヒーは同じ言葉を口にしてきたが、官能に茹だった頭ではそれすら思い出せない。そしてチメポがズボツと子宮口に突き刺さった瞬間、もう何も考えられなくなっていた。

「んほおおっ！ そ、そうらっ、これは媚薬のせいらっ！ こんなに気持ちいいのは、全部媚薬のせいなんらあああっ!!」

快樂を抑えきれなくなつたララノアが叫んだ。

自分がセックスで狂つたのは外的要因が原因であり、本心ではないと髪を振り乱しながらよがり悶えた。

「うん、そうだねえ。ララノアちゃんの乳首がビンビンなものも、オマ×コが悦んでるのも全部、ね」

「あおおおっ！ チ×ポ速くにやったあああつ！ オマ×コが悦んでつ、んあ、あああつ、お、お前たちが、媚薬を飲ませてチ×ポでジユブジユブするかりやあつ！ チ×ポのことしか考えられにやいんらああつ!!」

「だつたらチ×ポのことだけ考えてればいいよ！ それが奴隷エルフの役割なんだからさあ！」

「ほひいいいいつ!! いんつ、おつ、おつ、チ×ポ、チ×ポ奥に当たつてえ！ あおおおんつ、おんつ、んぐうう……ら、らめええ！ 頭が真っ白になって、何も考えられにやいいいつ！ おほつ、んんう……なんでこんなにチ×ポは気持ちいいんらあああつ!!」

もはや限界を超えていた。

ララノアはたが籬の外れた嬌声を轟かせる。

「デユフフツ、呆気なかったなあ」

メルヒーは愉快に笑い、ララノアの最も深い場所を徹底的に突き上げる。

「おおおおおっ！ オマ×コ、ズンズンぎもちいいいいっ!!」

「素直になったご褒美に、このまま孕ませてあげよう！」

「んなっ、にやにをするつもりらああっ!?!」

ララノアは快楽に喘ぎながらも驚愕に目を見開いた。

「言葉通りの意味だよお。子宮にたっぷりとボクの子種を注いであげる！」

「ひいいっ！ そ、そんなことされたら私はっ……私はあああっ！」

声を震わせるが、メルヒーを拒絶しようとは思えなかった。

（私は期待しているのか!? 子宮に射精されたがっているのかっ!?!）

子宮を穿たんと、メルヒーのピストンが勢いを増していく。

「アムラスのマーキングなんか上書きしてあげるからねえ！ さあ、子宮に射精されてイッ

ちやいなよ！」

「射精!? 子宮に直接……!?! 今射精されたら、妊娠っ、妊娠してしまううっ!」

妊娠の二文字に、首の薄皮一枚で繋ぎ止められていた理性が叫んだ。

しかし、それでもララノアの膣内はメルヒーを歓迎し、忙しなく締め上げて濃い精液を搾

り出そうとしていた。

「んああっ！ イクっ、イクよ、ララノアちゃん！」

忙しない粘膜の収縮がメルヒーのペニスを容赦なく締め上げ、堪らなくなつて熱い精液を搾り出していた。

ドピユドピユと、灼熱の精液が子宮に注ぎこまれる。

「やつ、やめりよおおっ！ 子宮はダメらとお……おおおっ、あ、熱いつ、熱いのが子宮にいつぱいなんてえ！ あお、ほおおっ、こんにやのもう無理いい……いぎっ、子宮が熱いいいつ！ いぎい、いつ、イクツ、イクイグうううっ!!」

妊娠への恐怖心さえ次の瞬間には悦楽に塗り潰され、子宮に直接射精された衝撃で絶叫を響かせると同時にアクメへ上り詰めた。

マグマの如く滾つた精液が子宮へ叩きこまれ、ドクドクと脈打つたびにララノアの唇から悦びの声が迸り、ガクガクと痙攣を繰り返す。

「少しは身の程を知れたかなあ？ ララノアちゃんは奴隷以下の牝豚なんだよ。誇りなんて何もない、チ×ポが大好きな牝豚だよお」

「ああおおおっ！ わ、私は牝豚じゃ……子宮に射精されてもっ、ほおおっ、おんっ、牝豚じゃにやいいいつ！ けどイグう……チ×ポでオマ×コがつ、いひっ、イキまぐっでりゆに

よほおおおおおっ!!」

ララノア自身、何を口走っているのか理解していなかった。

無意識にまだ心までは堕ちていないと訴えながら、肉体に生じる悦びのままにアクメを受け入れ、卑しく絶叫し続けた。

「言ってることが支離滅裂だねえ」

メルヒーが楽しそうに欲望を吐き出し終えた頃になると、ララノアの意識は朦朧として半ば失神していた。

「あ、ああ、あひつ、い……あ、あへええ……」

涙や鼻水で顔中がグシヤグシヤで、もはや誇り高いエルフとして快樂に抗おうとしていた面影も気位も、何一つ見当たらなかった。

目尻が下がり、ニヤケた顔のままピクピクと白目を剥いて痙攣しており、メルヒーが抱いているおかげで辛うじて立っているだけだった。

自分がどれほど無様な姿を晒しているかも理解できていなかった。

「あ……ある……ふいりあ、しやまあ……」

ララノアが掠れた声で呟いた。

自信に満ち溢れていたエルフとしての誇りなど、今後も待ち受けているであろう凌辱の前

では、もはや風前の灯であった。

第IV章 生き延びるため土下座フェラと公開種付け

「くそっ……こ、こんなはずではっ！」

悲痛なララノアの叫びが闘技場に響いた。

「散々生意気な口を叩いてくれたなあ、奴隷の分際でよお！」

ララノアは屈強な男に掴まれ、ひざまず跪かされていた。

眼前には、太い血管が浮かび上がった剛直が突き出されている。それが意味しているのは、ララノアの敗北である。

体格差が倍以上の巨漢ではあったが、決して勝てない相手ではなかった。

油断することなく、普段通り目の前の相手に集中していれば、このような事態に陥ることはなかっただろう。しかしそのようなことを考えたところで後の祭りである。

アムラスに犯されて生まれて初めて牝の悦びを知らされ、先日は媚薬の影響もあったとはいえ快樂を受け入れてしまい、ララノアはそれに溺れてしまった。

観衆に囲まれているにもかかわらず下品に嬌声を響かせ、強烈な快感に晒されて一時とはいえ、アルフィリアら王家の救出の使命を忘れるほどの衝撃に悶え狂った。

あれ以来、ララノアは己があれほど豪語していたエルフとしての誇りを強く主張しなくなつた。

我が身可愛さに傷つけ合う同胞の姿をまざまざと見せつけられたことも一因ではあるが、何よりもララノアの自信が揺らいでいた。

どんな経緯であれ、セックスの快感を思い知らされた。

正気ではなかったとしても、一度認めてしまった感覚は忘れられなかった。

そのせいで、時折ララノアは自分が犯されている記憶が脳裏を過り、身を火照らせてしまふようになっていた。

今回は、試合の途中から自分が負けた場合の展開を想像してしまい、雑念に鈍った隙を突かれて負かされた。

あまりにも馬鹿馬鹿しすぎる失態だが、敗者はすべてを奪われるのがこの闘技場のルールである。勝者の剣闘士はララノアの髪を掴んで引つ張り上げると、唇をこじ開けて脈打つペニスを口内へと捻じこんできた。

「むぐう、うぶぶつ……!! んっ、んぐつ、んんんう!!」

ララノアは情けない呻き声を漏らし、己の不甲斐なさに涙さえこみ上げてくる。

「ハハハッ！ 泣く暇があったらもっと締めろよ！ 奴隷は奴隷らしく、チ×ポ穴になつてればいいんだ！」

「ぐっ、んんう……だ、誰がチ×ポ穴などと——っ！」

ララノアは柳眉を吊り上げるが、口内を埋め尽くす熱い塊を心から嫌悪することができずにいた。

「歯を立てるなよ！ 奥まで突っこんでやるからよお！」

ララノアの頭を掴み、そのまま自分の下腹部へと引き寄せた。

「おぶう!? んぶっ、ぐぶぶぶっ……げ、げしゆめええ……んごっ、おごごっ!!」

根元まで押しこまれて桜色の唇をいっぱいに広げられ、張り詰めた亀頭がゴツツと喉奥まで到達した。

鼻から息苦しい呻きが抜けていく。男を睨みつけるものの、目尻からボロボロと涙が溢れて迫力に欠けてしまう。

頭を引こうにも、がっしりと掴まれているために動くこともままならない。

「ただ唾えるだけじゃねえだろ！ 奴隷ならもっと気合入れてチ×ポに舌を絡ませろ！」

（くそお……私はまたこんな男の言いなりにつ！ 喉の奥まで……汚らわしいチ×ポで口の

中をいっぱいにされて……っ！)

さらには、鈴口からトクトクと生暖かい汁を分泌される。それが唾液と混ざり合って、口内に生臭い臭気が漂い始め、独特の饅えた臭いに吐き出しそうになる。

「唾えてるだけで満足してんじやねえよ！ 奴隷なら率先してチ×ポに奉仕するもんだろーうが……チツ、俺から動いてやるから感謝しろよ！ おらっ！」

喉まで達していたペニスが、唇を捲りながら引き抜かれていく。ビクビクと脈打つ感触が伝わり、おぞまじさに肌が粟立つて震えが止まらなかつた。

そしてカリ首が唇に触れたあたりで、再び突き戻された。

下腹部に顔を押しつけられ、ザラザラと硬い陰毛と顔が擦れる。脳を揺らされるような激しい衝撃と同時に、捻じこまれた肉棒によって気道を塞がれた。

(ま、また奥に戻ってきたっ……早く終わらせて、チ×ポを抜いてくれ……っ！)

息苦しさから反射的に頭を引こうとするが、両手で掴まれているためにビクともしない。ララノアはペニスから解放されたい一心で、一秒でも速い射精を願った。

何度も犯されたとはいえ、まだ性経験は乏しい。男が何を考えているかまでは、ほとんど理解できていなかった。

そんなララノアを見下ろしながら、男は唇を歪めて笑った。

「何逃げようとしてんだよ！ お前の卑しい喉マ×コを使つてやってるんだろぅが！」
男は容赦なくペニスを抽送させ、口腔を力ずくでこじ開け、喉奥まで一気に貫く。

「おごごっ!?! おぶっ、んぶううっ！ やめっ、ぐるじい、んぼお！」

ララノアの肢体が、壊れた人形のようにビクビクツツと震える。

喉までめりこんだ亀頭が粘膜を広げて抉ってくる。一突きされるたびにえずき、胃がひっくり返つたような錯覚を繰り返した。

「おお、いいぞっ……脈動する喉がグイグイチ×ポを締めつけてっ、これが喉マ×コの醍醐味だな！」

「うげええ！ おごっ、んぐぐう、おぼぼお！」

男はペニスを叩きこみながら笑うが、ララノアはそれどころではなかった。

呼吸もままならず、ボロボロと涙をこぼしながら鼻水を垂らし、逆流する胃液に悶絶するばかりで、官能とはほど遠い状況だった。

「なんだ苦しいのか？ これが正しい喉マ×コの使い方だぞ。奴隷ならこれくらい感じて嬉ションするくらいじゃないとな！」

男は苦しむララノアへ冷徹に言い放った。

（この男、ぜったいにいつか後悔させてやる……っ！）

内心で復讐を誓うララノアだが、この状況でできることなど何もなく、ただペニスによって口腔粘膜を蹂躪されるしかない。

男はまるで物を扱うように、ひたすら腰を振ってララノアの喉を抉って犯していく。

「ぎよべっ、げぼおあっ！　ぶごっ、おおおっ！」

そして男のペニスが喉奥でプルプルと忙しく脈打つようになると、ララノアの瞳は裏返り、白目を剥いて呻き、ガタガタと痙攣し始めた。

「どうだ、自分の立場を思い知ったか牝豚!?　肉穴の分際で人間に逆らうとどうなるか、わかったか！　オラ！　オラアアアっ！」

ララノアは狂乱して震えてその振動が男の射精衝動を刺激し、トドメの一突きだと渾身の力で頭を腰に叩きつけた。

「おびよおっ!?　おおっ、おげっ、げぶええええっ!!」

濁流のように放たれた精液を流しこまれ、えずいて逆流した白濁液は唇の端だけでなく、鼻の穴からも噴き出した。

吐き気を催すような強烈な臭気に、白目を剥いたララノアの痙攣が激しさを増す。

精液で溺れ死ぬ姿さえ幻視するが――

「おっ、おほおっ♪」

男は射精の快感に表情を蕩けさせながら、ララノアの状況など知ったことかとぶちまけてくる。

「ぐぼっ！ おぶっ、ぶぶうっ！ んぐっ、ぐぢゅ……おえ、ぐぐっ……ぐぶぶっ！」

濃厚な白濁液が喉に絡みつき、呼吸さえままならない。えずきながらも必死に喉を動かして飲みこまなければ窒息しかねない勢いで、男は最後の一滴まで射精を続けた。

「美味かっただろう、喉マ×コで味わう俺のザーメンは？」

男は下卑た笑みを浮かべると、射精を終えたペニスをララノアの口から引き抜いた。

「げぶっ！ おげええ……げほっ！」

ペニスが抜けると、ねっとりとした白濁が唇と男根の間で糸を引いて滴っていく。そして唐突に口腔を塞いでいた栓を失ったことで、えずいた胃液と精液がわずかに逆流し、口の端から顎へ垂れていった。

だらしなく顔を崩したララノアを見下ろしながら、男の嘲笑が聞こえた。

ところが今のララノアには、男の嘲りに返す気力も残っていなかった。

口内にまだペニスが残っているような感覚があり、白目を剥いたまま口を開けてプルプルと震えており、酸素の欠乏と疲労に加えて一段落したという安堵から、張り詰めた糸が切れ たように失神し、その場に崩れ落ちた。

「ここ何試合か、立て続けに負けがこんでるみたいだけど？」

口腔を犯された翌日、屋敷に呼び出されたララノアが部屋に通されると、ソファにふんぞり返ったシャウアは、愉快そうに微笑みながらそう言った。

「くっ……貴様に言われなくてもわかっている！」

咄嗟に睨み返すララノアだが、自覚があるだけに声に覇気がない。

「そんな調子でアルフィリア様を助けられるの？」

「……確かに何度も無様な姿を晒したが、最終的に勝ち星を揃えれば問題ない！」
根拠などない。しかしララノアははつきりと言いきった。

シャウアとの賭けは、たとえ九敗したとしても、先に十勝を数えることができればララノアの勝利である。どれだけ辱められようと、最終的に勝利条件を満たせばそれでいいのだ。

「ふくん、まあ頑張りなさいな」

これまでの戦績を知っているシャウアの言葉は、若干の呆れを含んでいた。

「それで？ そんなつまらないことを言うためだけに、私を呼んだわけではないのだから？？」

「それはそうなんだけど、少しくらいお喋りしたほうが円滑なコミュニケーションを築けるでしょう？」

「ふざけるな！ 早く用件を言え！」

「はあ、せっかちなね……エルフは無駄に長生きだから時間には悠長なくせに、こういう時はせっかちなんだから」

「私は馴れ合いをするつもりはない！」

「残念。あなたとは仲良くなれると思ったのに」

「心にもないことを……」

王家を解放したいララノアと、自らの目的のためなら同胞だろうと人間だろうと利用するシャウアは対照的な存在である。からかわれているだけだとわかっているだけでも、ただでさえ敗北が続いて精神的に余裕を欠いている現状では、気持ち逆撫でされるばかりで苛立ちが募る。

「まあいいわ。あなた、剣闘士がどんな立場か理解しているかしら？」

「急に何を……？」

質問の意図がわからず、ララノアは首を傾げる。

「そのままの意味よ。闘技場に参加しているのは所有者がいる奴隷か、スラムの孤児を拾っ

て剣闘士に仕立てられたのが大半で、実質奴隷身分なの。だから娼館でお客を取ってる娘たちと同じ、ね」

「……何が言いたい？」

「闘技場での敗者はその場で凌辱され、それを眺めて興奮した帰りに娼館へ足を運ぶ者も少なくないわ。でも中には、目の前で犯されてる剣闘士を欲しがる場合もあるわ」

「なん……だと……!？」

彼女が言わんとしていることを理解して、ララノアは目を剥いた。

「奴隷だもの。その奴隷の所有者が首を横に振らない限り、お金を積まれれば一晩限りで売られるわ。勝者も敗者も関係なくね」

「勝者も？」

「ええ。自分が強いと思ってる女を弄りたいだとかなんとか、試合後は引く手数多よ？　ちなみに男の場合は、肥え太った貴族にはない二の腕や腹筋の筋力に魅了された婦人らに買われることが多いわ」

「……じゃあ、アムラスも？」

ララノアには、あの傲岸不遜な男が素直に従っている姿が想像できない。

「あの子は別よ。チャンピオンだもの、とつくに必要な勝利数を稼いで市民権を獲得してる

わ。まだ闘技場に参加しているのは、単に闘うのが好きなだけ。一応毎晩引く手数多だけど、抱く女は自分で選ぶって言って全部断ってるわね」

あの男らしいと、思わず納得するララノアだが、同時に疑問も生まれた。

「なら、私は……？」

凌辱ショーに興奮して奴隷を買うのであれば、自惚うぬぼれではないがララノアにも誘いがあったとしても不思議ではない。

仮にあったとしてもごめんこうむるが、自分にそのような誘いがあったとは一度も耳にしていなかった。

「もちろん毎回打診はあるわよ？ それなりにお金を積んだ貴族も何人か……全部こつちで断っておいたけど」

敵対しているシャウアに庇われていた事実には、ララノアは驚きを隠せなかった。

「な、なぜ……？」

「だって、それでへろへろになったせいで負けたってゴネられたら面倒なもの」

「んなっ!? 私はそんな見苦しい真似はしない！」

「じゃあ、この前のカエル顔の中年貴族みたいなのに買われてもいいの？」

「そ、それは……」

敵に情けをかけられるのは不本意だが、穢された身でも容易く肌を晒すなど考えたくもなかった。

「奴隷でもギルドに所属していれば最低限の人権は保障されるから、あまり無茶な真似はされないんだけど……偶に調子に乗るバカがいるのよねえ。一応私との賭けもあるわけだし、目の届かないところで傷物にされたら面白くないもの」

「そっちが本音か」

「だけどあなたにとっても都合がいいでしょう？」

「……くっ」

苦虫を噛み潰したような顔をするララノア。

敗北のショックに加えて何度も失神するまで犯され、心身を磨り減らしているのが現状である。そのうえ人間の玩具として買われるなど、想像もしたくなかった。

「だけど、そろそろあなただけを特別扱いするのも難しくなってきたのよね」

「どういうことだ？」

「あなたって意外と人気あるのよ？ 奴隷のくせに反抗的なのところとかが嗜虐心を撥るみたいでね……最近あなたを買いたいって輩やからが増えてきてクレームになってるのよ」

「私に、下衆な人間に身を売れと……？」

口にただけで身の毛もよだつ。

快樂というものを体に刻みつけられて以来、まるで自分の体ではなくなつたと錯覚するほど、淫らな衝動に駆られるようになってしまった。

そんなことを続けられたら、頭がおかしくなってしまうかもしれない。

「それが一番手っ取り早いんだけど、もう一つ方法があるわ」

「……もう一つ？」

思わず身を乗り出しそうになる。まともな方法でないのは想像に難くないが、ララノアに拒否権は存在しないのだ。

自らの意思で選べるだけ僥倖だと、そう思うしかなかった。

「こつちも別に難しくはないけどね。対外的にあなたが誰かの所有物、もしくはお気に入りだつて吹聴するのよ」

「それは意味があるのか？」

所有者が現れたところで何が変わるのか、買い手にとっては交渉先がシャウアから新たな所有者になるだけである。ララノアは彼女の意図が理解できずに首を傾げた。

「もちろん誰でもいいわけじゃないわよ？ 貴族相手でも影響力があつて、迂闊に手を出せ

ない人物が絶対条件ね」

「……いるのか、そんな輩が？」

せいぜい思い当たるのは、領主の代理を任されている目の前のエルフくらいだった。

「一応言っておくけど、私じゃないわよ？　娼館も仕切ってる私じゃ、あなたを貸し渋る理由がないもの」

「それは、そうだが……」

他に誰が——と頭を捻っていると、シャウアから告げられた名前に絶句した。

「アムラスよ。あなたが初めてを捧げたアムラスよ」

「なっ!?　あ、あいつが仮初めかりそとはいえ私の所有者だと……!？」

驚愕するララノアを無視して、シャウアは淡々と続ける。

「剣闘士チャンピオンの称号の影響と人気は絶大よ？　それにあんな性格だから、あの子のお気に入りに出す度胸なんて民衆にはないわ。下手にちよっかいを出せば圧倒的な力の前に返り討ちに合うのは確実だから、貴族でも迂闊な真似はしないわ」

「そ、そこまでののか……?」

言われてみれば、アムラスはシャウアに対しても傲慢な態度を崩さなかった。

領主代理の前でも態度を改めないような男である。たとえ貴族が実力行使に訴えたところで、頭を下げるどころか平然と剣でなぎ払っている姿しか想像できない。

「不満？」

「ないと言えば、嘘になる……」

この身を玩具のように扱って凌辱した男の所有物になれと言われて、素直に領けるものではない。

「豚みたいに肥えて脂ぎった貴族か、若くて鍛え抜いた肉体が逞しいアムラスか——どこに悩む要素があるのかしら？」

ララノアに反論の余地はなかった。

「さっさと歩け！ お前はこのアムラス様のペットの便所奴隷なんだからなあ！」

「あれ？ アムラス、何をして——っ！」

「嘘、奴隷を連れてる!? あれって、確かアムラスと闘ってた娘!？」

通りを行き交う野次馬たちの驚きの声に、周囲の視線が一斉に集まった。

真昼の娼婦街。

大勢の奴隷エルフが客引きを行っている大通りの一角で、ララノアは多くの同胞たちに取り

り囲まれていた。

「はい……くっ、うう……っ」

ララノアは屈辱の真っ只中にいた。

顔を真っ赤に染め、齒を食いしばって声が溢れ出しそうになるのを必死に堪え、野次馬たちの視線に晒されながら歩いていった。

その姿は無様極まりないので、ただ歩いているのではない。身に着けているものはなく、乳房や股間を白日に晒し、首に括られたリードを前を歩くアムラスに握られていた。

羞恥に身を竦ませることも許されず、強引に引きずられるように、ララノアは都市内を散歩させられていた。

(まさか、こんなことになるとは……っ！)

醜悪な貴族とアムラスを天秤にかけた末、ララノアはアムラスを選んだ。



するとララノアの所有権を得たところで誰にも知られなければ意味がないと、アムラスとの関係を吹聴するために奴隷として都市内を歩かされることになった。

シャウアが親切心で今回の提案をしたわけではないと最初から疑ってはいたが、案の定であつた。

とはいえ他に方法がないとも理解していたため、甘んじて受け入れるしかない——と考えていたのだが、アムラスは肝心の富裕層が多い区画ではなく、奴隷エルフの多い娼婦街に足を運んでいた。

単に辱めるだけでは、闘技場と代わり映えしないとしても考えたのだろう。そしてそれはララノアの心を大きく抉っていた。

同胞の好奇の視線の渦に、身を震わせるララノア。

「おい、なにをトロトロ歩いている！」

屈辱に足が遅くなったララノアのリードを、アムラスは容赦なく引つ張る。

「あぐう!? わ、わかっている……っ」

首を引つ張られ、つんのめりそうになりながらララノアは苦悶の声をあげた。

「相変わらず口の利き方を知らんヤツだ！」

「がっ！ あうう……っ！」

さらに強く引かれ、往来で無様に転ぶララノア。

周囲の視線が全身に突き刺さり、こみ上げてくる憤りと恥辱に、喉が裂けんばかりに叫びたくなる。

なぜ自分がこのような目に遭わなければならないのか、逃げ出せるものなら、今すぐにもこの地獄から逃げ出したかった。

この身は穢され、誇りを踏みにじられた。

今なら自ら命を絶つことも厭わないが、まだその時ではない。東の森の国を再興させるため、王族であるアルフィリアを助け出すまでは、どのような辱めにも耐え続けなければならぬ。

「アムラスう！ 随分ご無沙汰だったのに、どうして女なんか連れてるのよお」

「その娘と一緒にでもいいから、こっちの相手もしてえ」

ララノアは目の前の光景が信じられなかった。

倒れた同族に見向きもせず、奴隷娼婦たちはアムラスに近寄り、腕に抱きついて甘い声で囁いたり、乳房を押しつけたりと露骨にアピールしていた。

「やかましい！ 抱く女は俺が決める！ 今はこいつで間に合っている、邪魔だ！」

アムラスが特定の奴隷に肩入れしていると取れる発言に、奴隷娼婦たちはもちろんのこ

と、野次馬たちも大きくどよめいた。

「あの娘も闘技場に出るくらいだから、それなりに鍛えてるのよね？」

「それくらいじゃないと体が保たないくらい激しいのかしら……ゴクリッ」

奴隷娼婦たちは、女としてララノアに劣っているとは考えていないが、娼婦と剣闘士の体力の差に思い至り、色めき立つ。

「こいつは俺が捕まえた都市外のエルフだ。妄想癖があつてな、エルフを人間から解放すると息巻いていたぞ！ で、マダムやこの俺に楯突いてこのざまだ」

這い蹲るララノアを嘲笑するアムラス。対してそれを耳にした野次馬——特にエルフたちは目を見開いて表情を強張らせていた。

「マダムに、楯突いた……？」

それがどれほど愚かな行為であるか、奴隷娼婦として生きるエルフなら、どんなに幼い者でも理解していた。

「正確には俺に襲いかかったから、返り討ちにしてやったんだがな。それでただ処分してもつまらないから、闘技場へ回されたんだよ。まだ反抗的ところが残ってるが、それを矯正してやるのも、案外悪くなくてなあ！」

「げうっ!?」

業を煮やしたアムラスによってリードを強く引かれたララノアは、急に氣道が締まったことよって潰れたカエルのように呻きながら、無理矢理立ち上がらされた。

「で、お前らはコレをどう思う？」

アムラスに尋ねられた野次馬たちはざわめき、土に塗れた裸身に視線が注がれる。

「くっ、ううう……っ」

己の不甲斐なさに唇を噛んだ。

本来ならば、騎士であった自分が国を守れていれば、彼女たちが奴隷娼婦に墮とされることはなかったのだ。

ララノアは申し訳なく思う一方で、こんな無力な自分を見られたくないと、同胞たちが顔を背けてくれることを願ってしまった。

同族であれば、自分の無念を理解してくれていると――

「なにそれ、バカじゃないの？」

アムラスに寄り添っていた内の一人から、冷淡な声があがった。

「……えっ!？」

ララノアは、彼女が何を言っているのか理解できなかった。

「森の中でココソコソと暮らすしか能がないくせに、相変わらず無駄に潔癖でプライドだけは

一丁前なんだねえ。あたしらが不幸だって勝手に決めつけて、何様だってんだい！」

「助けてやるっていう上から目線も気に入らないわ！」

「でもアムラスに躰けられるのは、ちよつと羨ましいかもお」

徐々に同調の声があがり始め、ララノアを囲む野次馬からは嘲笑と罵倒しか聞こえてこない。しかもその大半が人間ではなく、エルフという事実には愕然とする。

「ど、どうして……!?!」

彼女たちの言葉が信じられなかった。

王族を救い、国の再興という目的が根底から揺らぎつつあった。

先日の闘技場での一件で、諦めている同族がいることも理解はしていた。

だがしかし、それは極一部の者だけだと考えていた。

ララノアは肩を震わせながら、侮蔑の視線を向けてくる奴隷娼婦たちを目の当たりにする。

「そんな、バカな……私は、皆を助けるために、アルフィリア様を……」

「誰も頼んでないわよ、そんなこと。外のエルフって、独りよがりの馬鹿ばかりなの？」

「よそから来て虎の尾を踏むようなこととして、私たちを巻きこまないでっ！」

虎の尾とは、無論この都市のエルフを纏めているシャウアのことだ。

罵声と同時に、ララノアへ石が投げつけられた。

「いぎっ!?　ぐっ、うう……っ」

額に鋭い衝撃が走り、仰け反りそうになった。

石が飛んできた方向へ顔を向ければ、そこにいたのは百歳前後と見られる幼いエルフだったが、その瞳には怒りと怯えが見て取れた。

怒りは当然ララノアに対するものだが、その瞳はララノアを見ているようで見えていなかった。彼女は、ララノアが余計なことをしてシャウアの怒りを買い、それが飛び火することを恐れているのだ。

理解の範疇を逸脱した光景に、頭の中が真っ白になるララノア。切れた額から紅い雫が溢れて滴ってくるも、混乱してそれどころではなかった。

「だそうだが?　誇り高いエルフは今を生きているんだよ。カビ臭い旧世代の王族なんて遺物を崇めるお前が理解できんとさ!」

アムラスは容赦なく現実を突きつけてくる。

かつて平和だった頃の東の森の国を知っている者も、残忍な人間を恐れて同調したフリをしている者もいるだろう。

いると信じたかったが、それは圧倒的に少数派だとも理解してしまった。

「うっ、くうう……っ！」

「おい、まだ目的の区画じゃないんだ。そろそろ行くぞ、豚！」

奴隷娼婦たちは残念がるが、アムラスはかまわず歩き出し、リードに繋がれたララノアを引っ張って歩き出した。

今は亡き祖国も、王族の方々を救い出すことができれば再興も夢ではないと信じて、ララノアは今まで生きてきた。

しかし、助けたいと願っていた同胞から返ってきたのは、明確な拒絶だった。

信じていたものがひび割れていく音が聞こえ、堪えきれなくなつて涙が溢れ出した。それから野次馬の中をどうやって進んでいったのか、ララノアは覚えていなかった。

「こんなところで、今度はいったい何をさせるつもりだ……」

「ふんっ、わかっているくせに聞くな」

アムラスに一蹴されると、ララノアは拳を強く握って顔を伏せる。

ここは富裕層が多く住む区画で、広場の中央に設置されている噴水の前まで歩いたところでアムラスが立ち止まった。

娼婦街とは異なり、往來を歩いているのはエルフよりも圧倒的に人間が多く、奴隷にしか

見えないララノアの姿に眉を顰める者も見受けられたが、彼らはリードを握っているのがアムラスだと気づいた途端、慌てて顔を逸らして離れていった。

(いったい、どこで間違えてしまったのだろうか……?)

もはや、この一糸纏わぬ姿に注がれる無数の邪な視線も、今のララノアには大した問題ではなかった。

先の同族による明確な拒絶から立ち直れず、この状況下においても半ば上の空であった。改めて、絶望的な気分を駆られていた。

その一方で、何も考えたくない、今だけでも快樂に逃げてしまいたいとも思う。

「随分と集まったな」

さすがに娼婦たちとは違い、擦り寄ってくる者こそいないが、往来していた大半の人間は足を止めてアムラスとララノアを注視していた。

その中で露骨に驚いているのが、ララノアを買うつもりでいた者だろうと予測する。

案の定、身分や金の力を借りなければ異性とは縁遠い容姿をしているが、あんな現実に直面するくらいなら、いつそのこと買われていたほうが楽だったかもしれない。

一時の感情に流されてはならないと頭では理解しているが、疲弊した心がそれを受け止めきれないでいる。

(私は、負けるわけにはいかないというのに……)

シャウアとの賭けに負ければ、解放軍を匿っている北の森の国へ人間が攻め入る口実となってしまう。彼の国まで、東の森の国と同じ運命を辿らせるわけにはいかないため、どのような事態に陥ろうともララノアに負けることは許されないのだ。

「おい、この俺の横でいつまで辛気臭い顔をしているつもりだ？」

思考の海に漂っていると、気配もなく背後に立ったアムラスによって、突然ムニユツと尻肉をわしづかみにされた。

指を食いこませ、抓るように揉みしだいてくる。

敵が肌に触れているなど屈辱以外の何物でもないが、認めたくない現実に打ちひしがれ、己の存在意義を見失いかけているララノアにとっては、外部からの直接的な刺激はつらい感情から意識を逸らさせてくれる唯一の手段であり、不本意ながらも甘い刺激に期待してしまう。

「……わかっている。不本意だが、今は貴様の奴隷だからな」

現実逃避のためとはいえ、躊躇なくそんなことが言えた自分に驚いた。

「不本意、だど？」

「私は、貴様に屈服したつもりはない。これは、シャウアの提案で仕方なくだ……」

「ククツ……アイツをダシにして、お前が快樂を貪りたいだけののように聞こえるんだが？」
「なにを、バカなっ……んっ、ふう……」

尻肉を乱暴に掴みながら、内心を見透かしたように呟くアムラス。

「そう言うわりには、ケツを揉まれただけで敏感に反応してるぞ？ まあ、俺にはどっちでもかまわんがな……どのみち奴隷として、誰にでも腰を振る奴隷に躑けてやるつもりだからな」

ニヤツと冷酷に笑うと、あっさり臀部から手を放した。

（こんな往来で堂々と奴隷宣言をされて、ろくに言い返すこともできないなんて、私の百七十年はなんだったのだ……っ）

しかしそんな感情とは裏腹に、全身の血管が戦慄いて、カツと熱く火照っていた。

「じゃあさっそく、俺のチ×ポをしゃぶれ」

「……っ」

予想はしていても、いきなり命令されて表情が強張った。

「犬のチンチンのポーズで俺のチ×ポからザーメンを搾り出して、残らず飲み干す卑しい姿を集まったギャラリーは期待してるぞ」

「私は人間を喜ばせるつもりは、ないっ……」

「ハッ、観衆に囲まれながら処女喪失を果たした挙句にイキ狂ったお前が言うな。今さら何を躊躇う？ 助けを必要としていない同族まで助けねばならんのだろうか？」

「——っ！ しゃぶれば、いいのだな……貴様の、チ×ポを……」

アムラスがわざと煽っているとわかっていても、先の光景を思い出すたびに身が竦む。しかしララノアは止まるわけにはいかない。シャウアと決着をつけてアルフィリアを救出しなければ、人間の魔の手が北の森の国まで伸びることになる。

ララノアが感じている恥辱など、それと比べるべくもない。

むしろ娼婦に堕ちた同胞たちを救うことのできない己の不甲斐なさに対する罰だとすれば、この程度は安いものだろう。彼女たちに関してはララノアに非があるわけではないが、そう思うと自身の置かれている状況も受け入れられた。

屈辱的ではあるが、大人しくアムラスの正面で膝を落とした。

「ほう、珍しく物分りがいいじゃないか。ついでに足をめいっぱい開いて、お前の大嫌いな人間どもに見せつけてやれ」

裸なうえに、大股開きになることを強要される。陰毛に覆われた割れ目がうつすらと開き、サーモンピンクの襞がわずかに顔を覗かせる。

（なんて惨めなんだ……）

犬のポーズではあるが、むしろ放尿をする格好にしか見えない。

しかもいつもの闘技場よりも野次馬との距離が近く、一人一人の表情まではつきりと見渡すことができた。

「おい、とつととチ×ポを引つ張り出して啜えこめ」

アムラスはララノアの顔へ股間を近づけて急かしてくる。

「わ、わかつている……っ」

目の前の腰布の隙間に手を潜りこませ、焼けるように熱い肉の塊を握って外へ引つ張り出した。

しかしまだ半勃ちの状態で、これまでの圧倒的な存在感に対してまだ弱々しい。

「しつかり勃たせてみる」

「あ、ああ……っ」

まだ柔らかさを感じるグロテスクな肉の棒。

牡特有の膣えたような生臭さが鼻腔に浸透してくる。

(なんと禍々しい……こんなものが、私の純潔をつ)

以前犯された時は恥辱に悶えるばかりで、間近でじっくりと目の当たりにしたのはこれが初めてだった。

強烈な臭いと醜悪な威容に息を呑む。嫌悪感さえ抱いているはずなのに、ララノアは視線を外すことができなかつた。

「どうした、奴隷の分際で主人を焦らすつもりか？」

「わかっていると、言つたはずだ……んっ、んろっ」

顔を顰めながら、ゆっくりと亀頭へ舌を伸ばし、チロチロと舌先で撫でた。

「好きなようにしやぶれ。多少は小便がこびりついているかもしれんが、問題ないだろう？」

「うっ……わざわざ口にする必要はないだろう……ペろ、れろれろっ」

言われなければ気づかない程度に先端付近だけ塩味や苦味が濃く、余計な一言のおかげで嘔吐感がこみ上げてきたが、どうにか堪えて亀頭へ満遍なく唾液を塗していく。

不快な味を唾液で流しこみ、これは必要な行為だと自分に言い聞かせる。

「チツ、悪くはないが物足らん。経験不足だとしても、くだらんプライドは捨てる。舌使いに自信がないのなら、口の中へ啜えこんで吸い上げろ」

（啜えさせられるのではなく、まさか自らチ×ポを啜えることになるとは……）

一瞬躊躇したものの、大きく唇を開いて亀頭を口内へ迎え入れ、舌を這わせて吸い立てる。噎せるような牡の臭気が喉を通って、肺へと染みこんでくる。

不快感を呑みこみながらしやぶっていくと、やがて中途半端に膨らんでいた海綿体が充血し、徐々に肥大化していく。間もなくして表面にゴツゴツとした血管が浮き上がり、鋼の如く硬さを増していた。

口内で逞しくなった肉棒を感じていると、嫌悪しつつも、形容し難い感情が胸中にこみ上げてくるのを感じてしまう。

「娼婦どもに石を投げられて意気消沈していたが、チ×ポを啜えて気分が昂揚してきたようだな。エルフの誇りだなんだとほざいても、所詮は牝だな。最初からチ×ポのことだけを考えていればいいものを」

「んじゅ……んぐつ、これは、必要だからしているだけで……くつ、んつ、ずずつ」
確かに快樂に逃げたいという感情がないと言えば嘘になるが、屈するつもりもない。

必死に睨み返すが、ペニスを啜えて大口を開けた状態では間抜け以外の何者でもなかった。

「ハハハッ！ 物は言いようだな、だったらもつと気合を入れろ！ そのまま喉の奥まで啜えろ、舌を絡めながら前後に抽送して俺を楽しませろ！」

命じられるままに、口腔粘膜に亀頭を擦りつけるように頭を前後に振り始め、塗した唾液をわざと下品な音を立てて啜っていく。

「んぐっ、んぐっ、じゅぶぶっ……んじゅ、じゅるるっ！」

フェラチオを披露するララノアを、周囲の野次馬たちは興奮気味に眺めていた。

娼婦街から離れた区画の広場ということもあり、困惑する住民の声も少くないが、それに混じって『あのデカチンを口いっぱい頬張って……』『わざとこっちに聞こえるようにしてやがる』などと食い入るようにつめながら、ズボンのポケットに手を入れて、膨らんだ股間をモゾモゾと弄っているのが見えた。

「今、どんな気分だ？ お前のフェラチオに興奮した連中は、俺を自分に置き換えてシコツてるぞ」

多少は奴隷らしくなったと言わんばかりに、アムラスは見下ろしていた。

「ちゅ、ちゅぶっ……う、恥ずかしいに、決まっている……んれろっ、ちゅ、んう」

負けじと上目遣いに睨み返すが、アムラスは笑みを深めるばかりだった。

「その羞恥心さえ心地いいのではないか？」

「何を、根拠に……っ」

「発情して肌が真っ赤に染まっているが？ それに触れてもいないのに乳首を勃起させてるのは誰だ？」

ララノア自身、指摘されるまで気づかなかった。

意識するようになると、否応なく自覚させられてしまう。

（人間たちの前でチ×ポを啜えさせられているというのに……屈辱であるはずなのに、どうしてこれほど体が熱い……？ それとも本当に、見られているからこれほど興奮しているというのか!?)

自分でもわからないまま、ペニスの熱に当てられた子宮が疼きを増して、どんどん昂揚していく。

裏筋から根元まで、唾液をたっぷりと含んだ舌を這わせる。口内でピクピクと肉棒が脈打つと、悦びを表現するように膣奥が潤み、滲み出した淫液が股間を濡らしていた。

「ずぶぶつ、んじゅ、んむつ……ぐむう、んふう」

亀頭が喉奥にぶつかってはえずきそうになるものの、唇をペニスに密着させたままひたすら舐めては吸引する。

「少しずつ勢いが出てきたな。俺のチ×ポはそんなに美味いか？」

「んろお……お、そんなわけ、あるか……つ、んちゅ、ちゅ、んんう」

「ある意味尊敬するな。啜えたままよくもそんなことを……だが次第に病みつきになる。それこそ毎日チ×ポをしゃぶらないと気がふれるくらいにな」

「んくつ……んう、ありえないな……れろつ、ちゅ、あむつ……ちゅずずずつ！」

否定の言葉を口にしながらも、ララノアは恥辱と劣情に瞳を潤ませていた。下品な音を響かせながら、唇をペニスの表面に滑らせて出し入れさせる。

少し前の自分であれば絶対にありえなかったはずなのに、白昼の広場で強いられる淫らな行為に倒錯し、理性や思考が削がれていく。

ペニスに付着していた唾液が垂れ、糸を引いて滴っていった。

そして眺めている彼らもズボンの中で指を速め、呼吸を乱し始めていた。

(見られている……人間たちに、いやらしくチ×ポをしゃぶっている姿を……！)

これまでも散々無様な姿を晒してきたが、自らこうなることを選択しただけで、肉体に生じる感覚がここまで変わるのかと驚きを隠せない。

その間も喉奥まで啜えこんでは吸い立ては舐り回し、頭を引いて表面を撫でては、間髪を容れずに喉奥まで押しこんでいく。

「一つ尋ねるが、精液は好きか？」

「んじゅ、んじゅ、じゅぱっ……そ、そんなわけ、ないっ……んう、んぐっ」

なぜそんなわかりきったことを聞くのかと目を吊り上げるが、そんなものは考えるまでもなかった。

——射精が近いのだ。

ララノアは身を強張らせる。闘技場で何度か口にさせられたが、自らの意思で飲みたいと思つたことは一度もなかつた。

好いた男のものでもなければ、嘔吐を覚えるほどおぞましい。しかしララノアにはどうしようもないのだ。

顔をアムラスの下腹部に押しつけて爆発寸前の肉棒を奥まで咥えこみ、思いきり吸引する。

「やればできるじゃないかつ、出すぞ！ 一滴残らず飲み干せ！」

氣道を塞ぐほどに長大なペニスが一際大きく膨れ上がり、命令すると同時に弾けた。

「んぶううっ!? んごっ、お、おっ……んっ、んぐっ、んぐぐう！」

喉にビチャビチャを打ちつけられるのを感じ、えずきそうになるのを無理矢理抑えこみながら、白濁液を胃へ落としこんでいく。

濃厚で煮え滾つたように熱いそれは、喉にこびりついてゆっくりと下へ垂れていくのが感じられた。

一気に大量の精液を注がれたため、口内の容量を超えた分は唇の隙間から、ねっとりとい糸を引いてこぼれていた。

「どうだ？ 俺の精液の味は？」

「あぶつ、んっ……はあ、はあ……く、臭くて……気持ち悪いだけ……はあ、はあ」
精液を飲み下した後、顔を引いて気道を確保するとアムラスを睨む。

「落第点だな。ご主人様のザーメンを飲ませてもらったんだ、そこは『ありがとうございまして』だ。もう一度やり直すか？」

「い、いえ……うう、たくさんザーメンを飲ませてくれて……あ、ありがとうございませ……す……」

言われるがままに、自身を貶める言葉を口にして土下座するララノア。

「ふん、無駄に意地を張らなかつただけ及第点といったところか」

涎と精液で口周りを白濁に汚したララノアを踏みつけながら、アムラスがほくそ笑んだ。

「じゃあ、これで終わ——」

「バカかお前は！ まだ準備運動が終わつただけだろう？ 宴うたげはこれからだ、呆うたげけている暇

はないぞ！」



アムラスは勝手に終わった気になっていたララノアの腕を掴んで無理矢理立たせ、噴水の縁へ移動して腰を下ろした。

「そ、そんなっ……!?!」

ろくに抵抗もできないまま、アムラスの膝の上に乗せられるララノア。

脚を広げられ、腰を下ろした衝撃で二つのたわわな乳房がたぶんつと揺れた。

(また見られながら、犯されるのか……!)

野次馬の好奇な視線が、曝け出されている股間や乳房に絡みついてくる。

体内を荒れ狂う羞恥に苛まれ、胸が高鳴り、体の火照りに応じて呼吸も荒くなってきた。

さらには、今し方射精したばかりのペニスの先端を淫裂へ宛がってくる。

「感謝しろよ? 同族に理解されなかった傷心の奴隷のマ×コを、チ×ポでしっかりと搔き

回してやるんだからな。射精させた褒美だ、何も考えずにしっかりと味わえ!」

「だ、誰がっ……!」

反射的に立ち上がって逃れようとするが、アムラスによつて太腿を押さえられて身動きが
できなくなってしまった。

「ククツ、あまり心にもないことばかり言うな。いずれ自分の本心さえわからなくなるぞ?」

「心にもない、こと……?」

ララノアの問いに、アムラスは彼女の股間を指差した。

「ピンク色の花卉が小さく口を開けているが? しかもヒクヒクと卑猥に蠢いて、まるで俺のチ×ポが一秒でも早く欲しいと訴えているようだぞ」

「わ、私はそんなつもりでは……っ」

肉体的な反応が現れていた事実を目の当たりにすると、強く反論できなかつた。

快樂はつらい感情を和らげてくれる。それがたとえエルフの誇りをないがし蔑ろにするものであつたとしても、むしろ倒錯感が増して子宮が疼いてしまうのだ。

「俺のチ×ポをしゃぶってこうなったんだろうが。いい加減自分の性癖に素直になれ。チ×ポが欲しければ、俺に向かつて無様に頭を下げ、ねだれ!」

「うっ、あ……そ、そのようなこと……」

それが当然なのだ、アムラスの自信に満ちて一点の曇りもない言葉をぶつけられると、内に燻っている昂ぶりと相まってその気になってしまいそうだった。

「ハッ、どうやらマ×コがお前の本心を代弁しているようだな。いい穴じゃないか」

股間の割れ目に触れているペニスへ、膣口から溢れた蜜がアムラスの龟头にべつとりと絡

みついていた。

「うく、う……これは……」

もはや返す言葉が思いつかなかった。

眉を吊り上げて睨みつけても、内心を見透かしているアムラスには通用しない。

「チ×ポが欲しいのなら言え。同族に見向きもされなかったつらさを忘れさせてほしいと……本当はチ×ポが欲しくてたまらないのだろうか？」

汚らわしい人間の言葉に耳を傾けては駄目だと、以前のララノアであれば発情していたとしても、拒絶をしていたことだろう。しかし心身共に疲弊してしまった今、アムラスの言葉はただただ甘く浸透していき、抗うことができなかった。

「う、お願い……アムラスの、チ×ポを……わ、私に——」

「さつきも言ったはずだ。言葉遣いになつていないと」

「……お、お願い、します……あなたの、ご主人様のチ×ポで……私を、犯してください……うう」

「いいだろう、合格にしてやる。だがその前に……おい、お前たち！ 見たいのなら、もつと近くに來い！」

声をかけられた野次馬は驚いて顔を見合わせていたが、アムラスを無視するわけにもいか

ず、一人また一人と手を伸ばせば届きそうな距離でララノアを取り囲んだ。

「なっ……何を!？」

「そんなに怯えるな。闘技場ではもつと大勢の前でアへ顔を晒しただろうが……お前たちも、ここならよく見えるだろう？ 俺の玩具に触ることは許さんが、間近で存分にシコらせてやる」

「し、シコ——えええっ!？」

ララノアは自分を取り囲む野次馬の姿に身を強張らせ、驚愕の声を張り上げた。

急な呼びかけに困惑していた男たちも、アムラスが自分の行為を見せつけるだけではない、奴隷の羞恥を煽るための舞台装置的な要員であると理解し、態度を軟化させる。言いつけさえ守れば、特等席で鑑賞できるのだ。

するとさっそく、我慢できなくなった数名の男が、勃起しきったペニスを取り出してララノアに見せつけてきた。

「どいつもこいつも、お前の裸に興奮してるぞ。よかったな、冷たい同族とは違ってこいつらはお前が俺のチ×ポでアへるのを見たくて見たくて堪らないんだと」

「や、やめろお……き、貴様らっ……チ×ポを見せるなあ……!」

「喚くな。少なくともお前を必要としている連中だ、少しはサービスしてやれ」

アムラスはそう言うと、ララノアの腕を取って後頭部で手を組ませて胸を張らせ、淫らな肉体が周囲によく見えるようにポーズを取らせる。

男たちは薄ら笑みを浮かべて、ララノアの肢体に釘付けになりながら自身のペニスをしごき始めた。

「うっ、あ……チ×ポに囲まれて……っ」

「今さらだろう？ お前が犯されるたびに、その場でオナツていたぞ！ だが安心しろ。これから俺のチ×ポで、目の前のチ×ポなんか気にならなくなるほどアへらせてやる！」

アムラスはそそり立っていた肉棒の位置を整えると、ララノアの淫裂へと一気にペニスを押しこんだ。

「ひぐっ!? あはああんっ！ は、入ってきたあ、あっ……チ×ポが一気に奥までえ……ん
いいいいいっ!!」

膣口を容易く押し広げ、熱を帯びた異物が一息で根元まで捻じこまれた。

ビクンツと背中を反らせ、ララノアはワナワナと唇を震わせて艶やかな嬌声を張り上げた。

口ではどれだけ否定しようと、淫らな汁を垂れ流している膣口は、何一つ抵抗なく肉棒を受け入れ、膣穴を押し広げた。

まだセックスを覚えてまだそれほど経っていないのに、濡れそぼった粘膜は充分に解れきっており、瞬く間に膣肉がこじ開けられて強い圧迫感を覚えると収縮し、羞恥よりもペニスに思考を持つていかれる。

「いい具合に締めつけてくれるじゃないか、ああ？」

「ああ、おっ……一瞬で、奥まで届いてっ……ああああっ！」

嬌声と共に、押し出された大量の淫液が結合部の隙間から溢れ出した。

「以前も思ったが、いい肉穴だ。まるで俺のためにあつらえたように、奥行きが俺のチ×ポにしつくり馴染むぞ」

アムラスは愉快に笑うと、早々に腰を動かし始めた。

「ふああっ、あひい……っ！いきなり、チ×ポを奥までえ……んくううっ！」

最初からズンズンと容赦なく突かれ、子宮を押し上げられる。そのうえ、ただ前後に腰を振るだけでなく、時折“の”の字を書くようにくねらせて摩擦に変化を加えてくる。

（ああっ、チ×ポに囲まれながら犯されるなんて……恥ずかしい場所もすべて見られているというのに……私は、私はあ……！）

「ハハッ、お前こそ動いた途端にグイグイ締めつけてくるじゃないか。つい先日まで処女だったくせに、大した淫乱ぶりだなあ」

「んお、おっ、おくううっ！　わ、私が、淫乱……だどっ、お、んう……何を、バカなあ——あああああっ！」

ストロークを抑えて膣口周辺を執拗に擦ってくるかと思えば、意識がそこへ傾いた頃に膣奥めがけて捻じこんでくる。

子宮が圧迫される衝撃に息が詰まり、突き上げられるたびに衝撃で乳房が弾み、激しく波打って揺れ乱れる。

「こんな目の前でとか、全部丸見えでエロすぎだろ！」

「アムラスのお気に入りじゃ手を出せねえよお！」

闘技場では、最前列でも参加者から近寄らない限り一定の距離があるため、犯されている姿を漠然と眺めているだけだが、今は手を伸ばせば届くほど近いことから、チ×ポに広げられた膣穴、弾む乳首の軌道などが、周囲の男たちの視界に鮮明に飛びこんでくる。

彼らにとって奴隷娼婦は、金さえ積みれば誰にでも股を開く淫乱程度の認識だが、目の前のエルフを犯しているのは圧倒的強者であるアムラス。周囲の人間は身分こそ上だが、生物としての圧倒的な格の違いから萎縮しており、淫らで脂の乗った牝を前にしても、ひたすら自らのペニスをしごくことしかできず、生殺しの状態に近かった。

「よかったな！　こいつらにはお前が堪らなくいい女に見えるんだときさ！」

「んあ、あつ、ああんっ！ よ、悦べるかあ……私で、自慰など、おくう！ や、やめえ……はああんっ！」

視界に広がるおぞましい光景。

勃起しきったペニスを握り、張り詰めた亀頭をララノアに向けてオナニーに興じる男たち。不快と羞恥に身を焼きながらも、自然と肢体は淫らにくねる。さらには蕩けた腔内を出入りする肉棒を締め上げてしまう。

「見られて感じているから、チ×ポを締めているんだろうが！ 口調も戻っているな……まだ躰が足らんか」

「あひい!? ひああつ、あつ、ああんっ！」

アムラスはララノアの太腿を抱えると体を軽く持ち上げ、落とすと同時に腰を突き上げて亀頭を子宮へ押しこむ。体重も相まって大切な場所まで衝撃が響いてくる。

硬い肉棒で粘膜を擦られるたび、連動するように唇が開いて淫声が漏れた。

「すげえな、突くたびにマ×コから汁がドピュドピュ出てるぞ！」

「見られてよがるとか、本物の変態だな！」

嘲笑し、好き勝手に罵る男たちに対して憤りを感じるが、目の前に突き出され、懸命にしているペニスを見ていると、それよりも強く子宮が疼いてしまう。数日前のララノアか

らは想像もできない事態である。否定しなければと思いつつも、昂揚とともに感度も増し、アムラスの抽送がより甘美なものに感じられた。

「ひぐつ、あああつ！　ち、違つ……私は、変態なんかじゃ……あんんつ！」

「意地を張るな！　気持ちよくなりたいから自分で腰を振っているんだろう？」

「んいい……！　こ、これは私のせいじゃ……んおおおつ！」

アムラスに指摘されるまで気づかなかった。

膣内を蹂躪される衝撃で髪を振り乱すだけでなく、自らも腰をくねらせて彼のペニスを貪っていた。

多数の男根に囲まれて犯されていながら、ララノアの唇からは甘く艶やかな喘ぎ声しか聞こえてこなかった。

「見られながらのセックスは、そんなに気持ちいいか？」

違つと叫びたいが、周囲の欲情してギラついた視線を意識すると、うっとりとするほど感じてしまう。子宮まで突き上げられては、背筋がゾクゾクと震えた。

快感が脳髓まで響いてくる。

恥辱でしかないはずなのに、歓喜に肌が震えてしまう。

「あぎいいっ！　ぎ、気持ちよくなつ……おぐつ、んあああつ！　これ以上、子宮を突か

れたらあああああつ!!」

官能のうねりが、子宮へどんどん浸透していく。アムラスの動きに合わせて結合部を掻き混ぜ、膣粘膜へ擦り当てるように腰がグラインドする。それは精液を求めるかのように、グチュグチュと粘着音を奏でて往復するペニスに纏わりついてしごきあげていた。

言葉とは裏腹に肉体は本心を曝け出し、アムラスは笑みを深める。

「口ではなんとでも言えるが、ここまで上半身と下半身で感情が分かれるなんて、なかなかできることではないぞ!」

さらにララノアを追い立てるため、抽送を加速させる。

震える体に楔を打つように、子宮に狙いを定めて腰を突きこんでくる。

「おおんっ! んぐっ、もう少し、ゆっくりい……いひっ! ひああ、あつ、やめえ……頭、おかしくなりゆうう!!」

激しい上下運動に抗えず、豊満な乳房を大きく躍らせ、口から涎を撒き散らしながら喘ぐ。

「また声が一段とエロくなった!」

「奴隷娼婦の演技だってここまでじゃねえぞ」

「ぎやははっ、そりやお前が下手なだけだろ!」

ララノアの痴態に周囲が沸く。

彼らの劣情も高まるに連れて、しごくペニスの先端から我慢汁がこぼれていく。

「何を物欲しそうに見ている。俺だけのじゃ飽き足らず、どこぞの馬の骨とも知れん男のザーメンを求めめるのか、エルフの誇りはどうした！」

「ふぎいいっ!?! い、いらなひいい！ ザーメンなんて、おっ、おほおおっ、もう突くにやああ！ あっ、あっ、オマメコ、おかしくにやるうううっ!!」

誇りを貶められてかすかに理性を取り戻すものの、もはや手遅れだった。

ザーメンと聞いて、本能で牡を求めてしまう。

アムラスの逞しすぎる肉棒によって狂おしいまでに情動が滾り、子宮が精を渴望していた。快感が思考を侵食し、膣粘膜が忙しなく蠢く。

「遠慮するな！ 今回もお前の子宮に一滴残らず注ぎこんでやる！ お前らも見ておけ、誇り高いエルフとやらが孕むところをなあ！」

「やつ、やめりよおお！ おっ、おんいいっ、だ、誰がきしやまの子などおお！ みひいいっ、みりゆなああっ！ みりゆなああああっ!!」

必死に叫ぶが感じすぎるあまり呂律が回らず、一致しない言動に男たちはますます邪悪な笑みを浮かべて、淫液を垂れ流している膣穴へと視線を集中させる。

ララノアは肢体を揺すって最後の抵抗を試みるが、その動きがかえって肉棒を刺激し、膣内を蹂躪していた海綿体が一際大きく膨れた。

「ひやあああつ！ イキたくない！ イギたくにやいのひいいいっ！」

「出すぞ！ イケ！ みつともなく、無様に！ 孕みアクメを晒せ！」

懇願も虚しく、アムラスがラストスパートとばかりに腰に力をこめ、ゴリユツと子宮口を抉る強烈な一突きを放った。

次の瞬間、肉棒の昂ぶりが頂点へ達し、ドクドクと灼けるように熱く濃厚な精液が、無慈悲に子宮へと流しこまれた。

「んほおおおおっ!! おっ、おぐうう、孕みたくにやいつ、はりやみたくにやいのひいいいっ！ だっ、ダメらっ、とまりやないいいいっ！ イク、イクイグっ、イツグううううううっ!!」

逆りによって子宮を埋め尽くされ、ララノアも絶頂に達した。

海老反りに背筋がしなり、痙攣を繰り返して喜びを叫ぶ。恥も外聞もなく、ペニスに囲まれてオナニーのネタにされているというのに、瞳を裏返して開いた口から舌を突き出しながら、見るに耐えないアへ顔を披露していた。

「クハハッ！ ザーメンがそんなに嬉しいか！ 孕む瞬間がそんなに興奮するか！ 理解し

たか、これがお前だ！ チ×ポを見れば発情するでしょうもない牝豚だ！」

「ちっ、ちが——うひひひひいっ！ チ×ポ、ビクビクさしえるにやあああつ！ あおおつ、おっ、やつ、ダメええ！ お、おひっ、ひぐううううっ!!」

「連続でイッた!？」

「マジかよ！ そこらの奴隷娼婦なんか目じやないくらい、筋金入りの変態だな！」

衝動を抑えきれず、立て続けにアクメに達して悶えるララノアを、男たちは食い入るように見つめ、しごいていたペニスを大きく脈打たせていた。

「お前ら、遠慮はいらんぞ。コレは見ての通りザーメン狂いだからな、思いきりぶちまけてやれ！」

「ひひいっ!? な、なにを言っへええ……らめっ、やめりよおお！」

アムラスの言葉の意味を理解して悲鳴をあげるが、肌は紅潮したままで、だらしなく開いた口からは涎が垂れ、啞えこんだ肉棒の隙間から大量の白濁液を滴らせている。そんな淫惨な光景を目の当たりにした男たちに制止の言葉が届くはずもなく、張り詰めて震えるペニスの先端をララノアへ向けた。

「このまま出すから、全部受け止めろよ！」

「大好きなザーメンを、たくさんくれてやるう！」

「あつ、あああつ……やつ、やめええ！」

驚愕に見開かれた視界には、射精直前のペニスは何本も映っていた。

「おおつ、ザーメンを出してやるぜ！ キンタマが空になるまで搾り出すぞ！」

「お、俺もだあ！」

一人が射精を宣言すると連鎖的に広がっていき、ヒクつく鈴口から立て続けに幾筋もの白濁がララノアへと降り注いだ。

生臭く熱い粘液を断続的に浴び、嫌悪に顔を顰めながらもその肢体は電流に打たれたようにビクつき、爪先まで突つ張らせた。

「いやあああつ！ やだつ、かけるなあ！ あああつ、なんでまたきてるんだっ!? ひつ、ぎいいつ、い、イグつ……なんでまた、イツてりゆのおおおおつ!!」

ララノアは混乱を極めながらも、粘液をかけられるたびに、その肢体を戦慄させる。弄ばれていると理解しているのに、精液を浴びる悦びが子宮から全身へ溢れてくる。

「おい、ぶっかけられてイツてるぞ！」

「マジでザーメン狂いなんだな」

「ここまで変態なのもそうそういねえぞ」

「ち、ちがううううつ！ イツてにやい！ んいいいつ、イツてなんかあああ！ わ、わ

らひは変態じやにやいいいっ！　いっ、いひっ、ひああああっ!!」

懸命に否定するが、ララノアの声は裏返ったまま戻らない。

何度も首を横に振るものの、濃い精液が引つかかるほど乳首を勃起させ、汗と涎を撒き散らして何度も繰り返し上り詰めてしまう。

「ギャハハ！　これでやめてとかありえねえよ！」

男たちは白濁に塗れて生臭い惨めなララノアを嘲笑う。

「うあ、あ……ああ……」

顔に、髪に、柔肌に、精液を浴びるたびに得も言われぬ悦びに襲われたのは紛れもない事実。どれだけ否定しても、この身に生じた事実を覆らない。己の惨めさを痛感させられたララノアは、彼らの嘲笑に反論する気力も薄れていき、ビクビクと白濁に塗れた肢体を痙攣させるばかりだった。

第V章 憧れの騎士は今や×××中毒の肉穴に……

ララノアは静まり返った闘技場の控室で、苦々しげに顔を顰めていた。

先日の往来で見世物にされ、ペニスに囲まれた時の記憶が頭から離れない。

犯されたことについては、悔しいが己の置かれた状況から仕方がないと諦めている部分もあつたが、今はそのことではなかつた。

彼女の頭を占めていたのは、無数の男根。

無様によがるララノアに興奮し、男たちはしごきながら鈴口を向けていた。

それがヒクヒクと震え始めた瞬間、恐怖が湧き上がってきたと同時に、ゾクゾクと背筋を震わせたものの、決して不快感から来るものとは異なっていた。

もしかしたら期待していたのかもしれないと思うと、それが無性に腹立たしく、自分に対して怒りを感じずにはいられなかつた。

(しかも大量の精液を浴びせられただけで……この私が達してしまつたなんて！)
途方もない屈辱が全身を駆け巡り、腸が煮えくり返る思いだつた。

いつそのこと今からでもあの場にいた人間を斬り刻んで皆殺しにしたい気分だが、ララノアが抱えている目下の問題と比べれば、些事ではしかなかった。

剣闘士を相手に圧勝をしてみせたものの、ギラついている瞳には一切の余裕がなかった。なぜなら、ララノアはすでに通算で九敗を喫していた。

先の件で刻みつけられた自身の変態性に動揺するあまり、コンディションを整えるどころではなかったために敗北し、犯されては快楽に抗えず、さらに自己嫌悪に陥るのを繰り返した結果、もはや後がなくなってしまうた。

今回は辛うじて勝利をもぎ取ったものの、首の皮一枚で繋がっているも同然だった。

（アルフィリア様をお救いするためには、もう一敗も許されぬ……私が変態であろうが、今はどうでもいい！ どのような手段を用いようと、とにかく勝つことだけを考えろ！）

無意識に、ニンマリと口が三日月型に歪んでいた。

アムラス以外の剣闘士たちは奴隷身分である。

ララノアは、これまで殺しが認められている闘技場であっても、相手を殺めなかつた。それはたとえ人間であっても、同じ身分に墮とされたことに対して同情の念を抱いていたためだった。

しかしそれが、ララノアの本来の力を発揮しきれず敗北した要因であったとしたら——と、今さらになって己の甘さを嫌悪した。

これから闘う相手が誰かは知らないが、ちようどいいと思った。

このどうしようもない感情の捌け口として、そして甘さを捨てられたことを確かめさせてもらおう、と。

ララノアは瞳を細め、ゆつくりと闘技場へと足を踏み出した。

(あの女はどこまで……どこまで性根が腐っているのだっ!!)

闘技場に降り立ったララノアは額に青筋を浮かべ、絶叫したい衝動を必死に抑えこんでいた。

この場で初めて対戦相手の名が告げられ、沸き立つ観衆とは真逆に、ララノアは憤怒を滾らせずにはいられなかった。

『ア・ム・ラ・ス!』

『ア・ム・ラ・ス!』

瞬く間に場内を揺さぶるほどのコールが響き渡る。

ララノアと闘うのは、初戦以来のアムラスだったのだ。

これはシャウアがララノアを絶対に勝たせないという意思表示でもあった。ただし一方的な展開では盛り上がりには欠けるといふ主催者側の配慮として、アムラスは剣を使わないというハンデがアナウンスされた。

アムラスの勝ちを確信していた観客の中にはそれを聞いて笑い飛ばす者、オツズに悩む者など反応は様々だが、肝心のララノアは怒り心頭だった。

最初からこんなことになるかと予想はしていた。

なぜなら、シャウアにとってララノアは解放軍の情報源であり、恩情をかけて逃がす理由などどこにもないのだ。

それでも闘技場に参加した以上は、ルールに則^{のつと}って十勝を挙げることでさえできれば、たとえ彼女でも反故にすることはできない。たとえ嵌められていることを理解していたとしても、ララノアにはほんのわずかな可能性に縋る以外の方法がなかった。

（やってやる……この私がいつまでも踊らされてばかりだと思ふな！）

アムラスが徒手空拳だとしても、自力では遠く及ばないことをララノアは身を以って思い知らされた。そして彼も同様に考えているからこそ、無手というハンデを承諾したのだ。

つまり、アムラスはララノアを舐めている。獅子が兎を狩るのに全力を必要としないよう

に、油断をしているのは間違いない。勝機があるとすれば、警戒心が最も薄い初手に首や心臓などを狙うしかないだろう。それが届かなかった時は、覚悟を決める他なかった。

（叶うことなら、私がアルフィリア様をお救いしたかったが……）

シャウアやアムラスは、ララノアがアルフィリアを救出するために躍起になっているのを知っている。しかしそれは彼女だけの悲願ではなく、解放軍全員の願いである。

自分が失敗したとしても、いずれ同志の誰かが達成してくれるのであれば、それでかまわない。ララノアが最も恐れているのは、自分がアルフィリアの救出に失敗することではなく、負けて生き恥を晒した挙句に仲間の情報を敵に知られることだ。

十勝することができるのならそれに越したことはないが、現実是非情だ。

後顧の憂いを断つためにアムラスと刺し違えられれば理想的なのだが、それが困難なのはララノアにはわかっていた。

初撃を失敗した時点でララノアの負けは確定する。そうなる唯一の抵抗手段は、シャウアたちに情報を渡さないために自害する他ない。貴重な情報源を失うのだから、さぞ悔しがってくるだろう。

惜しむらくはその顔が見られないことだが、本来の任務よりも感情を優先させてしまった結果、見世物として闘わされた挙句、犯されて自分が牝であることを突きつけられたのだ。

それ以上を望むのは贅沢というものだろう。

ララノアは早くも剣を抜いて、アムラスの登場を待つ。

(より速く、より迅はやくつ、より疾はやくつ！　そしてスピーディーにつ！！)

開始と同時に全速で初撃を見舞うため、全身全霊をかけた一撃を放つために意識を集中させる。

ところが、そんな決死の覚悟を嘲笑うように、ララノアは現れたアムラスの姿に愕然とした。

そしてそんなアムラスの姿に観衆の熱気が高まり、誰かが叫んだ。

「肉鎧だあ！」

アムラスは剣どころか、一糸纏わぬ姿で現れた。

しかも奴隷のエルフを背後からペニスで貫いており、それが多少なりともアムラスの上体に重なっている。体躯の差から奴隷の足は地についておらず、膣穴に挿入された肉棒と彼女がアムラスの首に回した腕だけで体を支えていた。

確かに先の誰かの言葉通り、見方によっては肉の鎧である。

下手に攻撃を仕掛ければ、奴隷ごと斬ってしまう。まさに鎧であり人質でもあった。

ポにご奉仕い！ んひっ、あああんっ、マ×コで気持ちよくするう！ んお、おごっ、でもチ×ポが気持ちよすぎて、吾のほうがつ、感じちやうのほおっ!!」

気がふれたように喘ぎ、自身も快楽を貪りながら、一心不乱にアムラスのペニスへの奉仕に励んでいる。煌びやかな金髪と、ホルスタインの如く肥大化して垂れ下がった乳房を振り乱す彼女の顔は、悦びに満ちていた。

元は滑らかで肌理細やかだったであろう柔肌の至るところにタトウが彫られ、乳首は黒く変色し、鼻には家畜のようなリングまで装着されている。そして大きく膨れ上がった腹部にはくつきりと正中線が浮かび上がっており、ただ太っているのではなく、妊娠しているとすぐにわかった。

(ば、バカな!? そんなことがっ……だがしかし、そんな……)

ララノアは目の前の現実が受け入れられずに何度も首を振るが、最後列の観衆まで届いているであろうけたたましい嬌声が、夢でも幻でもないと訴えかけてくる。

どれだけ否定したくても、どれだけ容姿が変貌していたとしても、ララノアにとって理想そのものだった人物を見間違えられるはずがなかった。

「んいっ、子宮突き抜けるう！ チ×ポで串刺し最高おお！ 臨月マ×コ、お迎え棒で破

水するううっ!!」

聞くに堪えない淫声に、ララノアは頭がおかしくなりそうだった。

悲しみと恐怖から涙が溢れてくる。

認めたくはないが、ララノアは叫ばずにはいられなかった。

「ヴィルヘルミナさまああああああっ!!」

東の森の国において最も気高く、アルフィリアに尽くし、仕えていた騎士。

かつてアルフィリアの救出に向かい、囚われたことまでは知っていた。

しかし百七十年前に解放軍が二人の王子を救い出した時、彼女も他の王家の方々と同様に行方がわからなかった一人である。人間に囚われたエルフの末路は、ララノアも身を以って思い知らされたが、自分とは比べ物にならないほど強く、エルフの誇りを体言したような彼女であれば、きつと最後の時まで抵抗を試みたはずだと、快樂に負けるようなお方ではないと信じていた——否、そう思いたかった。

「……知り合いか？」

涙を流して声を震わせるララノアに、アムラスから尋ねてきた。

しかし、予想だにしていなかった再会にパニックを引き起こしているララノアの耳には届かない。

「ヴィルヘルミナ様っ、ヴィルヘルミナ様ああっ！ 私ですっ、かつてあなた様にお仕えしていたララノアです！ それにそのお体は!？」

それは女性には本来存在するはずのないモノ。彼女の股間にはクリトリスと呼ぶにはあまりにも長大な肉柱がそそり立っていた。

腰をくねらせるたびに、おぞましいそれがプラプラと揺れている。何かの見間違いだと必死に言い聞かせる。そして、自分が敬愛する彼女が快楽に負けるはずがないと、喉が裂けんばかりに呼びかけた。

「おほっ、ほおおんっ！ チ×ポしごくのお！ おひっ、んいいいっ！ マ×コ、バカになっちやうう——うぼお!？」

「俺は、知り合いかとお前にも聞いたつもりなんだが？」

喘ぐばかりで一向にララノアと視線すら合わせないヴィルヘルミナに対して、業を煮やしたアムラスは繋がっていた彼女を突き飛ばした。

支えを失った元騎士は無様に落下して顔をぶつけた。

「あっ、ああああっ!!」

今まで膣内を埋め尽くしていた強烈な肉棒の感触を失ったヴィルヘルミナは、玩具を取り上げられた幼子のように慌て、落ちた痛みなどなかったかのように素早く起き上がると、再

びアムラスの股間へ飛びかかった。

「……おい」

しかしすんでのところアムラスに頭を掴まれて突進を止められた。

「チ×ポ、吾のチ×ポお！ マ×コが寂しいのお！ お願いだからっ……お願いだからチ×ポで塞いでええ！ あうう、んっ、れろ、れろれろれろお……」

しきりに手を伸ばしてペニスを握ろうとするが、長身のアムラスとでは腕のリーチに差がありすぎて、どれだけでも手は虚しく空を切るばかり。ところが、それでも諦めきれないヴィルヘルミナは、無駄だと理解しているはずなのにペニスを求めるあまり、腕だけでなく必死に舌を伸ばして挿入が無理ならせめて舐めたいと、しきりにアピールしていた。

「チ×ポが欲しいなら答える。アレはお前の知り合いだと言っているが？」

「知らないっ！ あんなの知らないからあ！ チ×ポお！ もっとチ×ポおっ！」

改めてアムラスが尋ねるも、ヴィルヘルミナはララノアに見向きもしなかった。

「ヴィルヘルミナ様!? 誇り高く気高かったあなたが、いったいどうしてしまわれたのですか!?!」

「黙れ小娘え！ チ×ポがないお前なんか知らないと言っている！ チ×ポの邪魔をするなあ!」

「あ？ 何を言ってるんだ？ コレはお前が襲撃してきた家畜小屋の中であの玩具の近くに繋がっていたぞ？ ついでに言えば、肉鎧を提案してきたのはウルスラだが？」

「……えっ？」

アムラスの言葉に唾然とするララノア。

続けて告げられた事実には思考の処理が追いつかない。とりあえず後者は後回しにして当時の記憶を呼び起こしてみるが、アムラスに貫かれて豚のように喘ぐアルフィリアの姿しか思い出せなかった。

「本当に気づいてなかったのか。お前もコレのことを言えないんじゃないか？」

「そ、それは……」

返す言葉がなかった。

アルフィリア祭が衝撃的すぎて、犯されていたアルフィリアしか目に入っていなかったために、同じ家畜小屋にいたというヴィルヘルミナに気づけなかった。

「んで、いい加減そろそろいいか？ 観客どもはこの家畜の貪欲っぷりを面白がってるが、とつくに試合は始まってるとるんだが？」

「う、あ……」

アムラスの言う通り、とつくに開始の銅鑼は鳴らされていた。

アルフィリアだけでなく、変わり果てた姿となったヴィルヘルミナにショックを隠しきれないララノアは、呆然とへたりこんだまま動けなかった。

これで負けてしまえば、ララノアは解放軍の情報を話さなければならなくなる。しかしこんな状態では当初の狙いであった全身全霊をかけた一撃など放てるはずもない。もはやララノアに残された手段は、仲間を売ってしまいう前に自らの口を封じること。

ところが想像もしていなかった事態の連続に思考すらままならず、目の前に落ちている剣を拾うことさえできなかつた。

「いつまで呆けている？ 動かなければ俺が何もしないとも思っているのか？」

ヴィルヘルミナが跪いて正面からペニスをしゃぶっていてもお構いなしに、アムラスはララノアへ近づいていく。突然前進した肉棒で喉を突かれて軽くえぞいたものの、好物の男根を放すまいと、啞えたまま中腰になると彼の歩調に合わせてがに股で後退しながらフェラチオを続けていた。

そのあまりに無様で滑稽な姿に観衆から笑いが起こる中、ついにアムラスがララノアの目の前に立った。

依然としてペニスに食らいつつしているヴィルヘルミナは、ララノアなど意に介することなく背を向けたまま、散々弄ばれたであろう尻穴はだらしなく広がっており、ダラダラと涎を

垂らす割れ目は肥大化した陰唇が飛び出してた。

「いつ……あああつ!!」

アムラスは咄嗟に顔を背けようとしたララノアの髪を無造作に掴むと、引っ張り上げて無理矢理立たせた。

「あれだけエルフの誇りがどうのとほざいていたが、呆気ない幕切れだったな。これで終わりだ。お前も、解放軍も」

(ダメだ……闘わなければ、私のせいで皆が……)

北の森の国が、祖国のように戦火に包まれ、蹂躪される未来を幻視する。それだけは回避しなければならないと、頭では理解しているはずなのに、ペニスに狂乱する憧れの騎士の姿を目の当たりにしたララノアは、自分がなんのために闘っていたのかわからなくなっていた。

「安心しろ。お前は特別待遇にしてやる。お前のおかげで北の森の国へ侵攻する口実ができるんだ。新しい奴隷も大量なうえ、戦場で手柄を立てれば俺の地位はさらに高く磐石なものになるんだからなあ!」

アムラスは自身の野望を口にしながら、気分を昂揚させて笑みを浮かべ、ララノアが抱いていたエルフの解放という夢に幕を下ろすために、容赦なく拳を振り抜いた。

「げぼおおっ!!」

腹部に拳がめりこみ、ララノアは胃液を飛び散らせながら宙を舞い、地面に落ちて数周転がって止まった。

落下した際に頭をぶつけて視界が歪む。衝撃で息が詰まるが昏倒するほどではない。しかし目の前で同族が殴り飛ばされたというのに、ヴィルヘルミナは視線一つ動かさず、夢中でペニスへ奉仕を続けていた。

(私のこの百七十年は、いったいなんだっただろうか……)

剣は手から離れ、もはや万策尽きたララノアはすべてを諦めてしまい、起き上がる気力すら残っていないかった。

決着の銅鑼が鳴り、観衆たちはあまりにも呆気ない決着に困惑していた。

アムラスの肉鎧にされたヴィルヘルミナの無様さは笑いを誘ったが、肝心のララノアとは剣を交えることもなく、口論の末の一撃で終わってしまったのだ。

盛り上がり欠ける結果となったが、すでに観衆の関心はこれから行われる凌辱ショーに向けられていた。

ところが、ここでアムラスが予想外の行動に出た。

ペニスに食らいついていたヴィルヘルミナの首を掴み上げると、ララノアの近くへ放り、

観衆を見渡して宣言した。

「今日の俺はとにかく気分がいい！　そこで特別に、今回はこの二匹の家畜を貴様らの好きにしてかまわんぞ！」

唐突な出来事に、喧騒に包まれていた闘技場がほんの数瞬ではあるが静まり返り、その意味を理解した途端歓声が地鳴りとなつて響き渡つた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

興奮を抑えられない観客が、我先にと闘技場へ飛び降り、ララノアとヴィルヘルミナへと群がっていく。周囲はあつという間に瞳をギラつかせた男たちで埋め尽くされ、気が逸つて早くもズボンに手をかけている者さえいた。

「あつ、あ、あああ……ひひひひひひっ!!」

観客席数は百や二百どころではなく。ララノアは正確な数など知らないが、千は下らない。そんな人数が、たった二匹の家畜を求めて押し寄せてきた。

我先にと目を血走らせ、怒号が響き、人間の醜い欲望が津波となつて闘技場を呑みこもうとしていた。

尊敬するヴィルヘルミナの変わり果てた姿を目の当たりにしたララノアは、自分の理想であり目標でもあつた騎士の末路に愕然としていたところへ、仲間だと思いこんでいたウルス

ラの裏切りを知って混乱の極みに達していた。

それと同時に、同じ東の森の国のエルフであり、ララノアよりも王家に近しく忠義に厚く、何より強く高潔であつたヴィルヘルミナを、あそこまで変えてしまった人間に、初めて恐怖した。

人間の表面的な部分だけを見て理解したつもりになつていただけで、人間の本性を見誤つていた。短命ゆえに欲望に取りつかれた醜い種族だからこそ、どこまでも残虐になれるのだ。

勝てるわけがない——と、自分が最初から詰んでいたことを理解した頃にはララノアが抱いていた反骨心は砕けており、圧倒的な力を前にして怯え、か弱い少女のように悲鳴をあげていた。

やがて息を切らせて群がってきた男たちは我先にと手を伸ばし、肢体を覆っていたボロ布を剥ぎ取る。ララノアは恐怖に顔を引きつらせながらも必死に手足をバタつかせて抵抗したものの、数の暴力の前ではなす術もなく、腕や髪を引つ張られ、痛みに悶える暇もなく仰向けにされ、足は力任せに開かされた。

「や、やだっ！ 止めろ！ 離せっ！ 離してえええっ!!」

恐怖に声を引きつらせても、気に留める人間など存在しないどころか、全員が一様に下卑

た笑みを浮かべてララノアを見下ろしていた。

「このクソ生意気なエルフをいつか犯してやりたかったんだ」

「お前のせいで俺は大損こいたんだ。ぶっ壊れるまで犯してやる！」

「ここまで生意気なエルフは久々だぜ！　せいぜい泣きわめけよなあ！」

男たちは罵詈雑言を浴びせながらララノアに掴みかかる。

ララノアのように奴隷エルフでありながらも、ここでは反抗的な態度を取る者でも一定の人氣がある。反抗的だからこそ、力でねじ伏せられて己の無力さを思い知らせながら犯したいと考えている観客が大勢いるためだ。

しかし今まではララノアを嬲り者にしようと金を積んでも一晩買うことを許されず、さらにアムラスのお気に入りで手が出せなかった。その鬱憤がアムラスの言葉によって爆発したのだ。

そのうえ、そんな男の中には、ララノアに負けた剣闘士もいた。

「てめえにやられた恨みを何倍にもして返してやる！」



「アムラスのお気に入りでだから試合に勝たない限りは手を出せなかったが、そのアムラスのお許しが出たんだ！ 容赦しねえぞ!!」

男たちは観客同士で押しつけ合いながら、ララノアにチ×ポを押しつけていく。

「いやああっ！ そんなモノ、押しつけないでえ！ やだっ、やだああああっ!!」

ひしめく男たちの中に埋もれていくララノア。襲いかかってくる無数の剥き出しの欲望に晒され、抵抗も無意味なことから女の子のような悲鳴をあげ続けた挙句、恐怖のあまりジョロジョロと失禁してしまう。

「ギャハハハッ！ 見ろよ、こいつ漏らしてるぞ！」

「クセエ、クセエよ！ ザーメン便所の分際で、なに別のもの垂れ流してんだよ！」

ララノアがどれだけ恐怖に顔を歪めようと、男たちにとっては娯楽でしかなく、無様を晒せば晒すほど、よりチ×ポを硬くしていく。

そしてある男が、周りが失禁を嘲笑っている隙に飛び出し、ペニスを握って小水に濡れた股間へ飛びこみ、愛撫もなしに無理矢理挿入してきた。

「ひぎいいいっ!？」

予期していなかった衝撃に、情けない悲鳴をあげるララノア。

他の男たちも虚を衝かれて「あっ……」と、気づいた時にはすでに挿入されていた。

すると挿入した男は、出し抜いた優越感に顔を歪めながら、怯えるララノアなど意に介すことなく、力任せに身勝手なピストンを繰り返して行く。

「んひっ！ いっ！ いああっ！ やっ！ やめっ！ やめえええっ！」

おぞましい人間に犯されて表情は引きつり、これまで誰にも聞かせたことがないほど弱々しく、甲高い声で叫んでいた。

ところが、否応なく女であることを刻みつけられた肉体は、ピストンされるたびに声を詰まらせ、間抜けな姿を披露させられてしまう。

そんなララノアを滑稽だと周囲は笑い、男はそれを見せつけるように膣肉を抉りながら突きこむ。

「オラあ！ どうだ俺のチ×ポはっ！」

男は得意気になって腰を振る。

「いぎっ、んいっ！ やっ、抜いてっ……抜いてえええ！」

そんな悲鳴とは裏腹に、ララノアは背筋を弓なりに反らし、たわわな乳房をブルンツと弾ませていた。

「バカ言ってるんじゃないよ！ 俺のチ×ポで感じてるんだろ！ マン肉締めまくってるじゃないかっ！」

悲鳴をあげつつもペニスに食らいつくララノアに嘲りの言葉を浴びせながら、男は勢いよく腰を突き出していく。

恐怖に身が竦んでいるはずなのに、肉体には甘美な快感が駆け抜け、膣肉が痺れて熱く蕩けてしまう。

「ひいんっ！ あっ、あああっ！ あっ、あはあああんっ！」

容赦なく膣穴を掻き筆られると、感情とは裏腹に勝手に腰が動いて悶えていた。

「もつと啼けよクソエルフー！」

ブルンツ、ブルンツと乳房が跳ね踊るほどに、力任せに突き上げられる。

「あぐっ！ あっ、あっ、あああっ！ やっ、やめええっ！」

どれだけララノアが泣き叫ぼうと、欲望を剥き出しにした人間には届かない。

むしろ無様を晒せば晒すほど、男たちは劣情を滾らせてペニスを押しつけてくる。

爪が食いこむほどの力で手首を掴まれて男根を握るように強制され、髪にも巻きつけられてはしごかれ、足や脇など全身の至るところにチ×ポを擦りつけられ、玩具のように扱われた。

「ブルンブルン弾んでずっと気になってたんだ！ やっぱりいい乳してるなあ！」

新たな男はララノアの upper body に跨ると、両手で乳房を握り潰すように掴み、その変形させた

乳房の谷間に挿入してパイズリを始めた。

「ひぎいいいいいい!!」

柔肉に指がめりこみ、悲鳴をあげるララノア。さらには別の男によって乳首を摘ままれ、思いきり引つ張られた。

ニヤニヤとおぞましい笑みを浮かべて見下ろす男たちに本心から恐怖するが、どれだけ身を振ろうとも数多の男たちに囚われて腕一本まともに動かすことも敵わない。

そんな男たちだが、ララノアを犯すために群がっているだけで仲間というわけではない。とにかくいきり立った男根を牝穴に突っこむことしか頭がないのだ。

「げへへ！ こりやあ使いこんでねえいいマ×コだ！」

「おいこら！ 俺にもやらせろっ！」

男が涎を垂らしながらピストンの快楽を味わっていると、横から他の男によって蹴り飛ばされた。

彼はララノアを助けたわけではない。誰もが一秒でも早く挿入したがっているというのに、いつまでも腰を振っているのが我慢ならなかったただけだ。

その証拠に、突然ペニスが抜けてまだ閉じきっていないなかつた膣口へ、男が即座に挿入してきた。

女の感触を楽しむのではなく、ただこみ上げてくる欲望を吐き出すために、押しこんできた矢先に全力のピストンを開始した。

「おら！ おらっ！ おらあ！ 生意気なエルフが！ テメエらが人間様に使われるために存在してるってことをわからせてやる!!」

「おっ!? おっ！ おんっ！ おおおっ!?」

加減を知らないペニスで突かれ、子宮が潰される。強烈な圧迫感に苦しみながらも、衝撃に合わせて間抜けな声をあげるララノア。

男たちはそれを聞いて笑い、さらに群がってくる。

「間抜けな声をあげてよがりやがっ！ そんなにチ×ポがいいのかあ!？」

「ちっ、違あ——うぼおおおえ!？」

咄嗟に否定しようと口を開いた瞬間、それを狙ってペニスを挿入された。

口に押し入ってきた肉棒も容赦はなく、喉奥まで突かれて苦しさで吐き気、酸欠に喘ぐララノアを愉快そうに見下ろしてピストンを繰り返して来る。

「おおお!! んごっ……ぶふう！ んごっ、ちゅぶぶぶっ……ごほおっ!」

「口マ×コを使ってやるんだ、感謝してチ×ポに奉仕しろよ駄エルフ!」

そうやって喉奥まで押しこむたび、ララノアの顔に下腹部をぶつけられる。

縮れた陰毛に顔を撫でられて嫌悪感に目を剥くが、それ以上に口腔に充満する酸味の効いた味と牡臭さに、意識が飛びそうになる。

「ふごっ！ おええっ！ チ×ポ臭いいい……やめっ、てええええっ！」

「人間様に逆らってんじやねえよ！ エルフならチンカスを綺麗に舐め取りやがれ！」

さらには両手でララノアの頭を掴んで捻じこんでくる。

「おぶう！ おごっ、チ×ポきたにやいいい——んごっ、おぶぶぶぶっ!!」

ペニスに喉を突かれてえずいている間も、膣穴を埋め尽くす肉棒は激しく出入りを繰り返して子宮を揺さぶってくる。

呼吸が詰まるほど苦しく、乱暴に扱われれば扱われるほど己の無様さと恐怖に涙が止まらないというのに、ゾクゾクと背筋の震えが止まらなかった。

「もっとしっかり舐めろよオラア！」

「後がつかえてんだ、とつととしやぶりやがれクソエルフがっ！」

「ぐぶぶっ、んじゅ、おげえ、んぐっ！ おごごっ！」

嘲りの言葉を浴びせられ、口腔は男根に埋め尽くされてまともな声を発することもままならなかった。

（どうしてこんなことにい！ こんな臭い人間のチンカスを舐めるなんてありえないのに

っ！　こんなの私じゃない！　いやだ！　助けて、助けてくださいヴィルヘルミン様あああ
っ！)

汚物の味が口の中に広がり、恐怖や嫌悪感に震え上がりながらも、下腹部の奥に生じる甘い痺れの存在を無視できなかつた。

強烈な臭気と膣穴を抉られる衝撃に頭が芯まで茹だるようで、どれだけ己の中でありえないと言ひ聞かせても、犯されて牝として快楽を刻まれた肉体は、痛みさえ甘美なものに感じられてしまう。

「いいぞ！　やりやできるんじやねえか！」

口内の肉棒が脈打って男の声の上擦るが、ララノアは何もしていない。彼から動いて勝手に悦んでいるだけだと、決して自分から舌を動かしているはずはないと言ひ聞かせる。

「オイ！　先にマ×コに嵌めてる俺を忘れてるんじやねえ！　イキそうなんだろう？　オラツ、オラア！　人間様のザーメンが欲しいんだろお！　だったらしつかりマ×コ締めてイカせてみろっ！」

「い、いやっ……イヤああっ！　わ、私は——あぶぶっ！　うぶえええっ！」
「マ×コのくせに口答えしてんじやねえ！」

悲鳴をあげるララノアへ向けて、罵倒と共に喉奥へチ×ポを捻じこまれる。

ララノアを構成していたエルフとしての尊厳が悲鳴をあげているというのに、駆け巡る愉悦に全身が強張ってしまふ。

「うおおっ！ 出すぞ出すぞお！」

「やつ、やめえ！ おぶつ、んぐう……やだつ、やだああつ！」

おぞましい射精宣言に頭を振って拒絶の意を示すが、それがかえってペニスを刺激してしまい、口内で一際大きく跳ね上がった。

「子宮にもたっぷり出して孕ませてやるからなあ！」

「ひぎいいっ、いやつ、妊娠やだああつ！ 人間の子供なんてえ——ああああつ!? で、で、でりゅううっ！ ザーメンがつ……あああつ、やめっ！ ださないれえ!!」

ドクドクと熱い精液が膈内へ流れこんでくるのがはつきりと伝わってきた。

なす術もなく家畜のように種付けされ、絶望感に涙が止まらないというのに、子宮が戦慄いて体の芯から熱いものがこみ上げてくる。ありえないと頭では何度も否定を繰り返すものの、心と体の乖離に頭がおかしくなりそうだった。

どれだけ現実から目を背けたくても、埋めこまれる肉棒によって意識を引き戻され、否応なくその存在感を思い知らされていく。

「くうう、こっちもイクぞ！ 胃が膨らむくらい、たっぷり注いでやるよお！」

宣言と同時にペニスがビクンツと弾むと、男は無遠慮に喉奥へ精液を叩きつけた。

「げふっ!? おっ、おごおおっ! おっ、ぐっ、ぐむう、げほっ、げぼおおっ!」

喉に絡みつく刺激と濃厚な臭気に嘔吐感がこみ上げてくるが、根元まで捻じこまれた男根によつて無理矢理押し止められる。

「美味いか俺のザーメンは?」

男は射精の満足感に眩き、ブルツと身を震わせて最後の一滴まで吐き出した。

「うっ、出るう——おおっ!」

絶頂感が伝播したように、連鎖的に他の男たちも全力で腰を振り立て、髪や手、足や腋に白濁の粘液を迸らせる。

ねっとり肌を滴っていく粘着質な感触に怖気づきつつ、とにかく彼らが少しでも早く自分から離れてくれることを願いたかった。

「おいおい! こんなペースじゃいつまで経ってもやれねえぞ!」

現実是非情である。ただの穴として扱われるララノアには、安息などありえない。

会場を埋め尽くすほどの男たちに対して使える穴の数が圧倒的に足りない。それは最初からわかりきっていたことだが、勃起チ×ポを持って余している者たちが目の前の肉穴を手放すはずがなかった。

ララノアが他の男の白濁に塗れていようと、平然と腕を掴まれて引きずられ、また別の男たちに組み敷かれる。数の暴力の前に抵抗など叶うはずもなく、再び膣内へペニスを埋めこまれた。

さらにはララノアの背後から別の男が覆いかぶさり、男根を尻穴に押し当ててきた。

「いひいひいっ!？」

そしてそのまま躊躇することなく尻穴を貫かれ、メリメリと肛門が広げてくる熱い塊。腸内を遡ってくる感覚に瞳を大きく見開いた。

「くはっ、ケツ穴もすんなり入りやがる！」

名も知らない人間にサンドイッチされる気持ち悪さとは裏腹に、広げられた穴はビクツ、ビクツと痙攣してペニスを食いしめてしまう。

「いやっ、お尻が！ 私のお尻があ！ あああっ、いやあ！ もういやなのお！ 助けて！ 誰かつ……ヴィルヘルミナ様！ 助けてくださいヴィルヘルミナ様あ!!」

敵である人間に犯されているにもかかわらず、穴を一突きされるたびに背筋を駆ける痺れは恐怖でしかなく、ララノアは救いを求めて白濁に濡れた手を必死に伸ばした。

そこには解放軍として志を抱いていた頃の毅然とした姿は皆無で、ただ目の前の悪意に震えるだけの無力な少女でしかなかった。

「おい、向こうのエルフが助けを求めてるぞ？」

「吾はあんな小娘知らにやいっ！ チ×ポのほうが大事だ！ 久しぶりのアムラスのチ×ポだったのにい！ いつも小屋に来ててもアルフィリアを、あの牝豚ばかりかまって、あんなガバマンよりも吾のほうがチンコキ得意なのにい！」

騎士侯爵家の生まれであるヴィルヘルミナは、幼少期の頃からアルフィリアと姉妹のように一緒だったと聞いていたが、彼女は平然と牝豚呼ばわりをして罵っていた。

数多のペニスに囲まれているヴィルヘルミナは甲高い声で啼き、射精が近いモノから率先してしゃぶり、手でもしごいて吐精を促していく。そのうえ男たちの劣情に満ちた視線を浴びて肉欲を滾らせ、張り詰めたボテ腹以上に肥大化した乳肉を揺すって身悶える。

「ヒデエこと言うな。知り合いじゃないのかよ？」

「おっ、おほお、どうでもいい！ 吾はチ×ポ穴だから、アルフィリアとか、騎士だとか、チ×ポの前ではゲロ以下でしかないんらあああつ！」

「あ……ああ……」

ララノアは震えが止まらなかった。

目標であり、理想であったヴィルヘルミナが、かつての面影すら感じられないほどのチ×ポ奴隷と化していた。

彼女への憧憬を精神的支柱としていたララノアにとって、もつとも信じたくなかった現実に、嗚咽が止まらない。ところが周囲の男たちはそれを許してくれなかった。

「——ひぎいいいっ!?! いぎっ、いひいいいっ!」

突き上げられたペニスによって子宮を潰され、衝撃に体が仰け反ってしまう。

「ギャハハツ! 泣きながら感じてやがる! チ×ポが泣くほど気持ちよかったか!」

男たちは好き勝手に動き、快楽を楽しんでいる。そしてヴィルヘルミナはそれこそ幸福とばかりに受け入れていた。



彼女の表情からは一切の憂いが感じられず、心の底から奴隷であることを悦んでいるようにしか見えない。ララノアは自分もただの物で、男を楽しませるためだけの存在に思えてきた。

「きひひっ！ 俺も膣内に出してやる！ 人間様の子種で新しい奴隷を産めよ！」
しかし依然として妊娠に対する恐怖までは拭えず、しきりに首を振って訴えるが、所詮奴隷の戯言だと、容赦なく膣内射精される。そしてそれを皮切りに、アナルや口、胸にも射精され、乾きかけていた粘液を上塗りしていく。休む間もなく次の男が射精した男たちを押しつけ挿入してくる。

「抵抗すんじゃないやねえ！ エルフはチ×ポ突っこまれてよがってればいいんだよお！」
全力でペニスを突かれ、子宮が歪まされる。

「あひひひひひっ！！」

エルフの誇りも騎士の矜持も、人間の欲望の前では等しく無力だった。

東の森の国が敗戦した時点で、ララノアたちは何もかも捨てて人間の魔の手が届かない秘境へ逃れてひっそりと暮らしていればよかったのかもしれない。

誇りや矜持に駆られた結果が、この有様である。

だがもう何もかも手遅れだった。

たび重なる凌辱の末、快樂というものを刻みつけられた肉体は、乱暴にされても己の意思とは関係なくアクメを決めてしまう。どれだけ体を鍛えて鍛錬を積んでも、牝である以上チ×ポには抗えないのだ。

騎士として最も高潔で気高いヴィルヘルミナの変貌が、それを証明していた。

ララノアも、代わる代わる犯される恐怖と絶望に泣き叫びながらも、肉体が勝手に悦楽の頂へと達してしまふ。そしてそれは、祖国の再興を願い続けた百七十年間が無意味なものであつたと、己のすべてが否定されているようで目の前が真っ暗になった。

あれからどれだけ経つただろうか。

腔内射精も五十人を超えたあたりから記憶がなかった。

犯し尽くされた子宮の中では、誰のものか判別できないほど大量の子種が混ざり合っている。腔穴からはザーメンが溢れ、こじ開けられたアナルはペニスの形に開いたまま、浣腸の如く押しこまれたザーメンを脱糞のように垂れ流し、えずいては口からザーメンのゲロを吐いていた。

ララノアは精液の海に突っ伏し、繰り返される苦痛と無理矢理引き出される絶頂に痙攣を繰り返していた。

しかし人間の凌辱は終わらない。射精してもすぐ新しい肉棒が挿入された。

いつしかララノアは、何度も己に言い聞かせていたエルフや騎士の誇りも忘れて、ひたすら怯えて少女のように泣くばかりだった。

「あああつ！ やだあ！ もうやだああ！ もうやめてえ！ 誰か助けてええっ！」
殺したいほど恨んでいた人間に助けを求めてしまうほど、ララノアの心は追い詰められていた。

「この程度で音を上げるなんて、情けないですね」
不意に優しい声がかげられた。

いつの間にか穴という穴を塞いでいた肉棒の感覚も消えており、ララノアが白濁に塗れた顔を上げると、そこにはウルスラが立っていた。

たとえばエルフであっても、彼女がこの闘技場の管理人だと周知されているのか、あれほど荒ぶっていた男たちが、一齐にララノアから離れていた。

彼女の姿を視界に収めると同時に、アムラスの言葉が脳裏を過った。

ヴィルヘルミナを肉鎧にすることを提案したのが、ウルスラだという言葉。

「う、ウルスラ殿っ……本当、なのですか？ あなたが——うぎいい!？」

ところが言葉を紡ぐよりも早く、彼女はヒールで思いつきりララノアの顔面を踏みつけて

きた。

絶頂の熱に茹だっていた思考が激痛によってクリアになる。それと同時に、豹変した態度がすべてを物語っていると悟った。

「そうですよ。あなたの知る情報を手に入れるためですから」

ララノアの疑問を察して、淡々と語るウルスラ。

「いぎい……ど、どうして……私は、アルフィリア様をお救いするために……」

「アルフィリア様を救う……？ 殿下を誘拐した反逆者がよくもぬけぬけと」

その瞬間、ウルスラの表情がはつきりと歪んだ。しかしそれはほんのわずかな出来事で、足をどけると今度はララノアの髪を掴んで無理矢理頭を持ち上げられた。

「ゆ、誘拐？ は、反逆者？ なにを、言つて……？」

プチプチと髪が千切れて痛みに見舞われるが、ララノアはそれ以上に様子がおかしくなつて意味不明な言葉を口にしたウルスラに恐怖した。

「アルフィリア様が森に帰りたいたいとおっしゃったかしら？ 少なくとも私がお世話している四十年間は一度だって言われなかったわ。アルフィリア様の意志に背くのは反逆者のすることでしょう？」

口調こそララノアの知る優しいもので笑顔も崩していないが、ウルスラの瞳はドス黒い感

情で満ちていた。

「う、ウルスラ殿……?」

「アルフィリア様が望まれているのは尽きることのない快樂。あの家畜小屋こそアルフィリア様の理想郷だと、どうして理解できないのです?」

「それでは、東の森の国は……」

「あなたたちは頭がおかしいのよ。王家がおられる場所こそが国……つまり、あの家畜小屋こそ私たちの国であり、王宮なのよ」

王族の元侍女だったウルスラの忠誠心は、何百年経とうと風化してはいなかった。しかしその汚泥のように底の見えない瞳と同様に、恐ろしいほど歪んでいた。

「あろうことかアルフィリア様をあの家畜小屋から連れ出そうとする……そしてアルフィリア様と弟君ビョルン様との御子……王家の正統な血筋の御子を誘拐するなんて……許せるわけがないでしょう?」

「ひっ……!」

ウルスラが目を細めると、ララノアの口から小さく悲鳴が漏れた。

その瞳だけで人を殺せてしまいそうなほど、強烈な殺意がこめられていた。

「大事な御子と引き離されたアルフィリア様……そして母君の愛を知らずに育てられてしま

ったお二人の殿下……なんとおいたわしいことでしよう」

悲痛な面持ちで空を見上げ「ああ、殿下……必ず私がお救いいたします」と、当時窮地に駆けつけることができなかつた己を悔やみながらも、ウルスラはまだ見ぬ二人の王子に思いを馳せる。

(なにを、言っているの……?)

ララノアは、彼女が狂っているとしか思えなかつた。

セックス依存症のチ×ポ中毒に堕ちたアルフィリアたちは、もはや家畜小屋以外の場所では生きていけないと思っている。そんな彼女たちのために、チ×ポを献上することこそが、王家に対する忠誠だと信じて疑っていないのだ。

これほど歪んだ忠誠心を抱いたエルフがいたとは、思いもよらなかつた。

気質はあのシャウアに近いが、ウルスラはまた別の異質な存在に感じられた。

だがそんな彼女の言葉が、脳裏にこびりついて離れない。

「アルフィリア様はあなたたちに救ってほしいなんて、考えていませんよ」

耳元で囁かれたウルスラの言葉が、ララノアの心を侵食していく。そのことは薄々感じて

いたが、気のせいだと思いこもうとしていた。

シャウアも言っていたが、アルフィリア姫は助けを求めていなかった。

それどころか家畜のように扱われ、遅しいペニスで突かれていた彼女は悲鳴をあげるどころか、嬉々として自らねだり、犯されることを悦んでいた。

それは勘違いだと思った。

人間に乱暴されて、無理矢理恭順させられているのだと思いこんでいた。

(もし、もしも……あれが心から望んでいたことだとしたら……)

ララノアの瞳に涙が浮かんでいく。自分がなんのためにここにいるのか、アルフィリアを救うために費やした苦難の百七十年はなんだったのかと。改めて抱いてしまった疑念は、もはや拭うことは不可能だった。

「ほら、あなたの敬愛するヴィルヘルミナ様をごらんなさい」

依然として、ヴィルヘルミナは男に群がられていた。

肥大化した乳房に黒く醜く変形するほど使いこまれたマ×コ、そして人間の子を孕んでいるであろうポテ腹を揺らしながら、ララノアが泣き叫びながら犯されている間も、彼女は輪姦による快楽を享受していた。

ララノアはゾツとした。

アルフィリアもヴィルヘルミナもこの百七十年間、これまで何百、何千という人間に犯されてきたのか、何人の子供を産まされてきたのか。それらの地獄を想像し、今になって理解してしまった。

ヴィルヘルミナもアルフィリアも、そして目の前にいるウルスラも完全に壊れてしまっているのだと。

ララノアが苦難だと思っていた百七十年間など、比べるのもおこがましい。

シャウアが言っていた「人間たちの短命ゆえの絶えることない肉欲への渴望……子を生ずことよりも一時の快樂のために肉を貪る」という意味を今になって理解した。

解放軍の計画はアルフィリアの救出が前提であるため、東の森の国の再興は露と消え、すべてが無駄だったと悟ってしまった。

誇りのため、そして同族のエルフを守るために自害したところで、ララノアたちの悲願は永遠に成就することはないのだ。

これからは延々と続く凌辱があるだけで、心の底から恐怖して震え上がった。

「あなたには殿下の居場所についてお話していただきたく思っていますが……まずはこの輪姦劇を楽しんでくださいませ」

ウルスラは竦みあがるララノアに満足気に頷くと、悪魔のような笑みを浮かべる。

「あなたがお話したくなるまで、ゆっくりと待つことにしましょう。安心してください、時間はず〜〜〜つぷりとありますので」

「ひい！ ひいひいっ！ いやっ、助けて！ なんでもするからあー！」

再び輪姦が始まることに恐怖し、周囲を取り囲む男たちの肉棒がピクピクと震えているのを見て、地べたに這いつくばって許しを懇願するララノア。

「おい、待てよ」

するとアムラスが男たちを押しつけ、割って入ってきた。

今にもララノアに飛びかかろうとしていた男たちでも、チャンピオンであるアムラスに逆らうことがどれだけ愚かしいか理解しているため、一様にララノアから離れる。

ウルスラも横槍を入れるアムラスを窘めることはせず、苦笑して距離を取った。

「お前にチャンスをやる。この俺様に忠誠を誓う奴隷になるなら助けてやってもいい」

突然の提案に、ララノアだけでなく周囲の男たちも驚いた。

闘技場チャンピオン程度の地位で満足するアムラスではない。バリステン王国でさらなる地位に上り詰めるためには、東の森の国の残党の手がかりであり、北の森の国との繋がりがまです持っているララノアは有用な駒でもある。

その褒美として、手元に置いて飼ってやるというくらいの恩情をかけるのはやぶさかでは

なかった。

結局奴隷に堕ちることに変わりはないが、確実なのはアムラスの所有物になれば他の男たちは、ララノアに容易に手が出せなくなる。

アムラスのせいで始まったこの凌辱劇だが、心身共に疲弊しきっていたララノアにとって、彼の言葉が救いにしか聞こえなかった。

ヴィルヘルミナほどの騎士が耐えられなかった地獄の日々を、ララノアが耐えられるはずもない。数多の男たちに犯され続け、誰のものとも知れぬ子を孕み、産まされる。そして何より——彼女たちのように壊れてしまうことが何より——恐ろしかった。

ララノアはボロボロと涙を流しながら一片の迷いもなく、精液が広がっている地面に頭を打ちつけて土下座した。

「私を、私をあなた様の奴隷にしてくださいっ!!」

代わる代わる犯され、永遠とも思える快樂地獄から救われるのなら、エルフの誇りも、国の再興もどうでもよかった。

アムラスは強い。そんな彼の所有物になれば相応の安全が保障されるのだ。

ララノアは、己のすべてをかなぐり捨てて懇願した。

「くははっ！ いいぜ。そこまで言うなら飼ってやらんでもない……がお前、その汚ねえマ

×コでご主人様とやるつもりかあ？」

ララノアの膣穴からは、依然として他の男たちのザーメンで溢れ、垂れていた。

「す、すみません！ すみません！ 今すぐザーメン綺麗にしますから！」

ここでアムラスの機嫌を損ねれば終わりだと、ララノアは顔を青くして立ち上がり、精液を掃除するのがよく見えるようにガニ股になって膣穴へ指を突っこんだ。

「おいおい必死だな……くくつ」

アムラスは愉快に笑うが、是が非でも彼の奴隷にならないララノアはがむしやらに膣穴を穿り白濁液を掻き出していく。ところが、散々輪姦されてアクメを繰り返して敏感になっており、弄るたびに甘美な刺激が沸き起こり、思うように力が入らない。

「あひいいいっ！ んんんう、いやっ、いやあ！ なんで、どうしてええっ!?! オマ×コ綺麗にしないと奴隷にしてもらえないのにつ！ あっ、あっ、感じてる場合じゃないのにい！」

早くしなければアムラスの気が変わってしまうかもしれない。焦燥感に駆られたララノアは泣きながらザーメンを掻き出していくが、生じる快感を抑えきれない。そして穿っても穿っても、膣奥からザーメンが溢れてくる。

「くくく。ザーメン掃除ならもつといい奴がいるぜ。啜るのが得意な豚がな」

そう言つてアムラスが目配せすると、離れた位置で犯されていたヴィルヘルミナが啞えていた肉棒を吐き出すと、汗と白濁に塗れたまま駆け寄つてきた。

「ああ、吾にザーメンを飲ませてくれるのか!? 任せてくれ、啜るのは得意だあ！」

よそで他の男のペニスをしやぶりながらも、アムラスの声はしつかりと聞いていたヴィルヘルミナは、指示を受けるまでもなく自ら口を大きく開け、ねだるように舌をレロレロと卑猥に動かし始めた。

「ヴィ、ヴィルヘルミナ……様？」

わずかだが、ララノアはさすがに躊躇した。

もう元には戻らないほど壊れているとはいえ、かつては敬愛した相手である。

「おい、早く使え。そのための豚だ」

しかしアムラスにとってはチ×ポ狂いの豚以外の何者でもない。一瞬戸惑いはしたものの、すでにララノアの中でも優先順位は決まっていた。

敗戦した時点ですでに、ララノアが憧れたヴィルヘルミナは死んだのだ。

もはや未練はないと、己に証を立てさせるように、マ×コを彼女の口へ押しつけた。

「ああおっ!? ヴィルヘルミナ様が、私のオマ×コを舐めてるう! あお、おっ、あああ
あつ! 舌がウネウネ動いて、ザーメン吸われてえ——うひひひいっ!!」

ヴィルヘルミナもララノアの腰に腕を回してしがみつき、股ぐらに顔を押しつけて舌を潜りこませて膣穴を穿り、ジユルルルツと粘膜にこびりついた精液を吸い上げた。

もう壊れてしまったと頭では理解していても、あの凜々しかったヴィルヘルミナとは思えない、下品で無様な姿に一抹の悲しさこそ感じたものの、次の瞬間にはララノアも目くるめく快感に襲われて目を剥き、甘美な悲鳴をあげていた。

そのうえ、ビクビクツと腰を震わせて淫液を飛び散らせた。

かつての憧れの存在に恥部をしゃぶらせている背徳感に震えが止まらず、ララノアは早々にアクメに達する。騎士として、エルフとしての誇りも投げ出して、淫靡に表情を蕩かし、涎まで垂らしていた。

「まさかもうイツたのか？」

あまりのスピードアクメに、アムラスも驚いていた。

ララノアとしてもこれほど簡単にイカされるとは思わなかったが、淫液が噴き出すと共に膣奥のザーメンも押し流していた。

勢いよく口内に粘液の塊が飛びこんできたことで、功労者であるヴィルヘルミナも驚いて咽せていたが、今はそれどころではない。

ヴィルヘルミナを押しつけ、ララノアはアムラスに向かって股を開き、綺麗になったマ×

コを指で左右に広げ懇願する。

「どうか、どうか私のオマ×コをアムラス様だけのものにしてくださいっ!!」

「最後に聞くが、解放軍はいいのか？」

「もうどうでもいいですう！ そんなことよりも、アムラス様のチ×ポ奴隷になれるなら……私は幸せですっ！」

ララノアにはもう何も残っていない。その言葉が真実であることを示そうと、腰を振って膣穴を使って奉仕ができる喜びをアピールする。

「幸せか。俺の奴隷になることが、それほど嬉しいか？」

「はいっ！ アムラス様のオチ×ポを鎮める役に立てるなんて、幸せで嬉しいです！」

まだそこまで割りきれたわけではないが、周囲を取り囲んでいる男たちによって心に深くまで刻みつけられた暴力から逃れるための服従——という面が大きいはずだったというのに、自らの宣言に子宮がジンジンと痺れて熱く燃え上がっていた。

アムラスの熱いペニスを思い出すだけで、下腹部が痺れて疼いてくる。

「おい、あのクソエルフ、奴隷宣言しただけでマ×コを濡らしてないか？」

「たったあれだけで、スケベな汁を垂れ流してるぞ!？」

惨めな姿を晒している自覚はあるが、こんな状況ですら悦んでしまう己の肉体に心を打ち

のめされた。

（エルフは劣等種族……人間に穴として使われる存在……）

ララノアを犯しながら言い放っていた男たちの言葉が脳裏を過る。しかし今は不思議と不快に思えない。自ら膣穴を広げ隷属を懇願している姿は、まさにその通りだ。

現にヴィルヘルミナは、ララノアから精液を啜り終えた後、相手にされないと理解した途端、傍にいた男のペニスにしゃぶりついていた。

奴隷に無駄なプライドは必要ない。もう何も守るものがないのだから、それが正しいエルフの姿なのだ、自然と思考に浸透していった。

そしてすべてを見透かしたように、アムラスは下穿きを脱いで凶悪なペニスを晒す。

ビクンツ、ビクンツと脈打って天を突く圧倒的な存在感は、周囲の男たちとは比べ物にならないほど逞しく漲っている。アルフィリアやヴィルヘルミナを虜にし、ララノアの処女も奪った最凶の肉棒だった。

「俺が飼ってやるんだ、使えなければ浮浪者の溜まり場にも放りこんでやるからな！ 自分の価値を証明してみせろ！」

アムラスは言い放つと、ララノアを抱え上げて巨大な肉の柱を膣穴に埋めこんだ。

「あひいいいっ!! い、あつ、あああつ……アムラス様のオチ×ポで、オマ×コがパンパン

ですう！ んお、お腹の奥まで……逞しいオチ×ポお、お迎えできて嬉しいっ、嬉しいですっ！」

一息で淫液を押し出して撒き散らすほど力強く、子宮を大きく^ひ拉げさせた。

「そんなに嬉しいか？ さつきまでお前を犯していた男たちとどう違う？」

「ああ、おっ……ぜ、全然違いますう！ 全部アムラス様と比べるのもおこがましいくらい貧弱でえ……お腹の中がアムラス様の形になっているのがわかります！」

衆目環視の中で貫かれるララノアは、次々と犯された恐怖を払拭するように膣内を埋め尽くすアムラスの存在感を噛みしめながらしがみつき、自分は彼の所有物であると大声で礼賛する。

「マジでアムラスは専用のチ×ポケースにするのかよ……」

「俺の番、次だったのによお！」

悔しがる男たちを傍目に、自身の有用性を積極的に示していくララノア。

「アムラス様あ！ この体はあなた様だけの穴です！ いっぱいご奉仕しますから、私を捨てないでくださいっ！ どうか、身の程を弁えなかった愚かな家畜に、立派なオチ×ポをたっぷり突き刺して躰けてくださいっ！」

周囲の視線を浴びていると、先の輪姦がどうしても脳裏を過る。だからこそララノアは忠誠の口上を止めなかった。

「くくつ……そうだな！ お前は家畜で、俺の所有物だ！」

アムラスは抱えたララノアを固定してペニスに渾身の力をこめていく。漲って膨張している海綿体は子宮口を穿つ。

「ああ……つ、そ、そうですね！ 私は卑しい豚です、家畜ですね！ そしてアムラス様の所有物でペットですうううつ！」

抗う術もなく蹂躪され、ねじ伏せられ、自らを貶めてもなお、肉の悦びが絶え間なく脳天まで響いてくる。

（やっぱり、エルフは人間のチ×ポケースなんだ……奴隷こそエルフの本懐……！ チ×ポさえ、このチ×ポさえあれば私はもう……つ！）

余計なことを考えてしまうから苦しくなる。奴隷には自由意志など必要ない。肉棒で貫かれる快樂のことだけを考えていけばいいと、徐々に激しさを増す抽送に振り落とされないよう官能に痺れる四肢で懸命にしがみつく。

「なかなか悪くない。いい締めつけ具合だ……だから俺もあまり遠慮はしない」
すると次の瞬間、これまでにない勢いで肉の柱を体内へ埋めこまれた。

「ひぎっ、あおおおおっ！ 強い、きたあ！ あっ、あっ、あお、おううんっ！ オマ×コ扱られるううう!!」

断続的に、意識が白く瞬くほどの衝撃に見舞われ、内臓が押し上げられて口から飛び出し、そんな錯覚さえ生まれる。

凡百の男では味わえない、強烈なピストンに蕩けた瞳が裏返りそうになる。

一突きごとに子宮を上げられて淫液を噴く。

「んほおおっ！ おっ、おぐっ！ な、内臓まで響くう！ ふぎい、お腹の中がシエイクされてるみたいでっ、んお、おごおおっ!!」

ボヂユツ、ボヂユツと、容赦なく亀頭を叩きつけて子宮を抉り、押しこむ。

快楽を求めるためにララノアをただの物として、乱雑に体を激しく揺さぶって膣穴を掻き回す。鍛えていなければ、か弱い女であれば命すら危うい暴力と言っても過言ではないだろう。しかしそんないつ壊されてもおかしくない扱いでさえ、快感として肉体を駆け巡った。

「あ、あれで平気なのかよ……」

「アムラスの本気で壊れない女なんて、初めて見たぞ……」

「くくっ、俺の奴隷になるならこの程度で潰れるわけがないよなあ！」

アムラスは唾然とするギャラリーに気をよくし、腰のストロークを大きく、速度を上げて

ララノアの膣奥へ突き刺していく。

「へぶっ！ おごごっ！ んあ、アムラス様っ、アムラス様あ！ わ、私のっ、奴隷の穴の使い心地は、いかがですかあ！ あおおっ、おぎい……オチ×ポを気持ちよく、できてますかあ！ 濃厚で強い子種え、ただけますかああっ！」

子宮を叩きのめされ、結合部から粘度の増した淫液が大量に溢れて足元に水溜まりを作り上げるララノアは、かつてない強烈な快感に悶絶する。

「身の程を弁えろ。奴隷ならねだるな！ 俺のチ×ポを射精させてみる！」
ララノアを掴むアムラスの手の力が、さらに増した。

彼がまだ本気ではなかったことに戦慄する。しかしそれと同時に、これ以上の快楽を与えられるかもしれないという期待感に、ララノアは叫んだ。

「ふぎいいっ！ 頑張りますう！ オマ×コ締めて、たくさんオチ×ポにご奉仕しまうからっ！ 壊れるくらい使い倒して、ドピュドピュ射精してくださいいいっ！」
「なら望み通り壊してやるよ！」

アムラスが本気のピストンを開始した。

ただの一突きが子宮を貫かんばかりの剛力で意識が飛びそうになり、あまりの衝撃にしがみついていた四肢から力が抜け、弾力に富んだ乳房と同様に跳ね踊った。

まるで壊れた人形のように、骨が折れるのではないかと思うほど激しく揺れていた。

「おびよおおおっ！ し、子宮を存分にぶちのめしてくださいいいんっ！ おぼっ、オチ×ポ串刺しいっ！ オチ×ポしゅごいっ、しゅごいれすアムラス様あっ!!」

獣と化した二匹の壮絶な光景に、男たちは牡としての格の違いに戦慄き、圧倒的な強者に憧憬する。

「わ、私の奴隷マ×コっ、気持ちよくできてましゅかあ？ あぎっ、おほおおんっ！ ご主人様の逞しすぎるオチ×ポで子宮をメチャクチャにされてえ、私は幸しえものれすううっ!!」

「クハッ、お前なかなか使えるじゃないか！ いいぞ、俺の奴隷に認めてやるぜ！」

「んほおおおっ!! おひっ、ああんっ！ ど、奴隷ですう！ 私は、あなた様の家畜で、チ×ポケースでしゅううっ！ あはっ、あっ、嬉しすぎてもうっ……ああ、ザーメン欲しい、欲しいれすう！ アムラス様っ、アムラスしやまああんっ!!」

認められて感激するあまり、ゾクゾクと全身で快感が荒れ狂った。

支配され、服従する悦びに子宮が感極まっていた。

「ハハハッ！ 出してやるからマン肉で絞れよ！ オラッ、絞りやがれえ！」

無我夢中で膣内を収縮させたのが功を奏したのか、アムラスのペニスも大きく脈打ち、ト

ドメとばかりに深々と突きこまれた肉棒から濁流のように精液が噴き出し、ララノアの体内を蹂躪した。

「おほおおおおおおつ!! おぎいいつ、あつ、あああつ! じゃーめんつ! じゃーめんつ! おほお、おおつ! しゅごつ、しゅごいいつ! アムラスしやますごしゅぎてっ! アクメつ、アクメがとまらにやいいいっ! んぎい、イグツ、またイグううっ! イギまくりいいいいいんっ!!」

「これが欲しかったんだろ! しつかり受け止めて孕みやがれ!」

「ほぎいいいっ! 子宮パンパンに膨らんでりゅうう! おつ、おほおお……幸せ、幸せえ……うへへえ、奴隷アクメ幸しえすぎましゅうう……!」

精液を漏らすなとばかりに結合部が密着し、許容量を超えて吐き出された精液が子宮を膨張させる。ララノアの腹部は妊婦のように膨れていた。

無理矢理子宮を引き伸ばされて苦しいはずなのに、ララノアは恍惚の表情でアムラスの射精を受け止め、涎と鼻水を垂らしながら『幸せ』と喘いで快楽に溺れる様は知性も理性も欠如しており、まさしく家畜だった。

「あ、ああ……あへええ……」

全身全霊で絶頂を極めたララノアは意識を飛ばし、アムラスに抱えられながら力なく弓な

りに仰け反る。首はガクリと倒れ、四肢は力なく垂れ下がった。瞳は完全に裏返り、小刻みに痙攣しながらうわ言を呟いているが、聞き取れるものではなかった。

「……まあ、こんなものだろう」

アムラスはしばらく余韻を楽しむと、手を放してララノアを落下させる。ドシンと鈍い音が響き、頭や背中を打ちつけていたが見向きもせず、一部始終を眺めていた男たちに顔を向けた。

「俺は前言を撤回するつもりはない。コレは俺の奴隷だが、今日だけはお前たちが好きに使え」

その言葉の意味を理解した瞬間、闘技場が震えるほど沸き、今までアムラスに圧倒されていたのが嘘のように、勃起した男たちは目を血走らせてララノアに殺到した。

——数時間後。

闘技場の中央で、ララノアとヴィルヘルミナの二人は、まるでカエルのように股を広げて横たわっていた。

千人を越える男たちによる淫辱の宴によって絶え間ない悦楽に意識は飛び、ろくな反応もできずに全身がザーメンの沼に沈んでいてもなお、肉欲に駆られた男たちは二人を嬲り続け

ていた。

身動き一つせず焦点の合わない瞳で天を仰ぐ二人。腔穴を肉棒で突かれても小刻みに痙攣を繰り返すばかり。それでもヴィルヘルミナは元より、すべての柵から解放されたララノアは、心の底から幸せそうないき顔を晒していた。



「——所詮こんなものよね」

貴賓室で一部始終を見ていたシャウアは、つまらなそうに呟いた。

ララノアの快樂墮ちは予定調和であったが、エルフの誇りだのとあれだけ啖呵を切ったのだから、多少なりとも抵抗というシヨを期待していたのだが、結果はごらんの有様でしかなかった。

そしてすぐに興味を失い、控えていた執事に煙管の火を点けさせ、これから忙しくなるであろう奴隷市場に考えを巡らせていると、ウルスラが現れた。

「あの娘が解放軍について、知る限りの情報を吐きました」

「……本当に、呆気なかったわね」

「まったくです」

ララノアが一旦意識を取り戻した折、また別の男たちに犯されていることに驚愕していたが、アムラスに解放軍の情報を吐けば終わらせてやると言われると、躊躇することなく洗い浚いすべてを話してしまった。

「それじゃ、狩りの準備をしなきゃね」

これからのことに思いを馳せて、嬉しそうに笑うシャウア。

「ところで、お約束の報酬はいただけるのでしょうか？」

そう言つて、ウルスラは真剣な眼差しでシャウアを見つめる。

「ああ、解放軍の中に欲しいエルフがいるんだっけ？ 誰だか知らないけど、無事に捕まえたらあなたにあげるわ」

シャウアの言葉に、にんまりと笑みを浮かべるウルスラ。

「ありがとうございます。私にとって最も大切なお二人ですので……」

ララノアだけではなく、実はウルスラもシャウアと取引をしていた。

解放軍の情報を引き出し、そのエルフたちを捕らえることができた暁には、彼らの中にいるはずの二人のエルフが欲しい——と。

ウルスラは嬉々として貴賓室を出ていく。

毛の長い高級絨毯が引かれた廊下を歩きながらウルスラは一人呟く。

「アムラスがいれば家畜小屋の守りは万全。そのためにあの子を育てたのだから。いい孕み袋が手に入ったことだし今後はあの子の血を受け継ぐ強い子をたくさん産ませて私の駒にしないと。ああ、アルフィリア様……もうすぐです。反逆者共に攫さらわれたあなた様の御子を、必ず取り戻してみせます。そして我らの国で、みな幸せに暮らしましょう……永久に」

もうすぐ訪れる幸福な未来を思い描く彼女の瞳は、どこまでもまっすぐで、どこまでも光の見えない深淵が広がっていた。

エピローグ 母子、感動の再会と幸運な奴隷の王国

アルフィリアの救出に成功してより安全な場所に匿っていること、さらに御子との再会を心から願っているため二人の王子も一緒に匿いたい旨を知らせた。

ララノアがかつての東の森の国の騎士ヴィルヘルミナを信奉し、祖国復興への思いが強いことは、解放軍の同志であれば誰もが知るところだった。

そこで、ララノアが潜伏先のバルローニで味わった絶望を知らない彼らは、知らせを鵜呑みにして指定した合流地点へ、幼い二人の王子を連れた数名の護衛だけでのこのこと現れたのである。

東の森の国の再興へまた一步近づいたと胸を躍らせる一同を待っていたのは、当然輝かしい希望などではなく、シャウアが手配した奴隷狩りの部隊だった。

たった数名で一部隊を退けられるはずもなく、数の暴力の前に彼らはなす術もなく捕らえられ、解放軍の新たな情報源として尋問された後、奴隷として出荷された。

現在王都では解放軍と支援者である北の森の国への対応を協議しているが、攫われていた

二人の御子さえ取り戻せば、ウルスラは他の同族がどのような末路を辿ろうとも興味も関心もなかった。

アルフィリアのいる場所が国であり、世界であり、すべてだった。

そして百七十年前、反逆者たちによって引き裂かれた母子が再び巡り会った瞬間に立ち合い、今まさに母子は離れ離れになっていた時間を取り戻すように抱き合っている。ウルスラは長年思い描いていた光景に、感涙を抑えきれなかった。

「あああつ！ な、なにこれ!? あつ、あつ、あひいいいっ!!」

「んお、おっ！ あひい、オチンメン溶けちゃうう!!」

二人の王子は今、家畜小屋で再会を果たしたそれぞれの母親に覆いかぶさって、涙を流しながらしきりに腰を痙攣させていた。

「あらあら、お二人共、挿れただけでイッてしまったのですね。反逆者どもに囚われていた禁欲の日々は、さぞおつらかったことでしょう。今までお助けすることができず、申し訳ございませんでした。ですがご安心してください。これからはお母上であるアルフィリア様とベアトリス様はもちろん、私がずっとお世話を致します。何十年でも、何百年でも……それに種違いのご兄弟もいらっしやいますよ。なので祖国の再興という反逆者の妄言はお忘れになつて、この国でずっと暮らしましょう」

「んひいっ！ 母上！ こんなに気持ちいいの知らなかったあ！」

「熱くて柔らかくてっ！ 母さまの膣内で僕のオチン×ンが変になってるううっ！」

初めて経験する精通の快感に身震いし、涎を垂らして悶えている幼い二人のエルフを微笑ましく眺めながら、ウルスラは満面の笑みを浮かべていた。

最も愛情が必要な幼い時期に、セックスの手解き一つしていなかった解放軍に殺意さえ覚えたウルスラだったが、初々しく喘ぐ二人を見ていると一転して、自ら手解きが行えることを喜んだ。

事情もわからず家畜小屋へ連れてこられた当初こそ恐怖に怯えていた彼らだが、百七十年ぶりにアルフィリアとベアトリスと再会し、股を開く母親に促されるまま幼いペニスを挿入した途端、腰を震わせて喘ぎ始めた。

「そうです。離れ離れになっていた分、たつぷりと甘えてください。お母上たちは大変悦んで啼いていますよ……うふっ、うふふっ、ふふふふふふふふっ」

ララノアは興奮を隠そうともせず、自分の体に手を這わせながら眩き、家畜小屋で彼ら母子が仲睦まじく肉欲を貪る姿に、恍惚とした笑みを浮かべた。

「んいっ！ もっと、私の息子ならもっとチ×ポを大きく膨らませなさい！ あっ、あおっ、マ×コを抉るくらい、がむしやらに腰を振るのですう！」

「だ、ダメです母上え！ そんなに動いたら気持ちよすぎてっ、ま、またっ……………」
喘ぐ息子を叱咤し、初めてでも厳しく教育しようとするアルフィリア。

「おっ、おっ、ビョルン以外の息子チ×ポお！ そのままズボズボしてえ！ ベアトリスの
マ×コが壊れるくらいに犯してえええっ！」

「ふああっ、母さまのおっぱいっ！ ちゅ、ちゅぱっ、ちゅぱっ……………あああっ！」

今や行方知れずの息子のチ×ポと比較しながら、だらしなく肥大した乳房に顔を埋める幼
い息子とのセックスに酔いしれるベアトリス。

「えいっ！ えいっ！ んああっ、こ、これでいいの!？」

「はあ、はあ、気持ちいいっ！ これすごく気持ちいいよお！」

初めての性交の快感に混乱しながらも、二人の御子は本能的に母親に種付けをしようと懸
命に腰を振っていた。

「初めてなのにお上手ですよ。そのままチ×ポを突いて、たくさん子種をビュービューして
ください。これからここで子づくりセックスをして暮らしていくのですから。もちろん、御
二方が慣れるまでは私もサポートいたします」

ウルスラは微笑むと、必死に腰を振る二人へ手を伸ばす。

「あひっ！ な、なんで!? いひっ、ひぎいいいっ!!」

「おほお！　そこは汚いよ！　そこはお尻の穴あ——ああおほっ!?」

突然の事態に慌てるが、ウルスラは一切の躊躇なく彼らの尻穴へ指を突っこんだ。

本日何度目かの初めての感覚に、目を見開いて瞬く間に痙攣し始める。

「王家の血を色濃く受け継いだ御二方の子づくりは非常に重要な意味を持ちますので……万が一中折れなどをして自信をなくされては困ります。なので多少の失敗など気にならないほど、まずは射精の快感を覚えていただこうかと」

「そつ、それがこれと、なんの関係があ——あああつ!?」

「んいいいっ！　おつ、オチン×ン震えるう！　お尻の穴をほじほじされると、またすぐに白いおしっこが出ちやあおおおおつ!!」

ウルスラが尻穴に埋めこませた指を捻ると、たちまち全身を突っ張らせる二人。

前立腺を刺激することで精囊から精液を搾り出し、当人の意思にかかわらず強制的に射精へと導かれる。

文字通り吹き荒れる射精感に悶絶しながらも、母親にしがみついて放さない。

「おほおおつ!!　しゃ、射精しながら腰ふってりゅううっ!!」

「ぬひいいっ!?　いあつ、これ孕むう！　ベアトリス、母親なのにつ、息子チ×ポの種付け射精でイカされてりゅうううっ!!」

まだ幼く体つきは小柄でも、怒濤の勢いで吐き出される精液を子宮へ流しこまれ、否応なく牡としての力強さを思い知らされ、膣内射精の悦びに打ち震えるアルフィリアとベアトリ
ス。



普段は大人の人間や凶悪な種族に股を開いている彼女たちは、最初こそ物足りなさげだったにもかかわらず、射精を受け止めた途端に牝へと成り下がった。

涙や鼻水、涎で顔をグシヤグシヤにしながら息子の吐精に感激し、腰に脚を回してしがみつく。母親として、牝として、さらなる射精を求める表情は悦びに蕩け、母子で貪り合う姿に、ウルスラは心の底から満たされていくのを実感した。

「ふふつ、その調子ですよ両殿下。あなた様たちも私も、エルフという家畜でしかないのです。チ×ポのためならなんでもする、惨めな劣等種族……ですから皆様方のいる家畜小屋こそが我々の国であり、すべてなのです。お二人もすぐに理解することでしょう。我々は無様で卑しくも、チ×ポに奉仕することを許された幸運な奴隷であると」

豊穰の隷属エルフ　くコロシアムの贄騎士く

2020/12/1　電子版発行

著　者　山口陽

原作・挿絵　ねろましん

発　行　株式会社フランス書院

東京都千代田区飯田橋3-3-1

複製・頒布・転売等、著作権を侵害する行為は法律で禁じられており、違反した場合は刑事罰および民事罰を招来することになります。

(c)2020 Akira Yamaguchi, Neromashin, Printed in Japan.